

投稿誌

わいふ

292



グラビア ● わが家の歴史写真—早乙女光子さん

特集 ● パソコンとの付き合い

特別寄稿 ● 自分で選んだお産

座談会 ● きょうだいの序列

特別寄稿 ● 母の死に方

特別寄稿 ● 林の椅子で



超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。



只今
「わいふ」読者
受講料10%OFF
キャンペーン
実施中!

クラブネットなら目的に応じて選べる特にお得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで

パソコンができるようになる！」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに

パソコンが全く初めての方にも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどれも苦手」という人にこそ

チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか？

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引キャンペーン中！

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な

表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集め

たり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサークルとの交流をはかる など……らくらく学習で、「中級程度のパソコン技術が身に付きます」

■お問い合わせ・資料請求は

Club Net

初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10
株式会社アイデックス
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066



わいふ

読んで書いて、
みんなでつくる



わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

292号

目次

デザイン／宮塚真由美
表紙イラスト／小林正子

イラスト／ 荒田ゆり子
イシノフミ 小沢恵子
カステラネンコ
栗田笑 弘法堂建二
佐藤瑞江子 西宮さき
橋本美智子
海砂 箕輪絵衣子
渡辺美帆

4

わが家の歴史写真

父の一生

東京都中野区 早乙女光子さん

写真提供・文／早乙女光子

10

何とかがやって十五年 林 夏子

14

何もかも独学 田村敦美

18

始めからパソコン 安村豊子

21

パソコンで主婦脱出 尾崎美奈子

25

少しずつ深まる付き合い 新井純子

32

パソコンは友達 山本雅子

35

夫の中指に感謝！ うつみすみえ

82

家族のスケッチ

浅川涼子・青木清美・麦穂

三田サキ・福島みさを

私の意見・あなたの意見

吉田淑子・佐藤信子・匿名

今これに夢中

高梨陽子・山田恵子・佐分姫子・井上暁子

あなたへスマツシユ

匿名・亀山和枝

フリートーク

三枝きよみ・高松恭子・匿名

松本とみよ・永田道子・浅田節子

中村哲子・田中慶子

母の死に方

布施幸子

ブック情報

127

120

108

105

96

92

39 エッセイスト・クラブ

木原紀子・寺田真佐

42 ドリアン狂 馬場紹美

46 国会議員になってしまった③ 黒岩ちづこ

53 一筆両断23 西田淑子

54 自分で選んだお産 永原香代子

62 ワーキングライフ 祥 まゆ美・田口恵子・藤岡 泉・山橋ゆり

70 子育てフォーラム ●NMSのページ●

鈴木貴子

72 座談会 私も言いたい
きょうだいの序列

久保田君江・前原幸子

81 読んでよかった 馬場紹美

128 コミック これが子供の生きる道24 栗田笑

132 林の椅子で 真野由美子

137 ズバリ一言

武藤徳子

140 コミック 毎日が平白 海砂

142 私もひとつ

後藤 晶・馬場紹美・石井しのぶ

鈴木紀美枝・三好敬子・藤野 恵・鴨川典子

祥 まゆ美・藤池弘子・加藤智恵子・大沢陽子

匿名・匿名・太田啓子・トト安田

島村君子・武藤徳子

147 スタッフから わいふインフォメーション

149 募集します 投稿のきまり

152 編集だより

138 お友達にわいふを バックナンバー

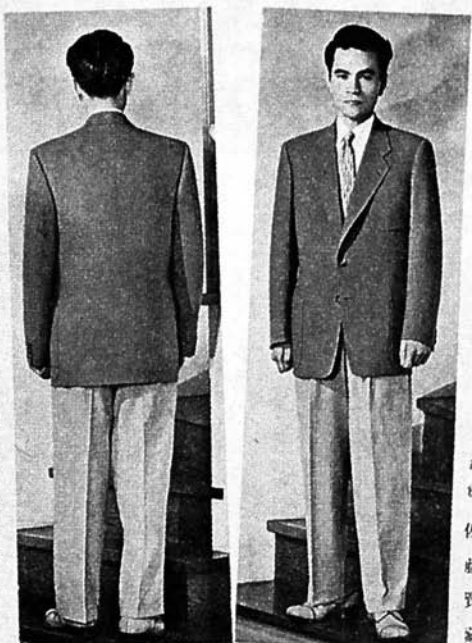
107 自費出版はわいふへ 文章講座のおすすめ

父の一生

東京都中野区 早乙女光子さん

賞金十万円・紳士服誌上コンクール入選発表

壹等賞



東京都文京区駒込動坂町四八
十字樓 佐藤洋服店

店主 佐藤金作
裁縫 同 佐藤賢藏



入賞の喜び 佐藤金作

今回の紳士ファッション誌の作品で、選入された種々多岐にわたる写真の中から、せめて一つでも入ればよいという思いで、見ためですが本意は存分にこだわりました。一回試着におもてなしました。いままは秋のコンクリート物をやっておるのですが、洋服は結構とていっても、既成衣のコンクリート物を通じていたしたので、幸い雑誌に掲載されたので元気をもらいました。調子のすすすす調子を祈ると共に、折角に心から感謝申し上げます。なお、写真員の方にもお礼を申し上げます。

蕨谷氏のオーダーした服がコンクールに入賞。モデルとして（洋装）昭和28年11月号）に載った

三年前のことである。「サライ」という雑誌で偶然父の写真に出会った。雑誌に「サライ・インタビュー」というコーナーがあり、たまたま「蕨谷喜一（84歳、ぬりえ作家）」と新聞広告で見かけたのだ。五十代以上の女性ならご記憶にあるだろうか、ぬりえという遊びがあったことを。

蕨谷氏は、生前の父の顧客であった。ああ、まだお元気だったのかと懐かしくて本屋で立ち読みでもしようと思えば、とベージュを練った。すると思いがけなく蕨谷氏の若い日の写真の下に父の顔と入賞の喜びという言葉が載っていたのである。昭和二十八年とあるから父五十三歳のときの顔である。

これでわかるように父は紳士服仕立て業を営んでいた。疎開先の栃木県から東京



1941年、父方の祖母と父と私。若草山で



樺太時代の父（座っているほう）、
知人の息子さんと



1948年3月、疎開先の小学校で卒業間近の日
（前列立っている右から6人目が私）

に戻ってきて二年目のことである。
栃木の農家の次男坊に生まれた父は、
自立の方法として学費の免除される師範学
校を目指していたそうだが、兄との確執
で家を出る決心をする。
宇都宮で洋服仕立ての徒弟修行を終わ
り樺太（サハリン）へ渡った。樺太なら口
シア人も多く洋服の勉強になると思ったそ
うだ。二十歳だった。
四年後、日本に帰り日本橋三越の洋服
部に就職した。ここでは父は念願の英国人
ペントレー氏から、燕尾服やモーニングの
技術を学ぶことができた。二十六歳で結婚
し、翌年長男が生まれたころから独立を考
え始めたようだ。日本橋兜町の店舗付き借
家で開業。ときは昭和の大恐慌がじわじわ
と押し寄せてきて、注文が取れず辛酸をな
めたようである。
そうして私が一年生になったときは、
既に戦争が始まっていた。翌年には職人さ
んたちは次々に兵隊に取られ、長兄も姉も
学徒動員、父は中野の憲兵学校に仕立て職
人として徴用され、事実上廃業に追い込ま
れた。
三月十日の東京大空襲で父や姉たちは



1951年夏、15歳で宇都宮の銀行に就職した記念に同期入社の人々と。事務服はへちま衿と水色指定の自前。私は先輩に教えてもらって事務用インキで染めて自分で縫った



1957年ごろ、文京区の実家の店の前で。両親と義姉と店の人たち



1959年、初めに兄と疎開していた塩原温泉を15年ぶりに訪れる。両親、弟といっしょに

命からがら逃げ延びて、わが家の歴史写真などといっても戦前のものはわずかしかなり。

前年の夏、学童疎開が実施され、母と私たち子供は栃木の手つてを頼って疎開していた。二間きりのこの家には戦後、さまざまの人がやって来た。行き場をなくした母方の祖母、叔母、従兄。父の友人たち。入れ

替わり立ちかわり誰か泊まっていた雑魚寝状態だった。

物心ついたときから他人と一緒に暮らしていたせいかわ、私は大人には物おじしないのに、子供が怖くてしかたのない子供だった。他人の、大人の目が常にあるということとは子供心に見栄が働き、無意識に「よい子」をやっていたのだ。

父は徒弟時代、主人側と自分たちの格差に屈辱を感じたからと、食事から家事までわが子と徒弟さんを同じ扱いにした。弟が高校生になったときにも、パンツや靴下くらは自分で洗えと指図した。

「同じ年ごろの子が自分で全部洗っているのにわが子だからと特別扱いはよくない、働く者の不満の元になる」と母にも禁



1999年11月、母の97歳の誕生日祝い。母の甥や姪も集まってくれて



1970年、近所の神社で母子だけでひっそりと七五三を祝う。通りすがりの人にシャッターを頼んだ



1995年10月、兄と同じ教会で挙式を待つ甥と花嫁。このとき兄はすでに死の床にあった



2001年正月に家族皆集って。後列右から長男、三男、二男

じた。こうした姿勢は従業員には慕われてよかったが、子供にはいささか厳しく真ん中の兄は、それゆえに苦勞を背負って一生を終わったのでは、と思うこともある。

戦後、宇都宮に永住するつもりで家を建てたが、交通事故で父が働けなくなりこの兄と私の進学の道が断られたのだ。

このときの父の兄に言った言葉は痛烈だった。「人間は社会に出て育っていくんだ。学校なんか何ほのものでもない」

明治の人間の気骨でもあろうし、怪我を負って動けない自分への強がりでもあったろう。が、加えて父自身が最初の目的の教師への道を断念した、屈折した思いもあったのではと、私は親になってみて気がついた。

「サライ」の写真を見ると賞金十万円とある。おそらく東京進出への借金の返済に消えていったのだろう、ついで賞金の話題など聞いた記憶がない。

父が逝って今年で三十三年になる。

Gestalt Therapy

ゲシュタルト・セラピー

ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座

ゲシュタルト・セラピーは言語だけに依存せず非言語的な手がかりを重視します。水泳を理論だけで教えるのは無理なように若干の基本的な原則について語った後エクササイズを体験したり、過去や幼児体験を分析せずに「今ここ」でエンプティ・チェアの方法を活用し再現して体験するというやり方をします。色々な実験を自発的に実行することで行動変化を体験することが出来ます。

当研究所の専門家養成コースは、ゲシュタルト理論と指導技術を拾得し、加えてセクシャリティーを学び、人間の深層に複雑に絡み合った問題解決に対するきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストを目指します。

- ◆就学期間 基礎課程2年+専門課程2年
- ◆開講時期 春期4月・秋期9月
- ◆資格 20歳以上
- ◆合 宿 年2回 春・秋

○アルカンシェル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

ゲシュタルト・セラピー ベーシック講座

人は90%以上、無意識の中に生活しています。無意識の行動パターンがその人の性格なのです。私たちは自分自身を100%理解し見ることが出来ないために自分とはどんな性格かわかりません。「自分を知りたい。自由に表現したい。人間関係を豊かにしたい。愛されたい。尊敬されたい。」と秘かに願っているのならゲシュタルトセラピー「どのような自分なのかに気付く」初歩的なワークショップを体験して下さい。そこには数々の楽しいエクササイズが用意されていますので、自然に自分のありのままの感情や、反応、常にしている表現の仕方や癖に気付く、生活上でのコミュニケーションの取り方、話し方として自分自身に責任を持つ能力が高められるからです。

- ◆就学期間 3ヵ月・短期集中講座
- ◆開講時期 春期4月・秋期9月・冬期1月
- ◆1日ワークショップ 第3日曜日 AM10:30~PM5:00

○アルカンシェル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

Aroma Therapy

アロマセラピー

アロマセラピスト養成講座 / トリートメント専門講座

解剖生理学、メディカルハーブ、フィットセラピー、コンサルテーション、心理療法、リンパドレナージュ、フェイシャルマッサージなど美容と心理、健康をトータル的に学ぶ講座です。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期5月・秋期11月
- 修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

リフレクソロジスト養成講座

心と身体を癒すコミュニケーション型マッサージを提案。足・脚だけでなくトータルケアを目指し、心身のバランスや普段の食生活から個人にあったアドバンスのできる専門科を養成します。プロとして活躍できるよう心身のケアから接客マナーまで現場感覚で学びます。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期4月・秋期10月
- 修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

呼吸法講座

深い呼吸は、心理的攻撃を受けた後の体にブロックされている心理問題の解決を促し、体の代謝を高め、健康を取り戻します。 ●毎月1回



ゲシュタルト療法
無料体験日
毎月第2水曜日 PM 7:00~9:00



東京ヒューマンクス研究所

J R大塚駅南口より徒歩2分

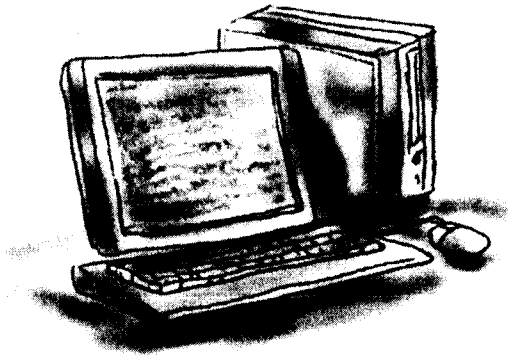
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 MOAビル402

TEL 03-3986-2420 FAX 03-3986-2422

<http://www.thl.co.jp>

特集

パソコンとの 付き合い



何とかやって十五年

東京都三鷹市 林 夏子 (47歳)

退職金をはたく

パソコンを覚えるのは、何だか語学の習得に似ている。基礎からきっちり勉強しないと、またしたとしてもしゃべれない人がいるかと思えば、学校に行かなくてもコミュニケーションの手段として必要に迫られると何とかしゃべれるようになる人がいるように、パソコンにも独学派と学校派がありそうだ。

まあこの場合、学校に行って使えない人は少ないかもしれないが、義父などは半年以上パソコン教室に通っているのに、自宅からメールを打つのが不安でできない。外国語の会話のように間違ってもトライする気持ちが必要なのかもしれない。

私は、十五年前に仕事と子育ての両立に敗れ退職した。その退職金の一部で先ず買ったのがパソコンであった。当時五十万ほどしたと思う。しかし機能は現在十萬以下のものに比べても月とすつぽんほど、今思えば何もできない代物だった。退職したときとにかくこれからはパソコンが使えれば再就職できるのではないか、また何か自分でやる場合絶対有利ではないかと思っていた。

今のようにウインドウズなどのOSもないので、ワープロはワープロとい

う具合にその都度ソフトを入れて使っていた。NECで行われていた二、三日の講習会でも、プログラム言語を打ち込んで汽車を画面に走らせてみるなどというお遊びもあつたりして、ど素人がプログラムをいじるなど今では想像もつかないことが行われていた。まだまだのどかな時代だったのかもしれない。マウスもなかったし。

「マルチプラン」というソフトで家計簿をつけてみたり、「一太郎」というワープロソフトでお菓子のレシピを打つてみたりそんな程度のことをやっていた。子供も小さかったので、パソコンとの付き合いも薄かったようだ。

ある日、フロッピーディスクのドライブが故障した。電気屋に修理を頼んだら、買い替えを勧められた。五十万もしたという意識が残っているのでもうそう買い替えなんてと思ったのだが、世はウインドウズの時代に突入していたのである。

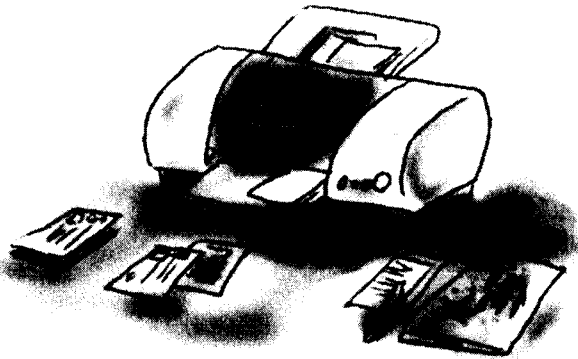
私の退職金をはたいたパソコンはもう時代遅れで使い物にならなくなつて

いた。そしてウインドウズ3・1搭載のパソコンを購入した。これはもうまったく別物であった。スイッチを入れると、画面がいろいろと指示をしてくれる。これまでのように、プログラムをいちいち打ち込まなくても、カラーの画面がこちらのクリックを待っていてくれるというわけだ。このパソコンになってから、ワープロをはじめ、子供向けのゲームや学習ソフト、はがきを作ったり、宛名印刷をしたりするソフトなどを購入し、我が家のパソコンライフが始まった。

年賀状、暑中見舞いなどは一度宛名を入力しておけば、次の年からは本当に楽になった。版画と手書きのコメントだけは従来どおりだが、宛名書きという一番時間のかかる作業をパソコンが代行してくれる。数百枚の宛名書きをほんの数十分で。

そうこうしているうちに世はインターネット時代と言われるようになってきた。子供もちよつとずつ手がからなくなってきたので、新し物好きの私

はインターネット接続をすることにしました。当時はISDNなどなかったのに、



電話回線を増設した（その後ISDNができてこれはまったく無駄な出費で

あったことが判明し愕然としたが：）。夫の会社が放送関係なのでプロバイダーはとりあえず夫の会社にした。どのくらい使うかわからないし、夫も自宅でメールを読めると便利だろうし、しかも無料という魅力もあった。今思うと放送関係の会社だったせいでプロテクトが厳しかったのか、インターネット接続がものすごく難しかった。プロに頼んで二時間以上かかったのを覚えていいる。これもまだのどかな時代だったのかもしれない。今は無料のプロバイダーで簡単に接続可能などころも増えているし、利用者も急増しているの、特殊なプロバイダーの接続にまともに取り合ってもらえるほど、暇ではないだろう。

メールに挑戦

三年ほど前フランスに住む友人からメールをしないかとアドレスが送られてきた。ネットはときどき繋いで見ていたけれど、メールは相手がいないと

できないので、特に興味はなかった。しかしこれをきっかけにメールを始めた。夫のメールアドレスを借りてのスタートだった。会社のアドレスを使っていたわけだからかなり図々しい話だ。手紙だと書くのがつい億劫になっ

てしまふけれど、メールだとおしゃべり感覚で話ができる。パリ・東京間のキャッチボールがしばらく続いた。メールを書いて送信ボタンをクリックするだけで、瞬時に相手にメールが届くのだ、地球の裏側で

あつても。

メールの楽しさに目覚めた私は、自分専用のアドレスを取るため有料のプロバイダーと契約をした。そして今では料金も一括で使い放題なので、フランスをはじめイギリス、メキシコ、ベルギーなど海外に住む友だちにはメールが一番安上がりな通信方法となった。メールに国境などないのだ。

だんだんパソコンに向かう頻度が高くなり、かつ子供たちも一人前に使えるようになってくると、速度の遅さと、メモリー不足に悩み始めた。メモリー増設をくりかえしたけれど、限界で二回目の買い替えに踏み切った。二年ほど前である。

ウインドウズも95から98の時代になっていて、2000が出るまで待ったほうがいいのではとも思ったけれど、もうこれ以上便利になっても使えきれないだろうと98搭載の液晶画面のマシンを購入した。メモリーも128メガバイト、ハードディスクの容量20ギガバイトと今までと比較になら



ない大きさ。CD-ROMに書き込みができた。音楽の編集、音声での入力（一度も使ったことがない）、さまざま（な）ことがやろうと思えばできるらしい。デジカメで写真を撮ってパソコンに取り込んで印刷したり、スキャナーで新聞記事などをコピーして貼り付けたり、その都度マニュアルを読みながらやってみた。

そうしているうちに、二十年來の友だちが、子供の手も離れたことだしとフラワーアレンジのネットショップを始めた。彼女はパソコンがそれほど得意ではない。私も自己流で危なっかしいのであるが、マニュアルを読みながら何とかいろいろなことはクリアーしてきた。

彼女はあるショッピングモールに毎月結構な登録料をはらって、ホームページを作ってもらい管理してもらっていた。しかしなかなか注文がこない状態が続いていた。

ため息をつきながら「どうしよう……どうすればいい？」なんてかかって

くる電話にまあ乗りかかった船だと思つて、「ショッピングモールは止めて、HPは自分で管理しないと、モールにお金を取られるだけで終わっちゃうよ。私がホームページを何とか管理するから」と言ってしまった。ネットビジネスの時代だとか雑誌や新聞で騒いでいて、M市主催の「加速化する情報社会はどう変わるか」などという講座に出たばかりで、何かしたいと思つていた矢先のことだった。

管理するとは言つたものの、どうやるのか見当もつかない。とりあえず、図書館で関係の本を片っ端から借りてきた。読んでみるが何だか内容が、頭の中を素通りしていく。ショッピングモールとの契約が切れるまで三か月ほど猶予があつた。

そんなとき、小五の娘が自分のホームページが欲しいからクリスマスはHPソフトを買ってくれと言ってきた。もしかして一石二鳥つてこのことかしらと、二つ返事でOKして、この種のソフトでは一番手ごろな「ホームページ

ビルダー」をプレゼントした。

子供は言葉覚えるように自然にパソコンに親しんで、自分流に使つていた。パソコンは試行錯誤の世界なので、一つの結果に至るのに方法はたくさんある。

子供はいろいろ試しながら教えられなくても自分でやり方を見つけたい。HPのソフトもインストールしてから、最初の使い方だけマニュアルを読んで説明したら、あとはひとりでどんどん進めていって、簡単なページをすぐに作ってしまった。作るとネット上にアップしたくなる。娘にせかされて、マニュアルを読んだり、電話でいろいろ教えてもらったりしながら、ついに娘のページはデビューした。

なーんだ子供にできるなら私だつてと、家族がいけないすきに私も実験的に簡単なページを作りアップさせた。思ったよりもずっと簡単だった。何だかよくわからないけれど、マニュアル本を見ながらやっていると、何とかなつてしまふ。そんな感じだ。

デジカメで撮った写真をパソコンに取り込んでページにアップしたり、コメントなどを更新したりの一連の手順がわかった。これなら、モール撤退後のシヨップの管理もできそうだと思うようになった。まだ写真の画素の大きさもピンとこないほどいろいろ無頓着で危ない管理人であったが……。

シヨッピングモールの契約が切れて、ネットシヨップの管理をやることになった。またまたマニュアル本を見ながら、自宅のパソコンにネットシヨップのファイルダウンロードし、更新を始めた。モールの人に頼んでもなかなか後回しにしてやってもええなかつた写真の拡大など、少しずつマスターしていった。よそのネットシヨップと相互リンクをはったり、検索ページに登録をしたり、見よう見まねで今日に至っている。

ネット内で、女性のためのネットシヨッピングのメーリングリストに参加して、いろいろと情報交換をしたり、エコロジー関係のアンケート調査に協

力したり、ネットを通じてのつながりが増えていく。三十代子育て真っ最中の女性にとってインターネットがいに支えになっていくか、肌で感じる日々である。

パソコンはとにかく奥が深い。何ができるかより、何をやりたいかがはっきりしていないとなかなか前に進まな

何もかも独学

私がパソコンに向かったのは、今から五年ほど前、子供会の役員を引き受けたときだった。お知らせやら、総会の資料やらを作成せねばならず、何もわからないままエクセル、ワードを立ち上げ、夫や息子の手助けも少々借りて、四苦八苦しながら作り上げた。今

いかもしれない。やりたいことに焦点をあてて、そこからやっていると少しずつうまくなっていくようだ。自身、ほとんどわからないことだらけだけれど何とかやっているという状態だ。

かれこれ十五年、パソコンとはこんなふうに付き合ってきた。

京都市右京区

田村敦美 (39歳)

見返すとその資料は、かなり稚拙で見にくいものであった。

私が最初からワープロではなくパソコンに取り組んだのは、当時ワープロが全盛であったにもかかわらず、家にパソコンしかなかったことが大きな理由だ。そのパソコンを購入した夫の考

えによると、「パソコンのほうがいるんなことができるから」ということであつた。

が、当初の皆の思惑に反して、その後二年間はパソコン通信やインターネットへは接続せず、スタンドアローン（パソコンを単独の状態で使用すること）で使用していた。接続がややこしいと

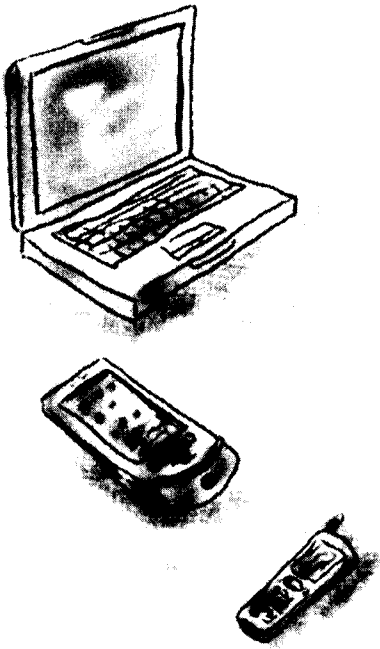
思っていたことと、ネットなんかにつないだらウイルスが入ってくるだろう！という夫の危惧、また通信費もばかにならないし、ということもあつたからである。

パソコンはその機能上、ネットワークでつないで使用することで力を発揮

することが多い。ファイルを共有したり、インターネットに接続して情報を取ったり、メールのやり取りをしたりすることで、他の通信機器とは違った使いやすさが生じる。今でこそ携帯電話やPDAと呼ばれるもののひらに載る程度の大きさのコンピュータ（モバイル機器という）があるが、モニタ（パソコンの画面）の見やすさ、キーボードの操作性から考えても、パソコンは格段に性能がよいと私は思う。

ウイルスに対する知識を持った今は、「ウイルスが怖くて通信をしないなんてバツカみたい。フロッピーからだって感染するのに」と思うのだが、当時は夫の言葉を信じ、パソコンを高いワープロとして使うのみであつた。

子供の勉強の資料集めが大変だったことで、「あ、こういうときにインターネットで調べれば……」とだんだん思うようになっていった。テレビなどでインターネットの特集をやっている



の見たこともきつかけとなり、「じゃあ、そろそろ、我が家もインターネット!」と思ったのが三年前である。パソコンに詳しい友人の助けもあって、めでたく我が家もインターネットデビューとなった。その後、その友人がホームページ制作を始めたため、それを手伝うこととなり、インターネットにどっぴりはまりこんだ。仕事でメールやインターネットを使い、自宅に帰ってから仕事場と同じように複数のメールアドレスからメールを受け取れるように設定し、ばりばり使い始めた。

私が最初に使ったパソコンのOS（オペレーション・システム、パソコンを動かす基本的なプログラム）はマッキントッシュ（通称マック）である。後にウインドウズが登場するまで、アイコン（ソフトやファイルを示す絵文字）をクリックするだけでソフトの起動ができるマックは、初心者向きとされていた。現在もデザインの仕事をする場合などは、このマックが多く使わ

れている。また、カラフルなi（アイ）マックの発売で、女性にもたくさんマックユーザーが増えたとも聞く。ところがこのマック、i（アイ）マックは別として通信には少々難しい面があるのは否めない。とにかくフリーズしやすいのである。「マックは気難しい」などと大まじめで言うユーザーもいるくらいだ。

ビジネスシーンで使われるファイルやドキュメントの多く（大方八〇%以上）がウインドウズで作成されている現状では、データの互換性を考えて、どちらのOSでも扱えるようにしておいたほうがよい。そのため、私は仕事ではウインドウズのパソコンを使用している。私自身は、慣れてしまえばウインドウズのほうが使いやすい。これから初めてパソコンをお求めになるなら、迷わずシェアの広いウインドウズをおすすめだ。

ただ、負け惜しみに聞こえるかもしれないが、パソコンの第一歩をマックで始めたおかげで、マックで作成した

データをウインドウズで読み取るためのさまざまなテクニクを身に付けることができた。これは最初から大勢を占めるウインドウズばかりを扱っていたのでは身に付かなかつたであらう利点である。拡張子という概念を学んだのもこのころだった。

私のパソコンの学習法であるが、多くの我流である。わからないことは市販のテキストを買ってきて調べたり、関連のホームページを探したり、ソフトに付いているヘルプ機能を活用して調べた。その上で、どうしてもわからないところだけ、パソコンに詳しい友人に教えてもらった。しかし、教えてもらうことは一項目につき一回だけ。初心者にはがちな、同じことを何度も質問することは自分自身にたく禁じた。

これは、私の周りの知人たちの多くが、パソコン創世記といわれるDOSの時代からパソコンを勉強していた、超がつくベテランぞろいだったからである。パソコン上級者は、初心者が大

嫌いなのだ。「初心者は自分で調べることもしないで、すぐ教えて、教えて言ってくる。自分たちはすべて自分だけで解決してきたのに」というのが彼らの言い分なのだ。

おかげで、私のパソコンの勉強時期というのはいつも冷や汗をかいていた記憶しかない。今だって仕事でパソコンを使っているけれど、パソコンについてわかっていっているのはほんの少しだ。トラブルが起ころうとも、対処できることとできないことがある。ことにHTML言語（ホームページを作るための言語）に関しては、今もタグ辞典と首っ引きで作業をしている。便利なHTMLエディタ（HTMLを書いてくれるソフト）もあるが、それだけでは仕上がったホームページが妙な動作をしたり、ページが重くなったりすることがあり、商品にならないことがあるからだ。

現在私は、コンテンツライター（ホームページの文字の部分を担当する

人）をしながら、インターネットショップの販売促進作業や、メールマガジン制作、メールマスター業務を行っている。毎日、メールを扱い、テキストデータと格闘しているので、パソコンがないとお話にならない。停電が起こ



ったり、パソコンがクラッシュしたり、サーバが何かの拍子にダウンしたりすると、たちまちお手上げ状態となる。

こんなにパソコンが身近にありながら、やはりパソコンも、その前に私が習っていた英語も、手段のひとつなの

だと思う。パソコンが使えれば仕事ができる、というのはもはや幻なのではないか。パソコンを使って何ができるか、が問われる時代になってきたのだ。英語もパソコンも携帯電話も、持っていて使えて当たり前、といわれる。逆に誰でもマスターでき、手軽に習えるからこそ、それを使ってどんなことをするのかを考えて、これからはお始めになってほしいと思う。そして、パソコンには暗黙の了解というものが、いまだに数多く存在する。インターネットを使ったり、メールを使ったりする上で、ネチケットと呼ばれるインターネット上のエチケットをできるだけマスターしてほしい。サーバは、道路と同じで、大切な社会的インフラのひとつなのだ。この便利な媒体を、皆が気持ちよく使い、次世代に継承していくためには、多くのパソコンユーザーの理解と協力が不可欠である。これからも、そのことを伝えるために、日々パソコンに向かっていきたいと思っ

始めからパソコン

東京都北区 安村豊子 (37歳)

新卒で貿易事務の仕事に就いたとき、時代はちょうど英文タイプからワープロに切り替わる時期だった。それから十七年、途中ブランクはあったものの、パソコンとは切り離せない仕事人生(今やプライベートでも)を過ごしてきた。

そんな私であるからはっきり言って入力は速い。新しい会社へ行つてパチャパチャキーボードをはじめてみせると「すごいねえ、速いねえ」と大体の人が(一応)感心してくれる。それがウリの一つと思っている。

そして次に大事なのが「使えるソフト」。十年くらい前には「一太郎」「桐」なんてのが主流だったけれど、ウイン

ドウズの制圧とともに、今や時代はワードとエクセルよ。だから私も覚えました。そう、自力で。ただしソフトは自分では買わなかった。なぜかというとい最近までパートで働いてた社員三人の会社にはワープロしかなく「社長! ワープロなんでもはや時代のニーズに合いません。パソコン入れましょ、パソコン。あんなこともこんなことも(どんなことも?)できて便利ですよ」とけしかけたら、ホントに入ってくれたの、リースで総額百万くらいかけて(なんていい社長なんでしょう)。もちろんその前に例の「素早い入力」を見せて感心させ「パソコン入れたら、私が社長に教えますからあ」

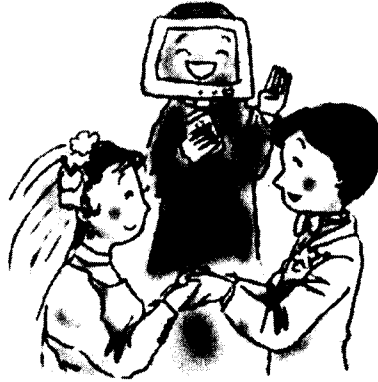
と迫ったのはいうまでもない。

そんでそのときにワードとエクセルも入れてもらった(私の好みでマックを入れたので標準では入ってません)。でも私だつてさわるの初めてだもん。必死こいて勉強しましたよ、本屋でマニュアル本買ってきて。

ソフト自体にももちろんマニュアルはついてるけれど、はっきり言つてあれはあまり役に立たない、本屋に売ってるマニュアル本で覚えるのが常識になつてののだ。うちのダンナは同じようにしてマニュアル本で『イラストレーター』というソフトを独学で習得し、今や仕事にバリバリ使つてます。わずか三年前には自分でファイルを開くこともできず、私に頼つてた人とはとても思えない。ホント必要に迫られるのが、覚える一番の近道です。

私も試行錯誤の末、何とかワードとエクセルを使って見積書や出納帳などを出せるようになり、社長や五十歳近い他の社員にも囁んで含めるように教えてさしあげ、会社にパソコンの春が

やってきたというわけ。半分は自分のためだったけど（だってワードとエクセル使えれば転職に有利だし）、会社にとってもよかったことだったと思う。



だってそこでは建築士から図面を送ってもらうのに、今までは電車で会社まで届けに來たり、バイク便を使ったりしていたのが、通信で居ながらにして瞬時に送れたり、受け取れるようになりますから」って電話が来て、五分後に

はプリントアウトして会社で図面が見れる、時間もお金も節約できてすごく便利。ダンナも同じようにして作ったイラストを通信で納品してるけど、できたら夜中だろうと送れて会社に足を運ぶ必要がない。浮いた時間で家事や育児に手を出してくれて私も助かってます、フフフ。

その後転職したのだが、今の会社でもやっぱり似たようなソフトを使ってるので「これ打って」「ハイイ」ってな感じですよ。会社もトクしたと思うよ、私を雇って。速いし何も教える必要がないんだもん。

先日友だちと三人で銀座でランチを一緒にした。その中の一人が結婚するのでそのお祝いを兼ねてってことだったんだけど、彼女はまさに「パソコン婚」。あるHPを見て、その作成者にメールを出したのがきっかけで三年あまりの付き合いを経て結婚することになったのだ。

その間の紆余曲折をかいま見て、「パソコン婚って特別な感じだけど、それ

はきっかけだけで普通の恋愛と同じなんだ」って思った。彼の写真を見せてもらったら、ルックス的には「う〜ん」って感じだったけど、HPを見て彼の人となり、趣味などを知っていたから自分と合うって事前にわかっていてよかったみたい。

彼女は四十歳近くで初婚。私の周りにも結構いるけど結婚する気がないわけじゃなくて、お見合いも何度かしたけど縁がない女性たち。先入観を捨てネットで見つけたのも一つの手法かなあ、と幸せいっぱい綺麗になった彼女を見てると思ったりして。

とはいえ私自身は原則的に面識のある相手としかメール交換はしない。掲示板などに書き込んで共通の趣味を持つ顔を知らない相手とやり取りしたことはあるけれど、結局なかなか続かないもの。

まあ私がマメじゃないっていうか、そこまで引つ張る情熱がないのかもしれないけど。何度かメールが行き交い自然に終わる、というパターンがほと

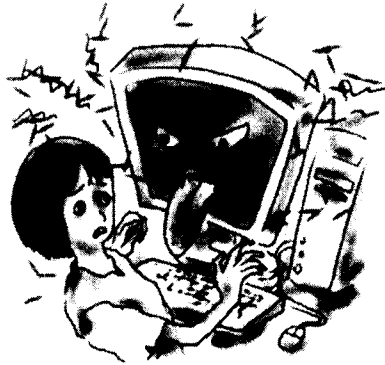
んど。だからめんどくさいの。なかには変な人もいるしなあ。メールじゃないけど掲示板に書き込んだら変にからまれて、反論したらどんどん変な方向に話が行っていつの間にかケンカになり、第三者まで入ってきてエライ目にあつたことがあつた。だってアナタ、顔も知らない相手にいきなり「ずいぶん神経が太いですね」なんて言われたら黙っちゃられないでしょう。

ネット上にはよくそういう人がいて「アラシ」と呼ばれてます。ジャーニズじゃありません、ネット上を荒らし回るといふ意味のこと。嫌なこと書き込んで人を嫌な気持ちにさせて喜んでる暇な人のことです。ネットの世界も結局そこにいるのは人間だからそんな人もいるし、もちろんフツの人が大部分とは思うけど、顔が見えない、身に危険が及ばない世界だけに勝手なこと書けるといふか、醜い面が露呈してしまうことはままある。他人事だったら見ている分には面白いけどな。

そんなことがあつてから掲示板は避

けていたんだけど、最近ちょっとはまつてるところがあつて自分ではあまり発言しないけど、ちよくちよく見に行っている。

あと浅草キッドのHPを見てメールを出したら即日水道橋博士から返事の



メールが来てびっくり。そう、メールって手紙や電話より手軽で相手の都合をじゃましないので、思わぬ相手から返事がもらえることがある、それって楽しみの一つかな。

これから時代はどんどん進化（商業主義にのせられ）していくみたいだけれど、私は携帯でメールはしない。そこまで忙しくないしメールもHPもおうちで座って見ればいいと思ってる。だって携帯の画面をじっと見つめる姿には文化が感じられないっていうか、ホント馬鹿そうに見える人いますよ。だからイヤ。あれもこれもと提示されていくだけに、どう付き合っていくか。ネットにもあまりはまりすぎたくない、なくても平気っていう程度に押さえておきたいけれど、ときどきブラウザの調子が悪くてメールチェックできなかつたりするとなんかイライラする。危ない兆候だ。

たとえば「味噌を自分で造ってみたなあ」なんて思ったとき、たちどころに作り方がわかつたりする。あと本屋に行く暇がないとき、居ながらにして注文でき、二日後には自宅に届いたり。つかず離れずいい関係をキープしていきたいものです。上手に付き合えばホント便利なもので。

パソコンで主婦脱出

横浜市港北区 尾崎美奈子

パソコンを我が家で日常的に使い始めたのは、ほぼ一年少し前。インターネットに接続しメールをスタートしたのが今年始め。当然ながら、知り合いたちとの交流の幅が広がった。家族とも会話の題材も自然と増え、子ども同士の会話もメール上で知ったり、楽しい画面を共有したり……と若返った気分のだ。

記念切手を貼り手紙を出すのが好きな私だったが、一年ほど前からカウンセリングに関心を持ち、仲間たちと学び始め、課題をパソコンに向かって文書作成する機会が多くなり、パソコンの便利さに新たな感動を覚え、長電話よりもパソコンと親しむ時間が確実に

多くなっている。何しろ機械音痴なので、インターネットで検索するのすら億劫だった私だが友人、家族たちに気軽に教えてもらい、何とかメールの基礎的操作はできるようになった。

添付書類送信方法、転送、テキストファイルで送信等、耳新しい用語がどんどん押し寄せてくる。「何をやって無駄はないの。自分のためになるのだから、覚えてね」と喝をいれてくれる友人。分からないことを質問すると、分かりやすく説明メールで返してくれる友人。朝一番にさわやかな元気をメールでさりげなく届けてくれる有り難い友人。パソコンを通じての意外な人間関係が展開している。外出できない

体調の優れない人、心がカゼをひいている人、いろんな状況の人にもメールは思わぬ元気を静かに伝える手段として嬉しい発明ではないかと実感している。もちろん、悪用されて事件が後を絶たないという悲しい現実もあるのだが。

パソコンとの出会い

私とパソコンとの出会いは六年前、相模原に住んでいたとき、広報でかながわ女性センター、神奈川雇用促進センター主催で、女性の再就職のための「ナイスワークセミナリー」が十五日間あると知り、応募し幸運にも三倍の倍率を突破した(抽選と聞いたけれど)のが始まりだ。

朝九時から夕方四時まで再就職講座として「パソコン実習」がインスタラクターのご指導で十日間盛り込まれていた。四十歳を迎えようとしていた私が、重い腰をあげ、再就職のウォーミングアップとして体験したデパート中

元期ギフトのアルバイトが終わり、さあ本格的に再就職目指して行動しようとしていた矢先の出来事だった。

それまで私は、ワープロもほとんど使ったことがない上に、知識もゼロに等しかった。再就職にはワープロはできたほうが有利とは聞いていたものの、夫のたが重なる地方転勤と育児に不満や疲れが勝手に吹き出し、先々のために自主的に学ぼうという前向きさは当時の私には芽生えなかった。

それが、偶然目に止まったこのパソコン実習を含んだセミナーに、自発的にはがきを用意し、応募の動機「人生のターニングポイントの四十歳を直前に今後の自分自身のために何かしたい。そのきっかけにしたいと思ったので」と悪びれず書いていた。

そういうご縁で、私とパソコンは予想外の出会いをした。また、知らない二十人の主婦と先生方との出会い、しかも一緒に再就職について一日中学ぶというのも十年も家にいた私には新鮮かつ刺激的だった。



受講生にノートパソコンが各一台貸与され、英文タイプの経験もない私は、コンパクトにおさまっているアルファベットや記号の並ぶキーボードを前にどこをどう使うのかと戸惑っていた。このときは、ワードで文書入力、エクセルで簡単な表計算を学んだ。

インストラクターの先生は、三十代

のきりつとしたメガネの似合うインテリタイプ。でもコミカルさも持ち合わせたエネルギーシユな女性だった。

マウスを操る

マウスでカチカチ、クリックやダブルクリック、ズルズルとドラッグ。

親指と人差し指でカチカチ音を聞きながら目は画面に集中し真剣そのもの。初体験マウス操作も、初めはおそろおそろやっていただけ、指示に従ってやっていくうちに、カチカチカチカチ、ズルズルズルと、画面が変化していくのが楽しくなってくるから不思議だ。自分と画面とのヒミツの世界が繰り広げられている気がして、ときにはなんと、愉快にも感じるこわいもの知らずの自分がいた。でも一方では、操作がわからなくなり、隣の人の画面と違って焦って手を挙げてヘルプを頻繁に求める劣等生の私に、快く対応してくれた先生、見守ってくれた仲間是非常に有り難かった。

先生が作成されたマニュアルにそって、パソコンの基礎的知識から始まり、文書作成に入っていた。例題の文書作成では、各自が孤軍奮闘し、できたら先生に添削してもらいに行くことになっていて、満点だとカラーレインボーペンで、花まるをもらえた。よくできましたというコメント付きで。私も

みんなのやる気に触発され、徐々に休憩時間まで、没頭していたときもあった。この先生の花まる入り練習問題は、懐かしさと当時のがんばりの証拠として今も私の手元にある。

「十五日間にわたったナイスワークセミナーが終わろうとしています。皆さんと（パソコンとも）会えなくなるのがとても淋しい気がします。不器用かつ物覚えの悪い私が、久保先生の素晴らしいご指導でどうか文章入力できるようにになりました。『パソコン』は、私にとって今までにない楽しい魔法の機械に思えます。不思議なことが数知れず、驚きの連続でした。が一方では、入力が思うように進まず、ため息の連続でもありました。今後の抱負として、このセミナーで学んだことを生かして、ナイスワークにめぐり会えるように意欲的に再就職にチャレンジしたいと思います。そして興行きの深い文明の利器『パソコン』をできれば自分のお給料で購入し、これからも永く仲よくしていけたら幸いです」

これは、「ナイスワークセミナーに参加して」のレポート作成を卒業制作として最終日に一日がかりで独力でパソコン入力した私の文の抜粋である。

先生の言葉で心に残ったのが「ここで学んだことは、入門編で初歩的なこと。パソコンは継続して使っていないと、初心者はずぐ忘れる。現場で、思うようにすぐマスターできるわけではないけど、教わる意欲、前向きな気持ちがあれば、上達していけるはず」との激励メッセージだった。

再就職へ

この体験で、私は急に強い味方をゲットした気になり、妙な自信から、履歴書に「ナイスワークセミナーでパソコン実習をし、ワード、エクセルを習い基礎的入力はマスターしました」と堂々と書き、面接では、例の花まる入り作成文書を持参し、意欲をアピールしていた。

その熱意が功を奏したのか、産休社

員の穴埋めで三か月期間限定で採用されたのは、損保のサービスセンターだった。ここではパソコン入力ほかさまざまな雑務もあり、再就職一年生の私は、無我夢中だった。

あるときパソコンのデータ入力で、誤って違ったボタンを押し、データが混乱したという苦い体験もした。(上司がスピーディーに対処してくれ、大事には至らなかったのだが、もうそのときは顔面蒼白、寿命が縮む思いだった)。職場を去るとき、上司に「よい修行になりましたか」と、穏やかな口調で言われた言葉が感慨深く思い出される。

その後、ハローワークで紹介され、パートとして、依然奮戦しながら修行を積み続けて五年になる。

職場は学校だ。

思えば面接でこんな会話があったのを鮮明に思い出す。「パソコンで正確に速くと言われると初心者で全く自信がありません」

正直に話す私に、面接官は、「ワー

プロが仕事上不可欠です。ただごくたまに触るのもイヤという方がいましたので、そうではなく教わってやっていこうという気持ちがあれば問題はありません」と好意的に話してくれた。



五年前は、七台のワープロコーナーが一角にあり、各課の人が集い、混み合うときも多く、よき交流の場になっていた。当初、パソコン入力と違い、地道な入力が要求されるワープロにも

四苦八苦し、必要なものを消去して入れ直しになったりしたけれど、恥はかきすてとばかりに周りの知らない職員さんにも、相手の忙しさなどおかないしに、図々しく尋ねる必死の自分がいた。有り難いことに誰もが親切に手を休めて教えてくれた。

時は流れ、一年ほど前から、一人一台パソコンに変化し、職員は、自分の席で黙々とパソコンと向き合っている。私たちパートは、依頼されると入力を請け負う。

入試関係の入力が多く、桐入力というのがごくたまにあつて、この操作が習ったものと違って完全にマスターできてはいないのだが、いつの間にかパソコンそのものに多少なりとも愛着が出始めたのは確かだ。

ただ、つらいかな、長時間パソコン入力していると、肩の筋がキーンとつたように痛くなってくる。いまだに肩に力が入っているのだろうか。この解消法はないものだろうか。

必要に迫られないとパソコンとも正

面から向き合おうとしなかった私だった。

パソコンと出会って六年の歳月が流れているのに、いまだにブラインドタッチもできず、失敗は数知れずの劣等生だ。自分の給料でマイパソコンを買うところにもいたっていない。

でもこのお化けのようなパソコンと出会い、実際に使い始め、職場、私生活とコミュニケーションの機会が私にとっては何らかしに増えたのは確実だ。私の知らない技がまだまだ底なしに潜んでいるパソコンともっとこれから仲よしになることが、人ともより深く関われるなら、もっともっと使いこなす技を習得する価値は大だと思いはじめている。

そして今後、操作の簡単なパソコンも出てきて、老若男女いろんな人と、メール通信ができるようになったら、私が元気をもらって、朝から憂鬱だったことが軽くなって元気づけられたように、私もそんなメールを送れるような存在になれたら……と思っている。

少しずつ深まる付き合い

埼玉県さいたま市

新井純子

はじめに

夫は新し物好きだ。車の買い換えは趣味のようだったし、子供が生まれると、ビデオ、一眼レフカメラを買った。

買うことで安心し、満足して、使うのはほんの一時、後は、押入の中で眠ることになる。私がいまめな人間なら、それを使うこともできるが、私にだってやりたいことがあるし、やらなければならぬことはある。いちいち彼に付き合っていられない。

パソコンも同様、パプアニューギニアから帰ってくると、すぐに私の机の上に大きな顔をして載せられた。パソ

コン、周辺機器から出ている線がぐちゃぐちゃに混線し、整理下手な私を悩ませた。機械音痴だし、パソコンの必要性なんて感じていなかったから、目の前の大きな機械は邪魔以外の何者でもなかった。

ミシンより手縫いが好きだし、（私は車のシートカバーを手縫いした実績がある。今思うと、気がいざいだ）、電話より手紙がすてき、と思っている。電話は相手の事情をお構いなしにずけずけとはいりこむようで、好きにはなれない。学校のどうでもよい連絡網、セールズ電話なら怒りは頂点に達する。

使わない物はゴミ同様だと思ってい

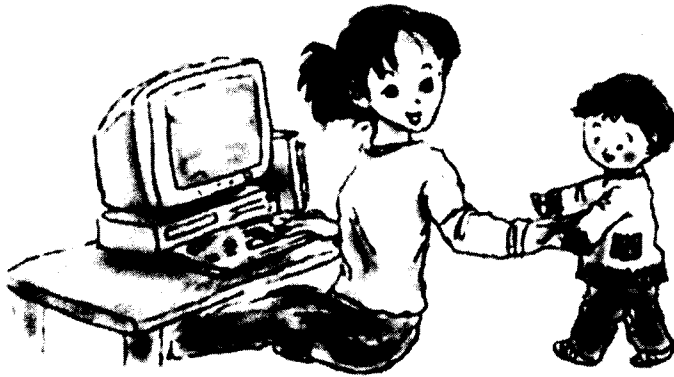
るところがあるから、「人にやる」「捨てる」、を身につけて、海外のくらしから戻ってきたというのに、なんだ、このゴミは。と、目障りなパソコンを眺めていた。しかし、今までの物のように、押入にしまうこともできない、捨てるには惜しい。

「これからは、IT時代だっていうし。もしも、文章を書くことが仕事になったら、仕事にするなら、パソコンは必需品だって、ものの本には書いてあった」と思い悩む日々が続いた。

「でも、誰がどうやって使い方を教えてくれるの？」黒い物体を眺めては、そんなことを思っていた。

どういうわけか少し年齢が上の人たちに、パソコンを使っている人が多いように思われた。少しばかり焦る。しかし、後日判明するのだが、彼らには、立派に成人して、パソコン最先端利用者である、子どもという有力な助っ人がいて、あれこれ教えてもらっていた。

彼らを見てみると、パソコンを習得するのに、年齢には関係がないような



気になる。パソコンという機械と、すぐに教えてくれる人が近くにいます。という条件さえ整えば誰でも利用可能だ。だから、おじさん族でも会社でパソコンができる人がいれば、また、その人が気さくに教えてくれるのであれば、わざわざ教室に通って習わなくても使えるようになるみたい。

何より、パソコンは、元気で、自由にかけられる人よりも、何かハンデイーのある人たちにこそお役立ちツールとも言える。子どもが小さくて、世の中との接点を持ちたい人、体が不自由で、狭くごみごみしたこの日本の道路の移動に苦労する人たち、エネルギーの少なくなった、高齢者にこそ、使って便利な物だ。

現に、子育てネット、体の不自由な人たちの、ひとつの仕事場にもなっている。また、仕事を退職した男性が、インターネットで和歌山県女性センター主催のジェンダーフリー絵本の情報を入手し、作品を作り応募したところ、大賞を取ってしまったという知り合い

が
いる。

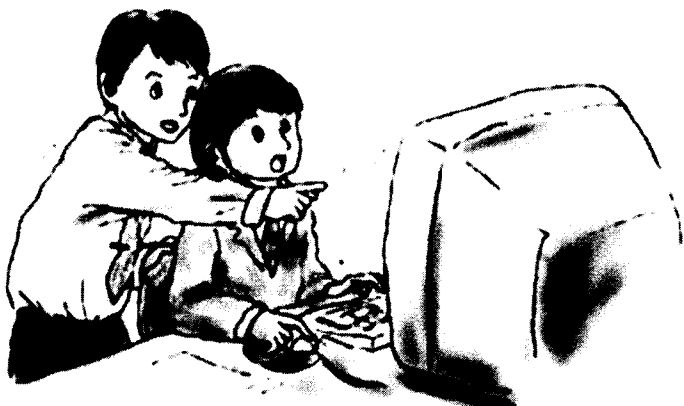
とにもかくにも、目の前にパソコンがあるのだから、使ってみよう。ゴミにしてしまうか、宝物にするかは私しだいだ。

本を買う

まず、私がしたことは本を買う、だった。

ところが読んでも分からない。言葉がそもそも理解不能。すぐに放り投げてしまった（でも、くれぐれも本は捨てないように。パソコンのことが少し分かると、理解できることが多くなってきた、辞書のように利用することが出てくる）。

次に私がしたことは、夫に聞く、だった。それも、Eメールというやつから始めた。私は、先にも書いたが、手紙がいいと思っている人間だったし、ファックスがあるのだから、ことは足りると思った。確かにそれで充分だった。



「何もいままさらわざわざ、ばちばち、とやらなくても」、と思いながら、夫に聞く。

その態度が悪い。だから覚えが悪い。子供たちのほうは、即クリアー。夫がすぐ怒るので、次は子供たちに聞くようにした。

私の状況がラッキーだったことのもう一つは、連絡を取り合う友人たちの多くがパソコンを持っていて、私の練習相手になってくれたことだ。夫は、遠慮なく、バカ、無能呼ばわりをするが、友人たちは根気よく付き合ってくれる。また、ちゃんとメールに答えて、返事をくれたりする。用事もないのに、練習メールと称して何度も送った。そうこうしているうちに、簡単にメールを送れるようになった。

メールは基本的に毎日見るものだ、という認識がない私と相手は、用件への返事がないことがしばしばあった。そこで、電話をしたりファックスをしたりという、従来のやり方もしばらく続く。それは、メールのメリットなど

なくて、反対に二重の手間がかかる、ややこしい時期であった。

「メールを始めました」と連絡が来る人のなかには「アドレスが間違っているようで入りません」、というはがきを送ってきたり、電話で「今、メール送ったから、確認してメール送ってくれない」と言ったりする友人が何人かいて、この間までの私と同じで、慣れるまではだれにでもある仕方がないことだということを最近知った。

先にも書いたが、パソコンのメールは習慣として、時間を決めて毎日少なくとも一回はチェックが必要だ。

それを怠ると、手紙と同じ時間を要するし、電話で確認をしなければならなくなる。未だに、お米を頼んでいる、新潟の友人は、「チェック遅れてゴメン」と言いながら、スーパーで米を買った後に送ってきたりする。「そんなことでは商売にならないなあ」と思いますが、彼のところに「お米送れ」メールを打っている。

遠距離メールで開眼

パソコンのよさがちつとも分からず、ただあるからやってみようの状況から脱出する機会が訪れた。

昨年の夏休みに、娘がオーストラリアの知人宅に出かけることになり、その連絡のやりとりが、Eメールで行われた。

言いたいこと、聞きたいことをもれなく明記できる。これは手紙のようだが、郵便のように日数を要しない。瞬時に送ることができる。また、速効性はあるが、電話のように相手の事情を考えなくてもいい。時差だって関係がない。相手は自分の都合のよいときに、メールを読み、返事をくれる。こちらもまた、自分の都合のよい時間で自身をチェックする、という仕組みだ。何度でも打ち合わせは可能だ。それも低料金で。

ほとんどを、当時高校一年生の娘が、メールのやりとりをして、手はずを整

えた。私は、相手家族へ挨拶に、と短い電話を一本入れただけだった。

この一件でパソコンをすごいやつだと見直した。

続いているパソコン見直し事件。

私は、それまで手書きの原稿ばかりを作っていた。「わいふ」に投稿するときも、最長、原稿用紙で三十枚の「パラダイスの国から」でさえ、手書きだった。人はそれぞれだろうが、私は、いつも少なくとも三回は書き直している。ということ、一枚なら三枚ですむが、三十枚なら九十枚となってしまう。これってとても大変。ワープロは使ったことがなかったので、文章を書くのに、ましてや作品として完成させるものもすごいエネルギーを使っていた。それでも、手書きのほうが早かったと思う。

しかし、パソコンを使わなくてはいけない事態に追い込まれた。

近くの雑誌編集社から仕事の依頼を受けた。企業の雑誌を作るので、私の原稿もフロッピーで送ってほしい。と

いうものだった。「ワープロ使えませ
ん」が、仕事を断る理由なんて悔しい
と思った私は、「何とかします。仕事
やらせてください」と答えていた。

そしてもっとすごいことを発見した
のは、私はパソコンで記事を作ってい
たのだから、それを「添付」としてE
メールで送れば、フロッピーの持参の
必要はない、ことだった。

厚手の本を作るとなれば、パソコン
でもフロッピーは必要だが、原稿用紙
五枚ぐらいなら、問題はない。その仕
事を引き受けて、私はパソコンに魅せ
られてしまった。いろいろとすごい
るんだもの。

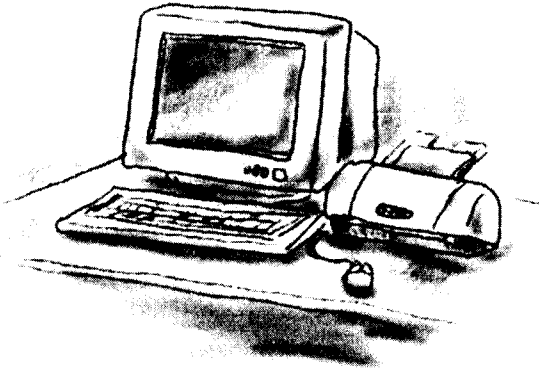
パソコンで文章をつくる。わざわざ
印刷せずに、パソコンからファックス
を送ることができる。

名簿を登録しておけば、一回で送り
たい人全員に情報を送ることができ
る。

私の場合、一回に、大勢の人に送る
というほどのお知らせはないが、学校、
役所、選挙、市民活動などでは大いに、

経費と時間の節約になることはまちが
いない。

また、調べ物ができる。姪がインタ



インターネットで買った、格安チケットで米
国に行つて来た。友人は出張に出かけ
るときは、インターネットでホテルを
探し、予約をいれ宿泊した。私は映画
館のプログラムをホームページで調
べ、プリントアウトをして、割引して
もらう（飲み屋さん、美容室、映画館、
ホームページのプリントアウトをした
紙を持参すると、サービスがある）。
そんなお得なことがある。私が知ら
ないこと、まだまだあるだろうが、こ
の機械はそれほどすごい。

だから、情報格差がありすぎる。

米国での話。パソコンを持ち、使い
こなせる人と、そうでない人との経済
格差が広がる、ということだ。車を買
う場合に、パソコンで見つけて買うの
と、そうでないのでは、金額に大き
な差があるのだそうで、富める者はさ
らに富み、貧しき者はさらに貧しくな
る、という現象が起こる。私が利用す
る程度では、さほどの差はないが、姪
の航空チケット、車、他の高額な物は
バカにできない。

パソコンを持って使いこなせる人とそうでない人の情報格差は開くばかりだ。

パソコンって

本当に必要なの？

パソコンは本当に必要か？と思うことがある。確かに便利だし、近い将来パソコン通信や、取引や、仕事が主流となりそうな予感がある。日本の政府だって政策に掲げているほどだ。今までは、パソコンを習いたいと思えば、少なくともお金をつき込んで習得していた。今年に入り、市、県の広報誌では無料の学習会が開かれている。これは、政策がその方向に進んでいるということだ。

パソコンで、お知らせなどを送ることが可能になれば、市、県、学校、企業、その他、団体の出すお知らせはクリックひとつでことが済む。通信費、印刷代、紙代が大幅に減ることだろう。ただ、残念なことに日本中の家庭に

この機械が浸透するにはまだ、時間がかかりそうだ。それまでは、仕事はより複雑な状況の時期がある程度続くことだろう。

先日、ODA民間モニター大募集の記事を見つけ、ホームページを見た。さらにホームページからでも募集要項が手に入る、という案内があり、その操作を試みたが、手に入らず。私は、まだ、パソコンと仲よくないので、操作を間違えたかな、と思った。

そこで電話で問い合わせ、募集要項を申請し、ホームページでは手に入らなかった旨を告げると、「申しわけありません、他からも苦情が出ています。何かソフトが必要なようです」との答え。私の操作が悪いわけではなかったのだ、少し安心した。

でも、大きな組織の専門家が作ったものでさえこのようなトラブルがある。みんなが混乱している。まだまだこの世界は未知の世界、研究が必要な世界だ。

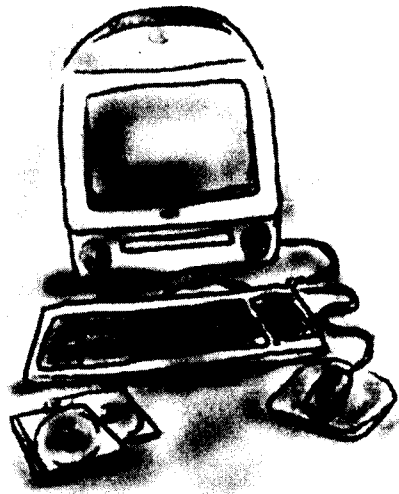
私個人では、どうか。

私がパソコンを少し使えるようになって、変わったことといえば、文章をたくさん作れるようになり、作品を量産できるようになったことがあげられる。今までワープロを使っていなかったことを悔やんでいる。手書きのときは、頭でぐちゃぐちゃ考えていることがあっても、いざ、文章にするまでには時間がかかり、結局作品にできないでいたことが多かった。

作品は、いくつか平行で行うことができるので、気分転換をしながら、書くことを続けられる。紙が散らばらない。作った作品はそのまま、すぐに添付メールで送れるのもいい。

海外、遠距離の場所に住む友人たちとの連絡にもたいそう役立つ（転勤族だったので、知り合いが、アフリカ、オーストラリア、マレーシアを始め、日本全国に散らばっている）。

息子が宿題で方言を調べたいと、インターネットを使っていた。部活動が遅く帰ってくる息子は図書館に出かけていって調べている時間がない。それ



を、インターネットはどんな時間でも開業しているから助かる。

彼が調べた、津軽弁、南部弁を見ながら、私は「方言って文字じゃ、方言の本来の感じは伝わらないね、やっぱり音声だよ」と言いつつ、しゃべって聞かせた（私は青森県の八戸生まれ）。息子は英語の発音のように私の後から、繰り返してしゃべった。その

夜はそんなことが話題になり賑やかだった。

最後に

私自身まだ、まだパソコン機能を使い切っていない。もっと、便利な使い方があろうと思うている。それはそのつど出会ったときに、人に聞き、

調べ、練習し、クリアしようと考えている。

先日銀行で振り込みをした。通帳があつて、その中からカードで振り込みをすれば、窓口のほぼ半額、同一、提携銀行なら四分の一ほどの手数料で送れることを発見し、自分でも驚いた（知っている人にとってはなんでもないこと）。

パソコンも同じで知ってしまったえば、簡単な操作だということだ。自分にとってパソコン機能の何が必要なことか、考えてみてはどうだろうか。持っている人ならどんどんやってみる。子供のように、ともかくやってみる。まだ、手に入っていない人は、選択は自由だ。

私のライフワークに、パソコンは必要不可欠なものになりつつあることは確かだ。必要なんで全く感じていなかったのに。何でもそうだけど、できるようになれば自分の世界が広がることは確かだ。パソコンは私に新しいステージをくれたみたいだ。

パソコンは友達

東京都板橋区 山本雅子 (68歳)

私とパソコンとの付き合いは、十年余りになる。息子が学生時代(理系学部大学院では、必要なものだったらしい)愛用していたパソコンを、ときどきこっそり借りてゲームを楽しんでいたの、一人立ちして家を出るとき、お饞別に新しいのを買ってやり、慣れ親しんだパソコンは、ゲームのソフトと一緒に置いていつてもらった。それから六年後、息子はホーナズで、パソコンアップした同じ機種(わからなくとも困るから)パソコンを買ってくれた。

現在私は、一日に二時間以上もパソコンの前ですごしている。ときには半徹夜することもあり、(インターネッ

トで電話が使えなくなるので、みんなが寝てからはじめる)孫のゲームボーイのやりすぎを叱れずにいる始末である。

何をしているかって? ひたすら遊んでいるのです。私のパソコンの棚には、五十種類以上のゲームのソフトが並び、「今日は私と遊ぼうよ」、「いえ私と遊んでよ」と呼びかけてくる。好きな将棋も麻雀も、女だてらに一人では会所に行きにくくても、パソコンならいつでも相手をしてくれ、しかも弱い強いのお好みの相手を選べる。その上マケがこんであきてきたら、ハイサヨナラと電源を切ればよい。攻撃的な気分の日は、アクションゲームで、

バンバンドカーンと敵をやっつけばいいし、パズルゲーム、カードゲームは頭の体操になる。草の目を読み、風向きを変えてゴルフゲームをしていると、気分はすっかりゴルフ場。人間関係のわずらわしさからのがれたい私にとって、こんなすばらしい友達はいない。

メールアドレスも持ち、メールの交換もしている。お互い時間がとれたとき開けばいいのだから、相手の都合を考えずに発信でき便利である。他人のホームページを開くことがあっても、まだ私のほうから発信していない。娘たちは、インターネットで買い物もしているようだが、カタログ販売も嫌いな私は、見るだけでまだ注文したことはない。

年賀状は、五年ほど前から自分で作ることにしている。夫は毎年四百枚くらい書くので、その分の印刷も引き受けている。しかし、年の暮れが近づくと、毎年覚えて毎年忘れ、どこかの部分で子どもにも応援を頼んでいる始末で

あるが、一年に一度なんだもの忘れたってしょうがないよと居直っている。ただし住所録は完璧で、死亡通知を出すのはここまで、喪中はがきを出すのはここまでと、年初相手の年賀状(喪中はがき)で差しかえをしている。

もう一つこれは余録の楽しみだが、十歳と八歳の孫が私の部屋へゲームをしに来てくれ、新しいゲームも教えてくれる。まだ練習量が多く、経験がある私のほうが勝てるが、最高得点がつ孫の名前に変わるか(変わったのも大分ある)ヒヤヒヤものである。

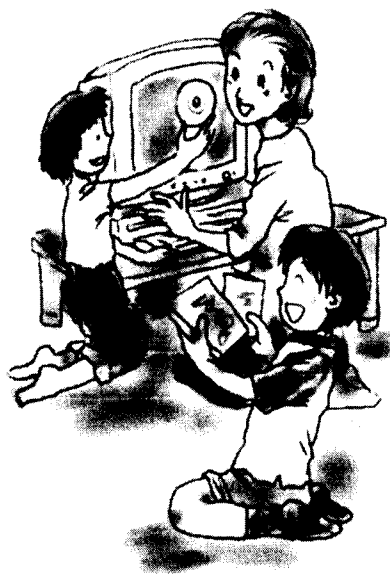
こんな大切なぞして愉快な遊び友達でありながら、私はパソコンのことをあまり知らないし、理解していない。「ここを押せばいいのだよ」「ここを押すところなるよ」(すべて英語表記である)と、言われたことだけやっているの、ときどきパソコンが反乱を起こす。「印刷しなさい」と命令しても印刷してくれない。メールを送りたいのに届けてくれず、何やら英文で出てきても理解できない。文章をたて書き

にしたいのに、横書きから変わってくれない。ゲームをしても、「ここから先は○○○(英語のカナ表示)ですから、△△△して×××してください」と書かれ、何が何だかさっぱりわからず先へ進めない、などなど。

区で無料IT講習を行なうというので、我が友をもう少し理解するべく参加申し込みをした。しかし一日三時間×四日間×十二時間の講習で、しかもお年寄りや主婦の初心者ではどんど

ん先へ進める道理もなく、「マウスをクリックする」とか「インターネットとは」とか、やたらカタカナ文字が出てきて理解するのに「苦勞」。その上に「文字入力はすべてローマ字でやりましょう。どうせ覚えるならそのほうが楽です」と言われても……。こまかいことを質問しようとしても、機種が違いうとやり方が大分違うらしく、適切な助言は得られなかった。

結局、娘や息子が暇そうなときを見



計らって、電話をしたり、メールで聞いたりにすることになる。幸いなことに、私がパソコンと遊んでいることを大歓迎している娘や息子は、来る度に新しいソフトを持って来てくれ、一つずつ新しいことを教えていってくれる。孫の学習ソフトも一年から六年まで揃えてあって、授業参観に行かなくても、学校で学習していることが理解でき、その時々適切な助言ができる。

というわけで、パソコン本体のことはわからないながらも、習うより慣れるで、どうやら初心者域は脱出したようである。

お年寄りが、波に乗り遅れまいとパソコンを買ったが、覚え切れずに結局飾りものになってしまっているという話をよく聞く。それは、パソコンがむずかしいからではなく、自分がパソコンで何をしたいのかが判っていないからだと思う。テレビと同じような顔しながら、スイッチを入れてもあちらからは何も与えてはくれない。

しかし、こちらの求めには即刻応じてくれる。「どこそこへ行きたいのだから……」とデータを出せば、自分の最寄り駅から何にのって、どこでのりかえ、料金はいくら、時間はどのくらいと幾通りもの方法を教えてくれ、泊まり先もピンからキリまであげてくれる。現在やっている演劇関係はもちろん、来月にはどこで何を上演するのかも全部画面に出るし、プリントすることもできる。要は、自分がパソコンに何を求めているかということが大きな鍵になる。

演劇だって旅行だって、年に何回かという程度で、あえてパソコンで探さなくてもよいといえはその通りである。私は、遊び相手を求めてパソコンを選んだ。パチンコ屋にも行けない、雀荘にも行けない、ゲームセンターにも行けない。あの雰囲気が好きでない上に、家を留守にするのもいやだった。相手がいる場合には、あちらの都合に合わせてるのも面倒だった。だから私にとってパソコンはとても好都合な遊び

相手だったのである。

夫は自分史を作りたいと言っている。それなら差し当たって文書の機能だけ覚えればよい。息子は子どものアルバムをパソコンで整理している。デジカメと連動して、いつでもあの時のあの写真が画面一杯の大きさで見られるし、勿論カラーでプリントもできる。

あれだけ複雑で、多機能をもつパソコンを全部覚えようと思ったら、気の遠くなるほどの労力と時間がかかるだろうし、私のような年寄りには、覚えるそばから忘れてしまうだろう。自分のやりたいこととパソコンの役割を考慮して購入したら、こんな便利なものはないし、楽しいものはない。先ずはじめは一つ覚えて、それからゆつくり次へ進めばよい。

テレビは座っていても、スイッチを入れればあちらからいろいろ情報を与えてくれるが、パソコンはこちらから働きかけなければ、ただの箱である。でも人生をバラ色にしてくれる宝箱でもある。

夫の中指に感謝！

埼玉県所沢市

うつつみすみえ (67歳)

パソコンとの付き合い、それはそもそも夫のせい？ いや夫のおかげといふべきか。

五十四歳のときワープロを買った。字の下手な私にとってワープロはミシンに次ぐ宝物になった。手紙、書き残しておきたいもの、年賀状、と、それはそれは便利で私を夢中にさせてくれた。

ところが何を思ったか、定年退職をして時間ができた夫が「俺もやる」とワープロの前に座るようになったのである。

そのころ私は、ブラインドタッチとまではいかなければ、けっこうキーボードを見なくても打てるようになって

ていたからよけい面白くなっていた。

ところが夫が一度ワープロの前に座るとなかなかワープロが空席にならない。ふと覗いてみると夫はコッチン、コッチンと一本の指で、しかも仮名打ちである。文字の位置が頭に入っていないのか、まるで迷い箸のように、キーボードの上に五本の指を広げ宙に泳がせながら、中指一本で一字一字打っている。

それでも私のほうで用がないときは「まあまあ大変ですね」とからかって楽しんでいたので、人様からテープを起こすことを頼まれたときに考えてしまった。これはもう一台買うしかない。

奈良にいる息子に電話した。「お母さん、もう一台ワープロを買おうと思っただけで今度は何を買えばいいと思う？」

息子は大手ハウスメーカーの技術研究所に勤務しているから、コンピュータは体の一部のような仕事をしている。だからワープロのことも分かるだろうと単純に考えての相談だった。

「これからはパソコンの時代だよ。お母さんならできるよ。ワープロであればだけできるのだから」

息子は、私が娘の友達を通じて、ワープロでの仕事をときどき頼まれて、ちよっとしたバイト料を稼いでいることや、画像ファイルで年賀状を作ったりしていることをさしている。

そりゃあ私も体をこわして仕事を辞めるまでは、天下？のNTTでコンピュータは使っていた。だがそれは、専用の特別にプログラムされたもので、電話に関することだけである。

たとえばきめられた数字を打ち込めば電話の設置場所が登録されるとか、

電話番号を入力すれば、その加入者の氏名、設置場所、電話帳に載せている名前、使っている電話機はどういう電話機かなど、その加入者のすべてが分かる、電話に関することだけである。えらそうにコンピュータを使っていた、などといえるものではない。

正直いって、この歳で？ 理数系とは縁のない私が？ とちよつと手を出す気持ちにはなれなかった。さんざん考えたけれど持ち前の好奇心が、家電店へ足を運ばせてしまったのである。

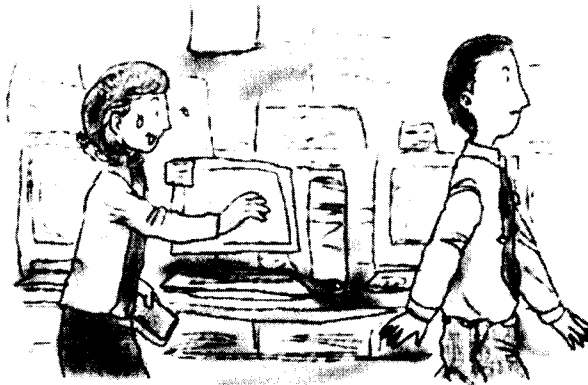
「初心者とか、お母さんのような若くないひとにはマックがいいよ。扱いやすいから」

という息子の言葉に励まされて、
「あのう、初めて買うんですけど、
どういいうのがいいでしょうか」

市内はいうに及ばず周辺の他の市へも、家電店を片っぱしから車を飛ばして覗いて歩いた。金額は少しずつ差がある。金額と同様店員の態度も差がある。

少々頭が白くなっている私の顔をみ

て、まるで「あんたじゃ無理よ」と言わんばかりにろくすっぽ足もとめない店員の店もあった。



そういう店はこちらのほうでごめんである。息子からも言われていた。「あとあと何かあったときちゃんと面

倒をみてくれるところということを考えて、店員の態度をよくみたほうがいいよ」と。

あるとき馬鹿にした態度をとった店には、その後どんな小さなものも買いにいったことがない。

結局、プリンタ、パソコンデスクも含め全部で二十三万円也でいちばん親切な店で買った。六十歳の秋だった。余談であるが、その店は以来何でも買うことにしている。十四年使った冷蔵庫も、今年の春、リサイクル法実施直前に、十五万円也でその店で買い替えた。

さて、パソコンを車に載せてもらい、夫に手伝ってもらって、娘達が出て行った部屋に備え付けたときの嬉しかったこと。「わーい、私だってパソコン使うんだぞ！ 六十歳になったって使おうんだぞ！」

そしてどきどきしながら取り扱い説明書を開いたときである。「なんでこんなに横文字なの？ カタカナ語なの？」

マウスだ、クリックだとその辺りはなんとかなった。トリセツ（取り扱ひ説明書）の絵をみながら文字に従ってやってみれば、ちゃんとその通り動いてくれるから。

ダイアログボックスって何だ？ ウインドウって？ プレビューとは？ 日本で作っているものなのに、なんでフォントの表示が英語なの？ トピックってなんのこと？ ツールバー？ メニューバー？

ああ、もうだめ。生まれつき脳みその入っている袋は胃袋より小さいのに、歳とともに働きの鈍くなった頭でこんなものを見たって覚えられるわけがない。目でとらえたものを必ずしも手が覚えてくれるわけでもない。

私ってこんなに頭悪かったのかなあ。やつぱり無理だったのかなあ。無駄なお金使ってしまったのかなあと落ち込んだり、後悔したり……。

そして気がついた。そうだ頭で覚えようとするから無理なのだ。体に叩き込めばいい。昔の人もいったではない

か。「習うより慣れろ」と。

さあ大変。家事は共働き時代より手抜き。朝から晩までパソコンの前にしがみつくことになった。

少しやるとカタカナ語の意味がまた分からなくなり、前のページを開いてもう一度、三歩進んで二歩後退ならぬ、一歩進んでは一歩後退である。これではちっとも進まない。

それでも使用者名のところに一応「最後の道楽」といれ、所属課に「毎日日曜日」と入れたときには嬉しくて、これは私だけのものだぞ！と一人でニヤニヤ。

毎日毎日、サンデー毎日の暮らしを活かして「慣れろ、慣れろ」と励んだ。そして、少し慣れてきたら、今度は面白くて、面白くて、一人で黙っているのではなくて友達に喋くりまくることになる。

「ねえパソコンで面白いよ。すごくお利口なの。間違ったらちゃんと間違いだよって教えてくれるのよ」
「手紙に絵も入れられるのよ」

「ワープロだったら絵を入れたいときには、いちいち画像フロッピーっていうのを入れないといけないけど、パソコンだと、そのままできるの、それもね、さかさまにしたり、大きくしたり小さくしたり、場所にしてもマウスというので、簡単に持っていけるの」
まあよくも喋ったものである。まるで世の中でパソコンを使うのは私一人と言わんばかりに……。

そうこうするうち、買ってから四か月過ぎて「年賀状」の季節となる。例年なら投函締め切り日までに出したことなどないくせに、この年は早かった。面白くて、といってもEQの低い私に絵心なんてあるわけがないから、パソコンを買った店へ行ってイラストがたたくさん入っているCDを買ってきた。それをインストールし、その絵を呼び込みいろいろ手を加え、といっても大きくしたり向きをかえたり、他のイラストと重ねたり程度のもので一応「私がついたのよ」というものができた。それを自慢していたら、作ってほし

いという奇特な方があらわれて、ずいしく引き受けバイト料をちょうだいしてしまった。

あれから七年。二年前に新しく買い替えた。前のは容量も少なく、メールもできない。新しいパソコンにしたなら、自立するなんて言って出て行った娘が帰ってきて、勝手にフォトショップやイラストレーター等をインストールしているいろいろやっている。

今私が出ているのは、息子夫婦をはじめ、友達とのメール交信、エクセルで家計簿、友達に頼まれてカードを作ったり、順番で回ってくる町会の班長になったときに、お知らせや、町会費の集金袋を作ったりけっこう重宝している。

特に一昨年の暮れに買った年賀状用のソフトは、本当に賢いソフトで暮れの忙しいときには大助かりである。

「お母さんの友達をよくやれるねって、いつてくれるよ」と娘に自慢したら、

「マックできる人百人に聞いた？」

といわれてしまったが、全くその通りで、決してできるうちに入るわけではないが、今のところは生活上何かと便利に使っているから、自分としては満足している。

そしてふと気がつけば、あんなに分らないと悩んだカタカナ語は、今も意味はよく分からないけれど、手のはうは必要に応じて動いていた。

手芸や縫い物で、毎日追われる生活ではあるけれど、そして家を立て直すため仮り住まい中なので落ちつかないが、そのうちイラストレーターに挑戦したいと思っている。

初めてパソコンを買った二か月前にロックミシンを買ったとき、もう道楽は止めようと思ったけれど、パソコンは本当に最後の道楽である。

そして夫はというと、あれから十二年経った今も、相変わらず迷い箸をしながら指一本でやっている。

夫の中指に感謝！

(え・渡辺美帆)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がいたします。



エッセイスト・クラブ

過去の記録

埼玉県新座市

木原紀子（66歳）

先日、図書館にて「東京大空襲」というタイトルのビデオを手を取った。昭和二十年三月十日の記録である。今から五十六年前の生々しい状況がそこにあった。

深夜十二時から三時十五分までの米国のB29による襲来、そして破壊の映像である。B29は東京の下町を主に襲った。隅田川は火の河と化し何十万人もの死体が河をうずめつくしたと言う。真黒くこげたマネキン人形のような死体があちこちのころがつている。小学生のころ、そうした隅田川の惨状について聞いた記憶がある。

昭和二十年三月十日といえれば私は小学三年生であり、疎開先の青森の父のふるさとで父母を待っていた。三月十日の大空襲までがんばって家を守ってきた両親だったが、その日を境に私の待つ青森へ逃げ、一年ぶり

の再会となった。幸い中野区A町にある私宅は戦火を免れたが町のまわりは廃墟と化したということである。

当時、父母妹が防空ごうの中で、頭上をB29のどろんどろんという爆音を聞きながら過ごしたという話は、今もうろ覚えに頭の中に残っている。それは家族の中で私だけが未経験のことであった。

五十六年の歳月はすっかりそのような記憶もうすれさせていた。今あらためてビデオを見ると、このようなことが、たかだか五十六年前に実在したこと、そして現東京ことにお台場付近の発展を見るにつけ、時の流れの残酷さを思わずにはいられない。今ほとんどの人々が忘れかけているか、または全く知らない世代の人達が、ウォーターフロントの頭上をかけぬけて行くジェット機をどんな思いで見ているのか知る由もない。十万人とも三十万人ともいわれる無念な魂はすっかり成仏されているのだろうか？

今再び平和を願う気持ちと共に、かつてのやりきれ

ない戦争の思いが私の胸中をかけぬけて行く。

図書館の片隅に忘れられたようなビデオの記録が、遠い昔の記憶をよみがえらせてくれた。

次回お台場を訪れた時こそ、悲しい魂を思つて祈りたい。

「あの日の事」

君達は知っているかい？

五十六年前のあの日を。

真夜中の空から火のかたまりが降ってきて

河をまっかな火で染めた時のことを……。

何十万の人が、まっくらいマネキン人形となり、

河を岸をうずめつくした時を……。

お台場の休日はやたらに明るい。

若いカップルも老いたカップルも足どり軽やかに楽しそう。

今日も隅田川をのんびりと遊覧船が往き来する。

何ごともない平和な日々。

でも、たまには思い出そうよ、あの日のことを……。

且つての日、数十万の命が散つた時のことを。

今ふたたび、故人の冥福を祈り、日々のしあわせを感謝しようではありませんか。

二〇〇一年 八月

帽子

千葉県船橋市 寺田真佐

わたしは帽子が似合わない。丸顔のせいかな帽子を被ると、なんだかこっけいな感じになってしまつて残念である。少女のころの海辺の麦わら帽子が、まあ、似合っていたらどうか。帽子を被つた素敵な人を見ると羨ましくて、デパートの売り場であれこれ手に取つてみるのだが、これぞと思えるのに出会つたためしがない。上手に勧められてつい買つてしまった帽子が、押し入れの奥にくつも押し込んだままになっている。

この春、古くなった家を改築したので、これを機会に不要の品々を処分することにした。帽子も取り出して、あきらめ悪く、一つ一つ被つては鏡を見るがやっぱりだめ。全部捨てた。

さらに、古い洋服を整理していると黄色い手編みの帽子が一つ出てきた。ペっしゃんこになつた形を整えてみると、長編みのキャップに細編みのつばが自然に反つていて、被つてみるとなかなか似合うではないか。頭をつつむ毛糸の柔らかな感触、鏡の中からじつとこちらを見ている黄色い帽子のわたし。ふと小さなタイ



ムトンネルをくぐる。

そうだ、わたしは自分で編んだこの帽子を被り、これも手製の緑のオーバークートを着て、雪を踏みしめ踏みしめ、毎日のように図書館へ通っていた。まだ子どものもない若妻で夫の赴任先、盛岡市郊外の官舎暮らしだった。一人ぼっちの所在なさに、小説ばかり読み暮らしていたあのころの、若い若い自分の姿が甦る。

官舎の奥さんたちに、「いい帽子ね。作って、作って」と頼まれるまま、同じ帽子をいくつ作ったことだろう。オレンジ、白、紺、赤、ピンク、緑と、鮮やかな色を選んでせっせと編んだことを思い出す。

思えばあのころは、なんとたっぷりと時間があつたことだろう。「お願い」と言われると喜んで誰にでも作ってあげていた。若いころのわたしは、今よりずっと親切な人だった。ひとのために手間暇を惜しまなかった。なぜか、今の自分の有り様がかすかに悔やまれる。

あれから三十年余り、案に生きるこつを少しずつ身に纏って、それはそれでいいはずなのだけれど――。

わたしは、帽子をタンスの隅に丁寧にしまい、バラゾールを乗せて、次の仕事に取りかかった。

(え・栗田笑)

ドリアン狂



仙台市泉区 馬場紹美 (30歳)

嗚呼、ドリアン。果物の王様。

最近では日本でも見かけるようになってきたが、お値段も王様級なので、とてもじゃないが手が出ない。でも、でも食べたい。私と夫は大が四つも五つも付くほど、ドリアンが好きなのだ。

アジアのいろいろな地域でドリアンを食べることができるが、なぜか私達はいいつも、タイで食べることが多かった。タイでは四月の下旬ごろから、ぼちぼちとドリアンシーズンに入る。もっ

とも都会のバンコクなら、お金を出せば一年中食べることができるけれど、やはりベストシーズンに食べるのが何てったって旨いのだ。それに値段も手ごろになるのだ。私の知るところでは、キロ当たり安くて三十パーツ。高いときは六十パーツもする。一食二十パーツも出せば、お腹一杯になる物価の中で、ドリアンは安くて百パーツ以上はするのである。百パーツといえは、タイの日雇い労働者の一日分の給与

と、そう変わらない。それくらいドリアンは高級品なのだ。

ドリアンの大きさは品種によってもいろいろあるけれど、平均して二キロから三キロくらいのものがベストだと思ふ。こう書くと、そんな大きなものをペロリと平らげること、驚く方がいるかもしれない。しかし、ドリアンを食べた経験のある方ならご存知だと思ふが、目方のそのほとんどは、あのトゲトゲのゴツツイ皮なのだ。しかも、

外見はいいけど中がスカスカだった、なんてことも意外とあるし、ドリアン買いは正にギャンブル。売り手と買い手、どちらが勝つか、一瞬も気を緩めることはできない。

もしあなたが、いかにも『金を持つてる日本人観光客でございます』なんて態度で、ドリアンを買おうものなら大変。早口のタイ語か、メチャクチャイングリッシュの総攻撃で、バンバン値を釣り上げてくる。そうなたらもう、あなたの負け。泣く泣くドリアンを諦めるか、売り手の言い値で買うしかないだろう。

さて、ドリアンシーズンに入ると、リヤカーにドリアンを山と積んで売り歩くおじさんが出没する。

まず私は、町を流して売るおじさんのルートは頭に入れておく。と言えは面倒な感じもするけれど、毎年似たようなルートで売り歩いているし、シーズン中はおじさんと何度も出会うので心配はない。しかし、決しておじさんの後を追ってはいけない。そんなこと

をしたなら、自分がドリアン狂だとバラすようなものだからだ。

いかにも、ひよっこり出会っちゃったな、こりゃ参ったね、ありやドリアン売りだよ、どうするよと、いう顔しておじさんに近付く。おじさんは大概、無口で無表情だ。冷やかしの客とは口をきくのも無駄って顔しているのだ。ドリアンを眺めながら声をかける。「ねえねえ、このドリアンはどこ産なの？」なんてちよつと通ぼく見える質問をしてみるのだ。でも、そんなこと尋ねてドリアン買ってる地元民を私は見たことない……。通ぼく見えてると思っているのは私だけかもしれない。

しかしおじさんは「今日は○○地方からの出だよ」と、ちゃんと答えてくれるのだ。嬉しいじゃないの。

まあ、そんな感じで友好的な会話をしながら、私の目は爛々としてお宝（ドリアン）を見つめているはずだ。そしてそのとき、「おおっこれは！」というモノが目についたら、すかさず取り出してみる。横目でおじさんをチ

ラリと見ると、「あ、そ、それは……」とでも言いたげな、焦りの表情を一瞬見せた。しめた！こんなときは「当たり前」のことが多いのだ。

私はおじさんの小さな動揺など全く無視して、ドリアンのオシリ（と私が呼んでいる部分）の匂いをクンクン嗅いでみる。中の実が熟して食べごろになると、そのオシリからドリアンは、なんとも可愛い「プハッ」というオナラをするのである（注・音はしません）。私は「ドリアンペ」と呼んでいるのだが、このドリアンペが強烈にいつてから食べないと美味しくないのがある。

次は手に持ったドリアンの匂いを嗅ぎつつ、おじさんのナイフをちよいと借りて、柄の部分でドリアンの横っ腹あたりをポンポン叩いて見せる。するとおじさんは、「おっ、この姉ちゃんイーブン（日本人）のくせにドリアンの買い方知ってやがるな……」ってな顔つきをする。

これでやっと、おじさんも本格的に

商売する気になるのか、ちよつと口数も増えて、「今年はできがいいですよ」なんて話し出したりする。そしておもむろにナイフを取り出すと、ドリアンの

横つ腹にグサツと突き刺し、グリグリと刃を動かす。おじさんは、あのゴツゴツの皮に覗き窓のような切り込みを入れたのだ。「フンツ」言葉だが、鼻息だかわからないが、客はこの合図で、その覗き窓からドリアンの中身をチェックするのである。このとき、見るだけではダメで、必ず指で実のプニプニ度も確認しなければ素人と見なされ、粗悪ドリアンを掴まされかねない。

そして、よしと思つたら、「ポーボーディー（大体いいんじゃないのお）」とか、なんとか言つて、やつと、やつと値段交渉なのだ。

これはもう、アジアに住まう者なら日常のことなので、モノがよければその血まなこにならずとも、スマートに交渉できる。

商談成立後、おじさんにお金を渡したら、ドリアンの中身だけを出しても

らう。都会では、オフィスやホテルなどの中に、ドリアンの皮を持ち込むことは、あまり好ましい行為ではないのだ（皮がくさい元だから）。

おじさんは、ペリペリツと力強く外皮を剥がすと、ゴツい指からは想像もできないくらい丁寧な手付きで、中の実を出しにかかる。白い薄紙を実にあって、直接指が実に触れないようにして皮から出し、一つ一つ丁寧に包んでビニール袋へ詰めてゆく。緊張感が伝わってくるほど、おじさんは慎重である。それだけドリアンが高価で貴重なものだ、とも言えるだろう。

今までタイ国内のいろんな所でドリアンを買つたけれど、大体このような儀式を経て、やつと私の元へやつてくるのだ。

しかし、他の人もこんなに苦労して買っているのだろうか。もちろん私だって、バンコクのデパート、例えば東急や伊勢丹の食品売り場には、ラップ

でぐるぐる巻きになった剥き身のドリアンが売られていることは知つてい

る。しかし、ドリアン狂の私としては、皮から出して何時間経つたか分からないようなドリアンは食べたくないのだ。フレッシュでピチピチした、活きのいいドリアンを入手するには、やはりあれらの儀式は避けて通れないのかも、と思つているのだ。

さてさて、めでたく手に入れたドリアンのお味は……。フルーツというよりも、濃厚なクリームのような口当たり。でも乳製品ではないから、しつこい味はしない。ネットリ甘くて、あらゆる果物の味と香りが、口一杯に広がっていく。うーん。とても私の文章力では表現できない。複雑で最高の味。

あまりの美味しさに頭がボーっとして、体がぼてり出す。まるで酒に酔つたような気分にする。この味を覚えたら、もう病みつき（何か中毒になるような成分が入ってるんじゃないかと疑いたくなる）。

しかしここで、一つ重大な注意がある。ドリアンを食べた後のコーラはよくても、アルコールは絶対に「ダメッ」



と言われている。タイ人にきくと皆、「死ぬよ！」つて答えが返ってくる。ホントかなあ？とも思っただけれど、命懸けてまで試すほど、私も無謀ではないので、ちゃんと守っている。

考えてみたら、最後にドリアンを口にした日から、もう既に一年以上経っている。ドリアン狂としては、そろそろ禁断症状が出てもおかしくないころだ。かといって、失業中の身、「ドリアン食べにタイへ行つてきまゝす」なんて優雅なことしたいけど……。嗚呼、資本がない……。

そこで私は考えた。日本のどこかに、ドリアン農園を作ればいいじゃないかと。ドリアン農協も作って、組合員には格安でドリアンを販売。ドリアン郵パックもきつと大ヒット。村はドリアン景気で沸き上がり、夏の祭りはドリアン音頭で大フィーバー。

ねえ、どなたか本気でドリアン作ってくれませんか。そんな酔狂な方、乞う連絡！

(え・筆者)

国会議員になつてしまつた③

東京都千代田区 黒岩ちづこ

中村敦夫さんと会派を組む

七月で私の任期が切れる。たった四か月の議員生活とあつては一日でももつたいたい。私は自分のやろうとしてゐることを早く厚生労働省に知らせたかつた。幸い、さががけの旗を独りで守つていてくださった中村敦夫さんと、二人で「さががけ環境会議」という会派を組むことになり、敦夫さんを通して厚生労働省の人に来てもらつて

二つのことを申し入れた。

一つは最近知り合つたばかりの難病の若い友人が、全く寝たきり状態で情報取らぬから取るしかないというのに、点字図書館にある視覚障害者用のテープが、視覚障害者にしか借りられないという現実を何とかしてほしいということ。

もう一つは学童保育の問題。二十人集まらないと国からの補助金が出ないというの、田舎ではほとんど補助がもらえないことになる。二十人集める

ことが不可能の地域がたくさんあるという問題。

早速やつてきた役人は、私のことを議員とは思えなかつたようだ。私が本人だと伝えたときの狼狽振りがおかしかつた。何しろそのときに着ていた洋服を敦夫さんは「ホームレス状態」と後に表現した、そんな身なりだつたのだ。うちの子どもたちに言わせれば「着ればいい」という程度の洋服を着ていたのだ。

そのときこられた厚労省の方はノン

キヤリといわれる方のようだった。まず点字図書館のことについて言えば、「著作権法の問題だ」と言うのみで、全く聞く耳なしという状態に思えた。しかし何はともあれ、厚労省の言い分がわかったので、私の質問は厚労省のみならず、著作権を扱っている文部科学省に対しても向けることにした。

委員会での一回目の質問は時間の配分がうまくいかなくて、途中切れになってしまい、せっかく来ていただいた著作権課の方に無駄足を踏ませることになってしまった。そこで電話を入れたと著作権課長が私の会館に現れた。この方は「あなたみたいな人がそこにいていいの？」と何回か叫んでしまうような型破りな人だった。たとえば、「あんなに閉鎖的な学校というところさえ、今では『地域に学校を開く』なんて言っているのですから、点字図書館がそんなに閉鎖的では時代に取り残されると言っちゃってください」とおっしゃる。わが意を得たりとばかりに二回目の質問をした。



「さがけ環境会議」の控室。中村敦夫さんと二人だけの部屋。
ここに首相や大臣たちがあいさつにくる

「もし、著作権の問題がなかったとしたら、厚労省としてはどうしますか？」

こうして「六月に点字図書館の全国の集まりがあるから、そのときにそのことを話しておきます」

という答弁を引き出すことができた。学童保育のことは小泉首相になってから、内閣として取り組むということになったので、任せることにした。

立候補を打診される

さがけ環境会議を結成してまもなく、敦夫さんから七月の参院選に東京都選挙区から無所属で出馬しないかという話があった。実は、初めて敦夫さんと話し合ったとき、彼はこう言ったのである。「政治家たるもの、一度それを志したからには、四か月で止めるといのは道に外れますよ」と言われても、さがけは既になきに等しい党になっていく。だから比例区で出るわけにはいかない。新潟選挙区では既に

内田洵子さんを推薦することにしてはいた私である。そこで立候補しては仁義にもとる。とすれば、考えられるのは小学校から東京だった東京都選挙区しか考えられない。

すると敦夫さんは言った。「東京都選挙区なんていうのは、四大政党が政党の生死をかけて戦うんですよ。そこに三年前僕が割り込んだわけだけど、あのときは自民党が二人出ていたからね。それでも僕はやっと四位という状態だからねえ。東京選挙区は難しいでしょう」。

ところが、そう言った敦夫さん本人が、一か月も経たずに私に出るようになってきた。折りしも、森首相への風当たりが最高の風力になっているときだった。

私は一日考えさせてもらい、身内に相談したうえで、ダメモトだからやってみようということになった。自民党の保坂三蔵はKSD議員だからこれを落として当選しよう、ということで見気込んだのだが、それも東の間のこと

だった。

かつて闘った国会に

私の初登院は三月十六日、夫は診療所を休んでやってきた。東京にいる長



初登院。長男、次女、三女と夫

男（実は私の秘書）、次女と新湯にいる三女と、四人の家族と共に、正門か

ら議事堂の中に入った。

かつて、六十年安保のころはデモをかける対象でしかなかった国会の中に、自分が今こうして入っているということがある、いくら四十年の歳月を経ているとはいえ、自分の中で少々ちぐはぐな感じをぬぐい得ない。

「南通用門はどこだ？」と夫は樺美智子さんが亡くなった場所を探している。自分もそこで一時胸部圧迫による意識不明になっていたのであるから。青春時代の私たち夫婦にとって、国会とはまさにそのようなものとして存在していたのである。

二十三日に、初めて本会議で議長から私が紹介された。初めて入っていった本会議場は、実にリラックスしてしまうところだった。私は大臣席のすぐ前の席で、しかも首相席に一番近いという位置だった。会派を組んでいる敦夫さんは私の後ろの席。

二人がそこに着席したとき、森首相から私の頭越しにこんな言葉が発せられたのだ。「中村先生、テレビでドラ

マを見ましたよ」敦夫さんがそれに応える。「あれは五年前に収録したものでなんですよ」三年前に議員になった敦夫さんは、それ以前にかかわったに過ぎないといっているのだ。まるでコタツ談義のような会話が私の頭越しになされたわけだが、その直後、森首相は、えひめ丸事故のときゴルフをやり続けたいということで、野党の厳しい追及にあうことになっていたので。

敦夫さんが言うには、テレビのニュースは、どこでもえひめ丸のことでの森首相批判なので、仕方なく時代劇を見ていたのだろう、とのことだ。

どちらにしても森首相の緊張感のなさを、初めから見せ付けられることになったのには変わりない。

その直後、私は議長より独りだけ紹介されて、参議院の一員となることになった。

初めての委員会質問

私たちのような小会派は本会議での

質問権はもっていない。だが、委員会では毎回最低十五分（往復、つまり相手の答弁も含めての時間）の質問時間がもらえる。

三月二十九日、坂口厚生労働大臣への初質問の後（二九〇号参照）、緊急雇用対策法案、欠格条項見直し法案と続き、どちらも私は障害者の就職問題を取り上げた。ここでも今まで活動してきたことをそのまま発言するだけで十分だった。

ただ、欠格条項についてはそれを撤廃させようということ、長年活動を続けてきた市民グループがあることが分かり、そのグループの方たちから資料を送っていただいてそれを活用することができた。終わったあとで、この市民グループの何人かの方々から「ホームページで質問の様子を見ましたよ。われわれが言いたいことを言っていただいて嬉しかった」と言われ、この役目こそが国会議員の仕事なのだと痛感した。このように外野席からしっかりみてくれる人がいると実感で

きて、益々意欲が盛り上がってきた。ここで森政権が終わり、一か月半、国会は空転することになる。

出馬表明

何しろ東京では全くの無名人だから、なるべく早く選挙活動に取りかからなくてはと気が焦る。しかし、自民党の総裁選とかち合っては、話題性がなくなるから報道されないだろう、などと考えながら、四月十三日に出馬表明をすることになった。

中村敦夫さんと二人で用意された会見場で、二十人ぐらいの記者を前に硬くなりながら意思表明をした。NHKの若い女性が興味を示してくれた程度で終わった。翌日の新聞は、どれも、これ以上小さくは書けないだろうという扱い方だった。

その後、世の中は小泉首相への賛歌であふれかえることになった。

それでも私を支援しようという人が、一人二人とやってきてくださった。

一番嬉しかったのは、私の中学の同級生で、敦夫さんの高校での同級生、小林寿美枝さんが事務所を預かってくれるようになったことだ。事務能力も人間関係も抜群、たくさんの要求を同時に処理してしまう能力には、私の秘書である宇洋（うひやう）がいつも舌を巻いていた。出馬表明の記者会見場の後ろで心配そうに立っていた彼女の表情は忘れられない。

早速彼女は中学時代の友達に連絡をとり始め、五日後には同期会を開いてくれた。四十五年ぶりに会う人もいた。私のクラスはつい数年前までクラス会を開いていたので、会ったことがある人が多かったが、同じクラスになったことのない人までがやってきてくれた。バレエ部で一緒だった久保田さんはその後、事務所に通ってくれるようになった。

高校の同窓会は私の学年より二年以上、一年以上、一年下の方たちが早速動き始めた。私の学年では同級生の妻達が真っ先に動き始めて、それから同級

生同士のカップルが事務所に来て電話かけを始めた。

私は高校時代、生徒会活動にかなり熱心に取り組んでいたもので、その関係の友人が多かった。そのうちの一人が自民党の加藤紘一である。

生徒会長（日比谷高校では行政委員長という）をしていた、一級上、二級上の方も精力的に動き始めてくださった。また、如蘭会という同窓会で「同窓生による講演会」が継続的に開かれていて、何年か前に私が講演をしたことがあった。登校拒否児や障害児の話をも、そのときに聞いたという人たちも動き始めた。

大学の同窓生も女子寮で生活を共にしていた友人をはじめ、女子卒業生の「さつき会」の方が動き始めた。ここでもさつき会員による講演会というのがあって、そこでも私の話を聞いたという人の動きが速かった。会員名簿によつて手分けをして電話かけがはじまった。

この電話かけというものは、相手の

反応がよければ力づけられるし、反応が悪ければエネルギーを吸い取られてしまう。また、人とのかわりが苦手という人にとつては、電話かけは苦行、人付き合いが好きな人にとつては大して苦にもならないようだ。

教員をしていたころの同僚や、教員であった人たちも現れた。

敦夫さんからの要求

出馬を決めた直後に敦夫さんから出された要求は三つあった。

- 一、メイクをする。
 - 二、めがねを取る。
 - 三、髪を染める。
- これら全て、私にとつてはかなりきつものだった。しかし敦夫さんは言う。

「選挙に勝つには若く見せることが大事」

ある程度納得して、すぐに実行に移した。その結果できた写真は、まるで別人のようだった。大方は「きれい！」



6月10日のパーティ。井出正一さんのカンバイ！

という反応だったが、私の子どもや近しい人たちは「やだー」という反応だった。

「実物を見る人より写真を見る人のほうがはるかに多い。だから、多くの人がきれいと思うのがいいのだ」が敦夫さんの言。それももつともだ。

私はこれまで、メイクをしないばかりか、鏡を見るということもほとんどしたことがなかった。人から自分ができるように見られるかということをあえて考えないできたというか、ただ単に面倒くさかっただけかもしれない。格好をつけていえば、それよりもっと大事なことがあった、といえるのかもしれない。

この三点の中で一番いやだったのはメイクだった。毎朝、自問自答する。「なぜ、ぬりたくらなくてはならないか」私は自然のままでもいくつもりだったはずではないのか。

男のしないことをなぜ女だけにするのか。また昔の「女としての被害者意識」が出てきている。口紅は唇が乾く

感じていやだ。汗が出ると粉が溶けて目に入って痛い（これは眼より上につけないという解決策を発見した）。結局こんな宣言をすることになった。

「投票日以後、メイクはしない！」

「めがねを取る」、については、敦夫さんはコンタクトを提案してくれた。しかし、私のめがねは遠近両用だが、遠のほうは片方は素通しなのだ。だから普通に生活するにはめがねが要らない。そこで四か月間、めがねなしでやってみようということにした。

困るのはただ名刺交換のときだけだった。いただいた名詞がほとんど見えないのだ。近のほうが必要度高いということが分かった。選挙期間中は名刺交換の頻度が極度に高い。だからかなりの不便に耐えた後、私は言った。「投票日以後、めがねをする！」それに対して敦夫さん「おしゃれなめがねにしてください」。なあんだ、それが言いたかったのか。確かに私のめがねはいつも一番安いもので、まさに「めがねでさえあればなんでも」という代



四男の代理スウェーデンの留学生ヨアンとうちの子どもたちと孫

その格好がいいからそのヘアサロンを教えてほしいといわれたほどののできばえだった。

一回染めてしまおうと後から出てくる白髪が目立つので、結局染め続けることになる。でも私はあえて、夫に聞いてみた。「選挙が終わってから、髪を染めたほうがいい？」。するとやはり染めたほうがいいという答えが返ってきた。私の父が母に言ったことと同じだった。

母は父が亡くなって染めるのを止めた。きれいな白髪になっていた。私も同じ道をたどることになるのかなと思いつながら、選挙後に染めに行った。

全体として、敦夫さんが黒岩ちづこを改革したのは成功だったようだ。何しろ、選挙期間中十歳以上若く見られていたのだから。洋服も全て、正子さんが選んでくれた。かっこいいよとよくいわれたものだ。足の長いが目立つ白のパンツスーツ、同じのを二着買って交互に着ることにした。

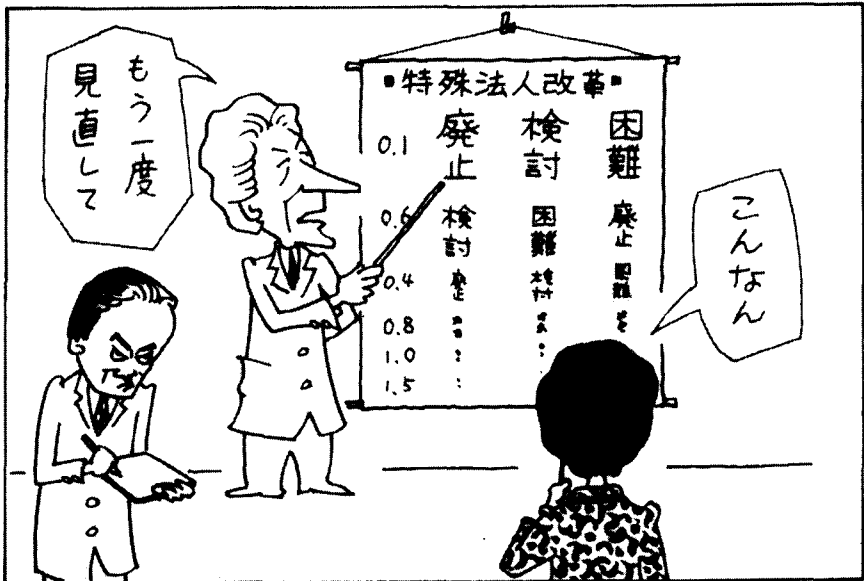
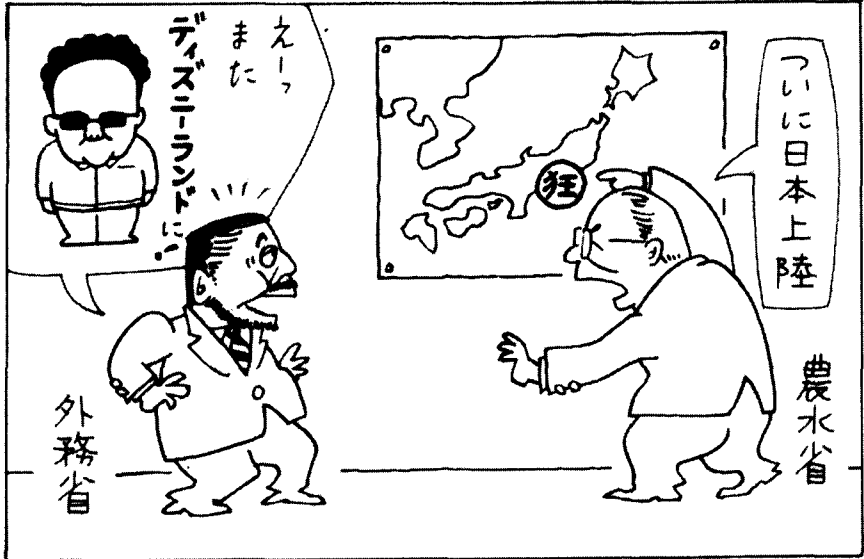
物だったことに気づいた。

「髪を染める」、は一度してしまえば、後は何もしないでいいので、一番抵抗が少なかった。カットに比べて時間が倍かかるのがいやだっただけ。でも敦夫さんの妻、正子さんが連れて行ってくださったヘアサロンは、カットも洗

狂牛病

(23)

一筆両断



自分で選んだお産

千葉県浦安市 永原香代子

子どもを産む場所も、立ち会う相手も、自分の意思で慎重に選んでいいのだ――。そんな当たり前のことに気づくまで、私はずいぶん回り道をした。一昨年秋、九歳の長男、六歳の長女に続いて、二女が生まれた。フルタイムで仕事をしながらなぜ三人の子どもを産みたいと願ったかは、一度「わいふ」に投稿したが、今振り返っても、なぜ

だろうと不思議な気分になる。子どもに対して無責任の極みかもしれないが、二回のお産で、納得できない部分があったからこそ、三度目にチャレンジしたいと思った。まさに自分自身のために。

お産は、忌み、嫌われるものと心はどこかで思っていた。だから、「私さ

え堪えれば、かわいい子が抱けるんだ」と思い、自分の体なのに自分のものではないような感覚に陥っていた。といっても、数ある妊婦の苦しみのうち、私の体験したのなんて、ほんの少しだ。いずれも自然分娩だったし、陣痛が来て半日足らずの「軽い」出産だったのだから。

一、二度目の出産は自宅近くのふつ

うの産科医院だったが、三度目だけはこだわりを持って、妊娠前からどういう環境で産みたいかを考え、自宅から車で一時間かかる東京都内の個人の産科医院に決めていた。二歳離れた姉からは「満足できるお産なんて、あんた、何を考えているの?」と言われ、身近に四人目を墜落産した(産気づいて、タクシーの車中で産み落とした)友人の例を話して聞かされ、ずいぶん脅かされたものだ。

なぜ、一、二度目の出産で納得できなかったか、というと、いきなり生々しい話になるが、私は初産のときまで、その産院で、剃毛、洗腸、導尿、血管確保をルーティンとして、ほぼ全員の産婦にされるとは思ってもしなかった。産気づいたら、車で迎えに来てくれたり、入院中の食事は豪華で、費用も個室のわりには近くの大病院よりも割安だったり。面会時間も家族ならフリーパスで、何より気に入ったのは、



自分で選んだお産

出産後希望に応じて、子どもをプラスチック製のコット(赤ちゃん用ベッド)に乗せて、自分の部屋に運んでくることが許されていたことだった。母乳育児のためには、何より早期の頻回授乳をと本で読んでいた私は、数々の点を総合判断して、その産院を選んだ。でも、自分の体にどういった試練が待っているかは、全然考慮に入れていなかった。

下半身をあらわにしたカーテンの向こう側から、名前を呼ばれての診察。相手は中年の男性医師だった。産婦仲間のうわさ話では、彼には離婚経験があり、隣の敷地内に住んでいた妻子はある日、彼を置いて出ていってしまったという。無愛想で、診察中も、私が恐る恐る「妊娠中に仕事を続けて大丈夫だろうか」と聞くと、「本人保険なんだから、そりゃあ続けたほうがいいでしょ」と、ぼそつと言う。そんな単純な割り切り方もあったのかと、かえってこちらが感心してしまうこともあった。地元でわりあい人気のある病院で、定期健康診断に半日くらい待つ

は当たり前だった。松竹梅の梅かなあ
と心のどこかで思いつつも、体力にあ
る程度自信があったからこそ、ここで
もいいかなあ、という選択だった。

嫌だったのは、陣痛に苦しんでいる
最中、医師が夜勤の看護学生に対し、
「なんでもっと早く呼ばないのか」と
怒鳴りつけ、ずっと怒ったまま、指示
を繰り返していたことだ。寒い分娩室
で、狭い分娩台に縛り付けられ、それ
だけでも不快なのに、あのギスギスし
た雰囲気。週に二回しかないという
助産婦が立ち会った昼間の出産の二度
目のお産のときも、「呼吸法」と称し
て、陣痛に合わせて、思いつき空気
を肺に入れ、何十秒間もいきませられ
た。三、四回くらいなら我慢できるが、
十回を越えると、もう数を数えている
のも嫌になる。「もっと上手にいきめ
ないの?」と冷たい声でその助産婦に
言われ、しまいに馬乗りになって、腹
部を押されての出産だった。事前に
「できれば切らないでほしい」とお願
いしていたが、推移を眺めていた医師

はすぐにはさみを取り出し、「こんな
に(子どもの頭が)大きいんじゃない
しょうがないなあ」と言い訳しながら、
ざくつとはさみを入れた。私の頭の中
にあったのは(ああ、私のいきみ方が
下手だから、こんな目に合うのだ)と
いう自責の念ばかり。心理学という自
己肯定感が低い状態に陥っていたの
だ。産後もメスを入れられた痕が引き
つって痛かった。院内に産婦用にドー
ナツツ型のクッションがいたるところ
に置かれていたし、カニ歩きをしてい
る産婦の姿も珍しくなかった。

ただし、そういう体験も、無事に
生まれた子どもの姿を見ると、喜びで
吹き飛んでしまうのだ。引き続きやっ
てくる待ったなしの育児。おっぱいに
おむつ替えに、夜通しの看護体験なん
て、ふつうはないまま、母親になるの
だから、多少お産でイヤなことがあつ
たとしても、忘れてしまうというのが
正直なところだろう。しかし、私はそ
の後、仕事の関係で、いわゆる自然分
娩にこだわる病院の医師や助産婦とそ

こに来ていた産婦たちの出産に立ち会
わせてもらった。そのとき、私の中で
ガラガラと音を立てて何かが崩れてい
った。

ある助産院で見た家庭ぶろでのお産
は、お湯の中から赤ん坊がふわふわと
浮かび上がってきて神秘的だったし、
自然分娩にこだわる奈良県内の産院で
見た双子のお産では、普通の分娩台と
はいえ、ゆったりと幅のある台で「座
産」に近く、産婦の足元だけに照明が
あたるようになっていて、周囲は心地
よい暗闇という演出だった。穏やかに
産婦を励ます男性医師の声が静かに響
き渡り、八分ほど時間を置いて生まれ
た双子たちはどちらもすぐに母親の胸
元に持っていかれた。何よりも、どち
らの女性も、まったくの他人で立ち会
った私に対し、産んですぐなのに、
「楽しいお産だったわ」と顔を輝かせ
ていた。私のお産のときの経験では、
そんな余裕はなかったはずだ。打ちひ
しがれた、惨めな思い出でしかないの
だから。そして心底うらやましくなっ

てしまった。

多分、お産の喜びは、子どもを持つ喜びと混同されてきたのだと思う。お産自体の満足度などかえりみずに、無事な子さえ生まれれば結果オーライという考え方だ。初産のとき、あふれるように母乳を出していた私の姿を見て、夫の母が「あんたは運がいいわ」と言い放ったが、動物としては乳類に属している人間の母乳率がなぜ落ちたか、「運」のせいにされてはたまらないと思う。貧しい時代にももちろん母乳の出が悪くて泣いた女性はいた。でも、今ほどではなかったはずだ。生後半年まで母乳をやることのできる女性は三割もいない。働く女性が増えたせいではない。高度成長期を境に、ミルクで育てることが近代的な育児法と宣伝され、生まれたばかりの子どもを新生児室に隔離する、そんな方法が庶民に広がったのが真の原因なのだから。

どんな状態で、子どもを迎えたいと願うか。ことは母乳や乳汁などの矮小

化した話ではない。お産は忍耐さえあればどうにか切り抜けられる、というのではあまりに悲しすぎる。この科学の発達した時代に、なぜそれに逆行するような「自然分娩」を望む女性が増えているのか。彼女たちの話を聞いた



り、本を読んだりすると、「病院で産むなんて、かえって怖い」「医者やりたい放題」という批判の声に満ちあふれていることに気づくだろう。私自身は、それも極端すぎるあ、と思ってしまうほうだが……。

そんな中で、「お産のときだけ自然に、と願っても、それは無理だわ」とささやく女性がいた。いわゆるふつうのお産を体験した後で、地球物理学の研究者から医学部で学び直し、産科医に転身した大野明子さんという女性だ。彼女の周囲の人から研修医だったとき、「あんたは助産婦と同じだから、あっちへ行っておれ」と病院責任者に怒鳴りつけられた経験もある、と聞いていた。

ふつうのお産って何なんだろう。そんな疑問から出発し、医師免許を取ってからはいくつかの病院で働きながら、細々と自宅出産を専門に診ていた。そんな彼女が、半年後、東京・杉並に「お産の家・明日香医院」をオープンさせると聞いて、私は、尿検査で妊娠と判明した途端、予約の電話を入れていた。その時点では、最終的な選択権は自分にあると思っていたが、完全予約制で、一回の健診に三十分近くかけて、心配なこと、気になること、すべての疑問にこたえようとする丁寧な診

察にすっかりファンになってしまった。

お産の費用は大病院の個室並みに高いし、健診も一回七千円と決して安くはない。でも、分娩台がない代わりに、木の香りに満ちあふれたお産の部屋で、天井から差し込む日の光を眺めながら、隣の浴室、産婦専用のトイレなど、どこでどう産んでも介助してもらえない。その安心感と居心地のよさは、ふつうの産院にはないものだ。何より大野さん自身が同医院の二階に住んでいるのも心強かったし、「年間百二十件くらいのお産が、私自身の限界だと思っているわ」とあらかじめ採算をはじくときに拡大路線を取っていないことも気に入った。

一人一人の産婦の顔も一致しないようなお産は、どうしても流れ作業になりがちだとわかっていたから、かえって安心だった。

長いようで短い妊娠期間中、ただ一つ、気を付けるように口を酸っぱくして言われたのが体重管理だった。もと

もと太り気味の私は、三か月時点で「体重キープ」と母子手帳に赤ペンで書かれてしまった。つわりはほとんど感じないのに、血糖値が下がると、途端に気持ち悪くなり、頭がふらふらする。間食でどうにか心と体のバランスを取っていた私にとっては一大事だった。食べ過ぎてもよい海藻類や芋類を、食卓に多く登場させ、一日三時間の歩行という宿題も、どうにか少しずつこなすようにしていた。夫も協力的だった。一緒に、毎朝のように早起きをして、近くの海岸まで往復四キロ近い川沿いの道を散歩したりもした。「お散歩中毒」と化すまでさほど時間はかからなかった。

大野さんは、ふつうのお産をおかしくした原因の一つに、妊婦の生活環境の変化があると考えていた。妊娠をしたら大事に、というのは誤解という。肥満は産道を狭くし、いざというときの体力低下にもつながる。妊娠は病気ではないのだから、適度にどこるか、ふだんでできない基礎体力づくりにも励

むべきというのだ。その言葉通りに実行してみたなら、結局、臨月まで妊娠前の体重からわずか二キロ増でとどめることができ、「本当におめでたなの？」と初対面の人からは驚かれるケースさえあって、ちよっぴりうれしかった。

二女が生まれたのは、上の子が通う小学校で、PTA行事に参加した土曜の午後だった。行事に飽きてしまった下の子を連れて、翌週に予定されていた校庭の清掃作業の少しでも手伝いになればと草むしりをしていたその日の午後には、もう生まれていたのだから自分でもあきれ返る。夫も長男も長女も、家族四人で一緒に産院に行き、到着してから陣痛がつき、わずか二時間で生まれるというスピード出産だった。陣痛をつけるための乳房マッサージの最中、本当は休診日の土曜の午後には悪いなあと思っている気持ちをこちらが言うのと、「平日だと人の出入りも激しいからかえってよかったわよ」と助産婦さんは答えてくれた。この人の手の感触は温かくて気持ちいいなあ、



と思った途端、分娩監視装置の針が順調に振り切れ、何かで下着が濡れた。検査紙で調べると、明らかな破水という。

（まずい！ 私って、痛みに弱い人だった）という思いが頭をよぎった瞬間、次の強烈な陣痛がやってきた。四つんばいになって必死でこらえ、痛みがひくと、大きなビーズクッションに顔を押しつけ、ぐったり寝そべって脱力した。着ていたカットソーはもう汗でぐっしよりだ。好奇心いっぱいの五歳の娘は「どのくらい痛いの？」と顔をのぞきこんでくる。いつもだったら、「このくらいよ」と手のひらを広げてみせるのだが、とてもそんな余裕はない。「いま、そういう質問はしないほうがいいんじゃないかなあ」と助産婦さんは笑いながらたしなめていた。

夫に尾てい骨のあたりをさすってもらうと、血流がよくなるのか、少しは楽になる。備え付けられている家庭用ふろに入れば、全身の血流がよくなり、

もつと楽なお産ができるというイメージがあつたから、早く入りたいと願つた。「うん、用意できたからね」と助産婦さん。夫は「僕はいつ着替えてこようか」と自分のことばかり気にしている。足だけを浴槽に突っ込んで産婦の体を支える介助役なのだが、下着姿というわけにもいかなので半ズボンとTシャツを自分用に持ってきていたのだ。でも、正直言つて、私はそんな夫の態度にもイラついていた。

いざ浴槽に入ると、重力の作用が軽減されるためか、やっぱり楽だった。どのくらいたつただろうか。子どもたちは十メートルほど離れた居間で流行のカードゲームに夢中だし、ときどき顔をのぞかせるものの、不安そうな様子は無い。陣痛のたびに「いたーい。いたあーい」と大声で叫んでいるのに、大野さんは「そうだよね。痛いよね」とごく平静な口調でなだめるだけだ。気の小さい私だけが、「いま、子宮口どのくらい開いているの?」と聞いても、大野さんは「私たちは内診しない



で言い当てることを自分たちに課しているの」と禪問答のような答え。「なんか異常が起こっているんじゃない?」と聞くと、「うーん。異常が起こっているようには見えないなあ」とのんびりした答えだった。

結局自分で体の命じるままに動かしかないんだ、そう思つてから、ようやく夫に思い切りすがりつくようになった。何回いさんだかは覚えていない。体の奥から何かがつきあげてくるような感じがして、まもなく生まれるな、と思つたときには、案外冷静にそばにいた娘に「そろそろ赤ちゃん生まれるから、お兄ちゃん呼んできて」と言いつけていた。娘はダダダツと駆け出したと思うとすぐ返ってきて、「けいくん、いまいそがしいんだって」と叫んだので、みんなで大笑い。二、三分して、息子も心配になつたのか、風呂場に顔を出した。やっぱり大切な瞬間はわかるのだ、と思つた途端、焼け付くような痛さとともに、頭、そして胴体が續けてつると出た。痛みはうその

ように引けていた。お湯の中で、赤ん坊をそっと前から渡され、はじめて抱き上げた。みんなしんと静かに赤ん坊を見つめ、赤ん坊のほうもつぶらな瞳でじっと見つめ返していた。不思議とまったく泣き声らしい泣き声はたてなかつた。

息子は男の子を、娘は女の子の誕生を望んでいたのに、彼らの視線を感じた私は、「さっ、お楽しみね。どちらでしよう？」と赤ん坊の股間をのぞいた。「はい、女の子でしたあ」と報告すると、「ヤッター」と娘。「ちえー、ママ、もう一人産んでよ」と息子。夫は私の肩を抱きながら笑い泣きしていた。満ち足りた時間だった。風呂から上がって、へその緒を切るときも、子どもたちは浮足立ち、赤ん坊の頭を踏んづけそう。でも、生命の誕生に立ち会えた、あの経験は何物にも代え難いものだったと思う。私自身も縫合や抜糸が必要だった前回、前々回のお産とは違って、ほとんど無傷に近かった。尿がしみてはいけなないと、わずかに抜

糸の必要ない溶ける糸で縫合はしても良かったが、翌日には退院。助産婦さんがお産用の生理用品を渡し忘れるほど、順調な回復ぶりだった。

あれから一年九か月。二女はもう狭い家の中を走り回っている。私も仕事に復帰。この夏は、わずか三日間の休みを取るのもひと苦労だったため、半月も実家の祖父母宅で子どもたち三人が過ごすなど、変則的な生活は相変わらずだ。

でも、家族の歴史の中に、あんな日だまりのような一日があつたのだなあ、と思ひ出すだけでも、うれしい。心と体の調和のためにも、女性が産む喜びを真に感じ取れるような医療側のあり方、というのは、女性一人一人が働きかけなくてはなかなか変わっていかないのではないかと思う。病気になるたときはもちろん、そうなる前の健康な状態のときから、やはり医療とのつきあい方は考えておきたいものだと思う。

(え・カステラネンコ)

子どもたちはあなたとの出会いを待っています！

数学教育研究会は、1969年に設立された学習塾です。

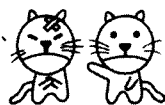
私たちは、設立以来「水道方式」と「量」の系統に基づいた算数・数学教育、科学的・体系的な国語・英語教育の研究を重ねてきました。

私たちの教材で子どもたちを教えてくださいませんか。

新しい先生の学習や教育の場を設けるとともに、相談の窓口も充実させ、安心して子どもたちを教えていただける体制を整えています。

数学教育研究会の教材で、ぜひ、子どもたちを教えてください。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています。



0120-420-531

数学教育研究会

数学顧問：鎌林浩(前数学教育協議会委員長・明治大学名誉教授)
国語顧問：鈴木康之(大東文化大学教授[言語学])
本部〒160-0022東京都新宿区新宿4-1-23-7F
<http://www.lekton.co.jp> toiawase@lekton.co.jp

倒産初体験

千葉県船橋市 祥 まゆ美

朝、いつものように出勤して仕事を始めようとしていたら、課長がパート全員を集め、おもむろに言った。「たいへん残念ですが、この会社は今朝不渡りを出して倒産しました。これで解散して下さい……」

一同、あぜんとして立ち尽くした。

給料の支払いや今後のことについて、誰も質問すらせず、もくもくと、私物を紙袋に詰めはじめた。

「ドラマでしか見たことなかったけど、倒産ってあるのね……」

私と同じころに入社したSさんがつぶやいた。

私はちょうど三か月前にパートとしてこの会社に勤め始めた。夫の自営業が不振で生活費にこまり、ようやくありついた仕事だった。

人見知りする気弱な性分の私は、新しい職場になじむのが苦手だ。特に人間関係は不安だった。しかし、先輩のパートさん方は、同じミスをくりかえすドジな

私を叱りもせず、そのたび根気よく指導してくれた。

ここでなら何とか勤めてゆけそうだ……安心していいのに、何という不運だ。

おおげさに言えば、国の経済の不振は個人の人生をも支配していると思いい知った。

しかしほんの数か月であったが、私にとって多くのことを学ばせてもらった。

仕事の内容は、販売店から注文された商品を倉庫からピックアップして値札付け後に梱包してゆく。伝票を見ながら毎日それをくり返す。在庫整理、管理補助なども、ベテランのパートさんはこなしている。そう複雑な作業ではないが、ミスのないように、商品をいためないように、神経は使う。

入ったばかりのころ、私はよくミスをした。箱に入れた後に、あて名と内容物を記入するのだが、店名を書きまちがえたとき、Aさんに少しきつい口調で注意された。するとベテランのBさんが、後でさりげなくとなり立って、ささやいた。

「ごめんね、私がさっき、書き方を言っておかなかつたから、やり直しにさせちゃって」

「いいえ、ちゃんと聴いてなくてすみません」

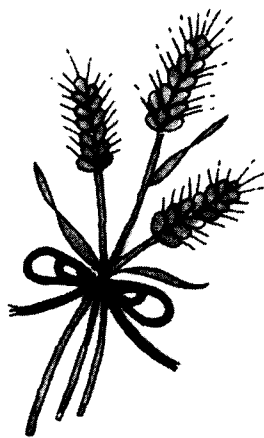
こんなこともあった。

私が商品を自分の判断で箱に入れていたら、となりで別の作業を終えたBさんが言った。

「あの、悪いけれど、やり直しさせてもらっていいかな……あのね、こうやって入れると、うまくおさまると思うわ」

テキパキと商品を入れ直す彼女の横で、私はプロはすごいナと感心して見ていた。同じミスを注意するにしても、叱りとばす人も多い。相手を傷つけない配慮をしつつ、きちんと教えてくれるBさんに感謝した。気の小さい私はどなりつけられたりしたら、こわくつてやめたくなるだろう。

私だけにではなく、彼女は職場の中で、思いやりある仕事をしているように見えた。かといって、えらそうな態度などまったくない。



気さくでざっくばらんな話し方、上司への自己主張も遠慮せずにする。倒産したことは無念なのだが、彼女に会えたこと、この仕事ができただけは私にとってラッキーな体験だった。

先日、破産管財人の弁護士や地方裁判所から、倒産に関連した書類が届いた。倒産が我が身に起こった現実だったことを、あらためて感じる。未払分給料は申請すれば、もらえる可能性があるようだ。倒産後に初めて召集された会社での説明会で弁護士の方から言われた。未払給料分はとりあえず国の立替制度によって年内に八割支払われるそうだ。その他の債務に関しては、会社の財産処分後、分配されるらしい。

まるで倒産した日に時が止まってしまったような事務所に集まった社員やパートさん達は、一様に暗くきびしい表情で聴いていた。集会が終了すると、パート仲間は集まって、たぶんもう二度と来ることはない会社を後にした。

別れがたい思いは、皆、同じようだった。ささい合ってコーヒショップに入り、雑談をしながら別れをおしんでいた。

「いい仕事は、その気さえあればみつかるわ」

互いにはげました。皆、災難にはあったが、得がたにご縁を得られたと思う。忘れられない思い出ができた。皆さん、ありがとう……。

「邪気」に当たらない法

東京都 田口恵子 (37歳)

私はめったに風邪をひかない。熱を出して寝込んだのなんて、長男がおなかにいるころだから、今から八年以上も前になる。ただ、三年前に消費者相談の仕事についてから、半年に一回くらいの割合で軽い風邪をひくようになってしまった。熱はでも微熱程度なのだが、喉をやられてしまうのである。この原因は、仕事を通して電話で遭遇する人々のマイナスパワーではないかと、うすうす思っている。

以前メーカーの消費者窓口にいたときによくあったのは、消費者キャンペーンに当たらないのをメーカーのせいにする人々である。飲料水に貼ってあるシールをあつめて送り、抽選で景品が当たる、というキャンペーンだが、実際倍率は数百倍である。当たらない人のほうが多いのが実状だ。

彼らは、こう文句を言う。

「いったい切手代いくら払ったと思うの。お金返してほしいわ」

「いろいろ出すけど、おたくのだけ、当たらない。」

本当に賞品送つとんのか」

捨てぜりふは、

「もうお宅の商品は買わないから」

相談員の私たちは、心の中で、

「あんなんかに買ってもらいたくないわ」

と何度つぶやいたことか。商品を買って、はがきを送るのは、自分の意志でしたこと。それで当たらなかったと言つて、他人のせいにするとは、常識を持った大人がやることとは考えにくい。当然彼らにはこんな理屈は通じないし、言えない。

ただ、あまりに同様の電話が多いので、私たちは、キャンペーン企画の部署に、

「これでは逆恨みで、ファンを失うことにもなりかねない。商品は多少粗末でも、当選確率をあげてほしい」

と何度も訴えたのであるけれど。

また、何の具体策もないまま、

「おまえの会社の製品はまずい。政策も悪い。だからライバル会社に負けてるんだ」

と延々と繰り返す人にも参つた。金品の要求、という目的のはつきりしているクレマーのほうが、よっぽど扱いやすかった。

現在は、とある行政機関で相談員として働いている。

先日は、先端企業で働いていると自称する年配の男が

らこんな電話があった。

話の趣旨は、

「公務員は無能であり、税金泥棒である」

ということ。それ以上でもそれ以下でもない内容を、汚い言葉で繰り返す。人のことを何度もバカだ、アホだと言う。

なんの具体的な提案もでてこないまま三十分が経とうとしたとき、彼は言った。

「おれが、なぜこんなにしつこく電話をしていると思うか。それはな、この電話のせいでおまえが落ち込むだろ。それで電話を切った後、おまえは屋上へ行つて飛び降りるわけよ。そうすれば公務員がひとり減つて、国のためになるからだよ」

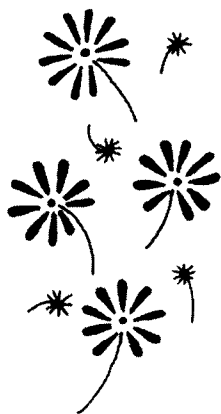
正確に言えば私は公務員ではなく、しがいないパートなのだけど、見知らぬ善良な（う）相談員に、よく「死ぬ」と言えるものだ。結局、その捨てぜりふで電話は切れたが、私もキレそうになったのは言うまでもない。もちろん、こんなくだらないヤツのために死ぬわけではないが、どつと疲れた。

世の中にはこういった何も生み出さないばかりか、人を傷つけるマイナスのパワーを持った人がある。民間企業であれ、行政であれ、電話をしてくる人々はお客様なのだから、私たちは絶対に同じ土俵で戦うことができない。彼らが卑怯なのは弱いとわかっているか

ら責めるその根性である。また、正義のためにやっている、自分は正しいんだ、と思いつ込んでいる点も救えない。犯罪容疑者の家族にいやがらせの電話をする人々なども同類なのだと思う。そして情けないことに、私の風邪は、マイナスパワーの蓄積によって生じているような気がするのだ。

そんなことを、東洋医学の治療をしている友達に話したところ、彼女はこう言った。

「東洋医学の世界では、そういうのを『邪気に当たる』っていうんだよ。病院の患者さんは、邪気に当たりすぎて、邪気を持っている人も多いから、どのようにそれに当たらないようにするかが、私たち治療者の技でもあるんだけどね。実際、言うはやすく、行なう



は難しだよ」

しかし、私は、こんな人たちに出会いながらも、人々の役に立っていると実感できる今の仕事が大好きなのだ。もちろんまともな方のほうが多いのだし。最近では、邪気に当たらない技をどうしても見つけ出したいと、日々、心身のトレーニング（ストレッチが喉にはいいらしい）に励んでいる。

でも、例の彼女が言うには、一番いい方法は、こんな素敵なことなんだそうだ。

「邪気に当たらないようにしたり、当たった者を回復させるには、邪気の少ない人の近くにるのが一番いいの。言うまでもなく、邪気が一番少ないのは、子供。子供だよ」

仕事を通して みえてきたもの

埼玉県新座市 藤岡 泉 (32歳)

この七月から、朝刊配達を始めました。しかしこの仕事もいつまで続けられるのか、少々わかりません。

私は、短大を新聞奨学金制度を利用して卒業しました。保育科を出ても一人暮らしの私には、就職先がな

く、そのまま新聞配達を続けていました。

二年もしないうち、主人と結婚し、第一子を出産しました。そのとき「子育てをしながら仕事もしたい。専業主婦でいたくない」と思っていました。なぜなら、子供を公園に遊ばせながらの主婦の会話は夫と子供中心で、視野の狭い世界にうんざりしていたからです。

それと私は、「正社員」で働いたことがなかったのでも、その憧れもありました。

二年後、第二子も出産し「子供二人産んだのだから働こう」と決意し、さっそく市のホームヘルパー三級の講習を受けました。以前から介護職につきたかったので、その第一歩を踏み出したのであります。

最初は、託児所付きの老人保健施設で、常勤で働いていましたが、事務長との折り合いが悪く、また福祉といえながら、金稼ぎの世界に化している、うんざりして一年で退職しました。常勤で働いてはいましたが、介護福祉士の資格がなかったので、正社員として賞与をもらうことができませんでした。正社員にこだわる理由は、賞与をどかっともらってみたいだけなのです。

次は、特別養護老人ホームに、パートとして働きました。パートにも十二月には賞与を出すという条件だったにもかかわらず、その十二月には無視され、契約違反がガマンできず辞めてしまいました。

ちようどそのころ、保険外交員の誘いがあり、違っ

たことに挑戦しようと思えました。しかし、景気低下のためなかなか成績が上がらず、それでも二年は続けました。

そんな中、長男が一年生になり、今までは保育園に任せっきりだったのが、学童にも入れず働いていました。そのせいか、私が留守の間、我が家が子供たちの



たまり場になっていることを担任の先生に注意され、自分の無責任さを痛感しました。ちょうどそのころ、第三子を妊娠し、保険の仕事も見切りをつけ退職しました。

私は、二十二歳で子供ができ結婚しました。二十代は若さをもてあましていたせいか、「子育てだけで終わりたくない」の思いだけでした。育児の合間に通信

教育で学び「資格を取って、在宅で仕事したい」と思っていました。今でもその気持ちは変わりません。しかし、講座は終了しても、資格までたどりつかないのがほとんどで、中途半端でした。

保育園時代は、子供を一日任せることができませんが、小学生になったら、学童に入れるなど、子供に対しての責任が必要ではないかと思えます。

今、夏休みで、いろいろな子供が遊びに来ています。一日中親が働いていて、フラフラしている子も目立ちます。あいさつのできない子供を見ると、親のしつけはどうなっているのかと、嘆きたくなります。

第三子を出産したことにより、家庭に入り子供を見つめる時間ができたような気がします。子供が帰ってくるころ、親がいて食事の仕度ができているついでなど、主婦の大切さをあらためて実感しました。

小学生のいる私にとって、午前中パートに出ても第三子の保育料にしかありません。今だから、落ち着いた考え方もできますが、以前だったら何も考えず仕事探しをしていたと思います。

そんな中、新聞配達に欠員が出ました。育児中の私にとつて、今一番あっている仕事ではないかと思っています。

しかし、今おなかの中に、第四子ができ、あと何か月働けるのかと思うと淋しい気がします。パートなの

で育児休暇もなく、欠員が出るまで働けないのです。こんなとき、在宅で仕事ができればと、今の目標にしています。

育児と仕事をするということは大変だけれど、子供を産んだ限り無責任なことではできません。生活に合った仕事をやっていければいいなと今思う私です。

養護教諭の 産休補助として

千葉県 山橋ゆり（53歳）

長女が四年、二女が二年生になった時、昔の免状を取り出して再就職した。三十四歳のときである。子供達は「わーい、私達も鍵っ子になれる！」と喜んだがそんなにいいもんじゃないとはすぐにわかったようだった。朝は七時半に慌ただしく四人揃って家を出、私の帰宅は早くて五時過ぎ。仕事をやり出せば仕事優先になる自分がわかっていたので、むしろなかなか決心がつかなかった。

新卒で入った大阪市内の中学校を四年半勤めた後、夫の転勤と長女の産産が重なり、退職して九年が経っていた。皆から「もったいないことしたわねー」とよ

く言われるが自分には向いていないと思っていたのであつさり辞めた。若くて欲がなかったとも言えるだろう。

次に働くとしたら別のことをしたいと思っていたが、声がかかったのを機に軽い気持ちでやり始めた。ブランクは長かったが経験があったので、抵抗なくわりとすぐなじめた。最初に行った小学校で任期を終えたとき、先生方や子供達から色紙や手紙を貰い、その中に「優しい笑顔が保健の先生にぴったりだと思いました」とあり、はなむけのお世辞だとは思ったが意外だった。また「注射のとき、先生がそばにいてくれたので僕痛くなかったよ、次の学校に行ってもやさしい先生でいて下さい」「ずっといてほしかったです」これも驚きだった。初任はいくら荒れた中学校だったからか、私自身が若かったからか。今ならさほど辛くなくやれるかも知れないと感じた。

それでももう十八年も経ってしまった。今では色紙や手紙が大量にある。何しろ二十校近い小中学校を渡り歩いているのだから。何年勤めても積み重ねにはならない空しさを、そういった声を励みに続けてこられたのかも知れない。

勤めている間はボーナスも年休もちゃんと貰える。給料は九歳下の人とほぼ同じ。だから、私の仕事上の年齢は〇歳ですう、と九歳若く言って笑いを取る。

養護教諭というのは学校で一人の職種である。一般の教員なら新米でも先輩教員がすぐ目の前でお手本を示してくれ、相談にもものつてくれる。担任を持たないさみしさや孤独感が若いときはたまらなく辛かった。気難しい校医さんも怖かった。

今では校医さんともすぐ世間話ができる。担任を持たない反面全校の子を見ている、成績でなくその子そのままを見るというよさがあり、子供達もそれを知っている。

それに気付いたのも年を重ねてきてのこと。中学校では部活の顧問だつて引き受け日曜出勤だつてして張り切ったこともある。しかしいくら頑張っても産補というのはいわば臨時雇い。長くて丸一年、最近では若い産補さんが正採用になって異動となった後に残りの期間を数か月ということもある。テーマを持ってその学校独自の研究や統計、掲示物などやれるとおもしろいのだが、余裕もないし前途もない。

始めて四、五年ほどは熱心に打ちこんだがやはり先のない空しさに気付いた。それからは割り切つて気楽にやり趣味などにも力を入れ、期限が切れて自宅待機の間には常にも楽しめるものを見つけて過ごした。

産補の難しさは前任(本採さん)のやり方を変えなないで、いかに自分の納得のいくやり方をするかということである。その中で最も楽しみなのは「保健だより」

の発行。校長名で出す検診検査のお知らせと違って保健行事の連絡の他に季節に合わせた健康の話題や保健室で交わした子供達との会話など、自分の裁量で書けるものである(もちろん管理職のチェックを受ける)毎月腕がなる?のである。



研修会で同業の講師が「私は何も書くことがないときは無理して発行しないですよ」といったときは、それって変なんちゃう? 毎月の発行がとぎれるなんておかしい、あちこちからネタを捜すのよ、と言いたかったが、もちろん黙っていた。書くことが好きでよかったです。

(え・小沢恵子)

子育てフォーラム

NMSのページ



子育てには 向き不向きがある

川崎市多摩区 鈴木貴子

……と私は思う。

ゆうくんママは食品の空き箱やパツクを使って上手に手製のおもちゃを作ったり、公園の空のゴミ箱にボールを入れるゲームを思いついたりと子供を遊ばせるのがとてもうまい。

子供を遊ばせるのに創意工夫できるお母さんはすごいと思う。私などは子供の相手をするのが苦手だ。また、ゆうくんママが声を荒げてヒステリック

に叱るのを見たことがない。またそれを必要としないほど、ゆうくんは情緒がとても安定している子だ。だだをこねたりわめいたりということがほとんどない。

それでいて活発に遊んだりもする。もちろんおもちゃを取ったり取られたりは三歳児だから当然あるが、ママがやさしく言い聞かせればたいてい素直に従う。また言い聞かせ方がとてもうまいのだ。公園でもゆうくんママは賢母、ゆうくんはよい子と言われている。うちの息子とゆうくんがまだ歩き始めたばかりの1歳のころ、ふたりとも歩くのが面白く公園の階段を何度もいつたりきたりしたがった時期があっ

た。私はそれに付き合うのにすぐうんざりしてしまい、息子がわめいても「もうおしまい」と言って無理やりやめさせたが、ゆうくんママは何度でもとことん子供に付き合っていた。その姿をみて私は頭が下がったものだった。

何よりもすごいのは彼女が子育てのぐちをいうのを聞いたことがない。もちろん彼女なりに悩みもストレスもあるのだろうが、三年間みていてそんなものをみじんも感じたことがないのだ。

通っていたリトミック教室で毎回ぐずって泣きわめいている子がいた。その声がひびいて先生の声が聞こえない

こともしばしばだった。あまりにひどいので、私は内心その子が辞めてくれないかとさえ思った。そんなに子供がいやがっているのに続ける意味があるのかと。しかしその子のお母さんは子供がどんなにぐずっても泣きわめいても、「どうしたの？ 大丈夫？」とずっとやさしく抱っこして語りかけていた。毎週一時間もそんなことをしていたのに一年間きっちり通い詰めていた。

子供は最後まで慣れることはなかった。多少、他のお母さん達に鑿鑿を買った部分はあると思う。彼女が一度も「叱る」ということをしなかったからだ。もちろん叱ってもどうにもならなかったかもしれない。しかし私なら叱りつけたと思う。それは他人の目になるからだ。子供を甘やかしているように「自分が」他人に悪く思われるのがいやなので、「自分が」面倒だからいらいらしてという理由で。そのお母さんの行為自体は賛否両論だと思うが、他人の目を気にせずひたすら子供

に優しくできた彼女にはただ脱帽する。本当に子供のためになったかどうかは別として。

だいたい私は短気でキレやすい。人前ではなるべくヒステリックにならないように心がけてはいるのだが。それ



努力精進しようとしても土台無理があるのかもしれない。

ひたすら尊敬に値する母親とある意味「あっぱれな」母親と。そんな人たちをみていると子供のささいなことにいらだち、うんざりし、ビデオに守りをさせている自分の育児にとことん自信がなくなる。そんなことは甘えだと諸先輩方は言うかもしれない。しかし、私は声を大にして本当は言いたいのだ。「私は子育てに向いていない！」

そんなふうには落ち込むことは多いけど、適性がないからハイ辞めますというわけにもいかないのが母親業だ。自分の子供はかわいい、がんばろうという意思はある。

こんな私はだめな母なのだと思うたりしていても、前に進むしかないのだ。なにしろこの国では子供の出来不出来は母親の全責任なのだから、向いている向いてないのと言っている場合ではないのだ！

(え・海砂)

座談会 私も言いたい

きょうだいの序列



出席者 久保田君江 前原幸子

司会 田中喜美子 編集部 和田好子

田中 今日の「きょうだいの序列」というタイトル、私これが思いついたのは、自分が二女で、そこにはやっぱり言い知れぬ抑圧感、というほどじゃないけど、割り食っているというふうには自分は感じてるのよね。だけど長女は長女で自分のほうが割り食ってると思ってる。

生まれた順序によって親の扱いが違うと思っんですよね。それぞれ自分が損してるとか得してるとか思ってるところがありますね。

私は親にあまり不満はないんですけども、今回はそういうことから思いついたわけです。和田さんは一人っ子なので、あんまり序列ってものは感じなかった？

和田 一人っ子だったんだけど途中から事情があつてきょうだいができたんです。だから両方体験してるわけ。田中さんは二人でしょ、二女であると同時に末っ子でもあるわけですね。

田中 そうね。まあ、皆さん、いろいろな思いをしていらっしやると思っんですけど、まず、どこに生まれたかを話していただけませんか。

六人きょうだいの中で

久保田 六人きょうだいの六番目です。

男三人、女三人です。一番上の姉とはひとまわり離れています。私の上、つまり五番目とは六つ離れています。要するに、上五人は歳がくつついているということです。

実は私の母は後妻で、前妻の子どもが五人いまして、そういう中で私は育ったんです。今、あまりない境遇だと思っので……。

和田 戦前は案外、あつたかもしれないけれど、戦後は少ないでしょうね。

久保田 それで話しやすいかなと思って、参加しました。

田中 なるほど。

和田 戦後は、もう六人というのが珍しくなっているでしょ？

田中 お年はおいくつですか。

久保田 四十歳です。母が三十六歳のときの子です。

田中 前原さんは？



大事にされた弟

前原 四十四歳です。三歳違いの弟がいて二人きょうだいです。長女なので抑圧感と

いうのでしょうか……実家は新潟なんですけれど、田舎なので男大生という風潮がありまして、父と母はそうでもなかったのですが、やっぱり祖父は弟をとててもかわいがって。それは弟にとってはうつつうつついんですけれど、もうとつてもかわいがってかわいがって……それをまぢかで見てもかいいですから、常に劣等感を感じていました。

弟とは仲がよかったですけれど、男子というものに対して、負けたくないという気持ちが強くて、ここまできちやったかなみたいな……。

やっぱり気持ちの中で一番残っているのは、高校受験のときに、父は、どこでもいいから行って、地元で就職してすぐ結婚してほしいというような考えだったので、それに反発して東京へ出て来ました。

田中 なるほど。そう簡単にはいかないよ、私は好きなことをやるよというわけね。



久保田君江さん

えますけど、そこそこの高校に行つて近くにお嫁に行つてくれたらそれで充分というのが、そのころは嫌でした。

風土とか習慣というか、親にとつては当たり前のことだったんでしようけれど。

田中 きょうだいのいろんなケースがあるとしてもおもしろいんだけど、今日はお二人しかご出席がないから、(和田に向かって) 私たちのことも話す? そのほうがいいわね。

私はね、五歳離れた姉と二人きょうだいです。親に対しては差別されたとかどちらが大事にされたという思いは全然ないんだけど、うちの姉はすごい美人で何でもできる人でね、ピアノがうまくて今もピアノの先生してますけど、私は「みにくいあひるの子」という感じで。

五歳というのは大きな差でしょ、だから、ずっと姉のことをえらい人と思つてたわけ。別に仲悪くないですよ。だけど五歳離れてたら一緒に遊べないわけ。いつもみそつかすなの。おとなになつてもなんかその気分はありましたね。

で、やっぱりね、長女はいろいろ仕切るわけ。今でも仕切られてるの。でもそれが便利なこともあるんだけどね、ほんとのこと言うと。だからまあ得もしたり損もしたり、どっこいどっこいで中くらいかなという気がします。

一人っ子の特性

和田 一人っ子っていうのはね、もちろん、その人間の性格にもよるんだけど、大体自信があるわけよ。それは、誰にも頭を押さえられないし、親の愛情を独占してるわけだから。競争する相手もないし、なんでもほしいと言えばくれるっていう状態だから、ちつとも抑圧されたって感じがしないわけよ。それでえはつてる。

もうひとつは、あんまり有能にならない。やっぱり駄目ね、親がみな、やっちゃいから。

田中 それはあるだろうな。

和田 そういう性格を持つていたんですよ。そうしたら十歳のときに母が亡くなつて、父はそれよりずっと以前に、私がまだ

前原 常に父に反発していました。高校受験のときも、すべりじめの私立校を受けさせてもらえそうな経済状況ではなかったので、安心なところしか受けられなかったのですが、弟のときはすべりじめの私立校を受けさせてくれたというのを聞いてショックでした。

私は人生論の本が好きで、とくに依萌子さんの人生論が好きで中学時代から読んでたので、まわりの環境に反抗とか反発ばかりしてきました。今、親子関係はまあうまくいってますし、それも親の愛情かなと思



前原幸子さん

小さいときに母と別れて他の人と結婚していた、で私はそっちの家へ行くことになったんです。行ったら、きょうだいがいいたんです。私の上に女の子一人、下に女の子二人、男の子一人。にわかになきょうだいが出てきたんだけど、とにかく便利だったという感じね。

田中 何が？

和田 手近に友だちがいる。外へ出て行かなくてもいくらでもうちの中で遊べるっていうことにまず感動したっていうか。

田中 年は近かったの？

和田 下の子とは近かったけど、姉は六歳上でした。でもその姉がとてよくしてくれましたし、姉とは仲がよかったんだけど、他の連中は私が彼らをよく思っているほどには、私のことをあまりよく思っていないかったらしくて。

田中 あなたがいつも一番いいものをとっちゃうからでしょう。

和田 そう、母がね、着物なら着物を、四人の女の子だから四枚並べて「さあ、どれでも好きなのをお取り」って言ったら、私がいちばんいいのを取る。(笑)

田中 そりゃよく思われないな。

和田 あとでよく言われたけどね。そのときは自分は全嫉気がつかないで……。

田中 やっぱ一人っ子できたから。

和田 そういうときに平気なのはやっぱり一人っ子だから自信があって、あんまり驚かない。下の連中は私に圧迫されたって感じを持っていたかもしれない。

ですけどすぐ下の妹とはとても仲がよくて、一時、二人でいろいろ悪いことして歩いたり、映画や芝居やお能を見て歩いたり、いつもくっついていたことがあるのよ。姉

ともくっついていたことがあってね、きょうだいとはうまくいっていた。

でも一人っ子のだらしなさってというのはね、戦争中、大八車で買い出しに行ったり、リュックをしょって買い出しに行ったりするとき、すぐネを上げるのよ。姉はどこまでも頑張る。やっぱり長女は責任感が強いよ。一人っ子は責任感がない。誰かがやってくれるから。

田中 生活能力がなくなっちゃうのね。

和田 下町だったから友だちは大勢いたし、人のあいだにはいつて遊ぶのには慣れていたけどね。

だけどきょうだいの序列というのは、確かに昔はあったわね。

田中 絶対あった。前原さんがおっしゃったように、長男だけかわいがられたというのは、跡継ぎ意識の、この子は大事に育ててやらなきゃという、それでしようね。

前原 そうですね。父もやっぱり大勢のきょうだいの中の長男でしたから、大事に育てられたと聞いてます。

田中 でも食べ物の差別はなかったですよ？

前原 なかったですね。

田中 昔は食べ物から違つたみたいね。

では久保田さん、あなたの生い立ちのお話をしてくださいませか。

父の死をきつかけに

久保田 小学校四年のときに父が亡くなったんです。それまで私は自分が六人きょうだいの末っ子って信じてたんですけど、父の死の前後から、子ども心になんかおかしいな、私は一人っ子なのかなあと思うようになったんです。

というのは、祖母が、父の前妻と私の母を比較するんです。話の端々で、生き別れではなく死別だから、美化するということもあるでしょうし、前妻は頭がよくて何でもできるしつかり者の農家のお嫁さんだったんです。私の母は祖母から見れば、その人の足もとにも及ばないらしく、父が亡くなったところから、時々比較するようになってます。それでなんとなく気づいたんです。けれども「あなたはお兄さんたちとは本当のきょうだいではない」と、はっきり

言われたことはないんです、未だに。

和田 じゃあ、あなたは一人っ子なの？

久保田 そうです。母は私一人しか産まなかったんです。収入の多くない農家で五人の子どもを育てるのは大変だから、父もほんとうは私のことを欲しいと思つてなかつたようです。

東京都下の東大和市に住んでいたんですが、昭和三十年代後半から四十年代になるとサラリーマン家庭が多くなって、農家はクラスで何人か、きょうだいは多くて二人、だいたい二人、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に暮らしている友だちは少なかったような記憶があります。

和田 もう核家族化していたのですね。

久保田 そんな中で、「私は六人」って言うと「えっ」って言われましたね。

和田 あなたと一番上の方とはひとまわり違つということだから、相当、時代が違いますよね。

久保田 そのころ、一番上の姉は高卒で働いていました。父は頭が固いというのか、それに農家だったこともあるのでしょうか、女は中卒でいいなどとも言っていました。

男はやつぱり学力をつけないといけないと、男女で差がありました。

和田 そりゃさうだろうと思えますよ。やつぱり男大軍だったんです。だいたい明治時代、女も小学校に行きなさいと文部省が言つても、行く人が少なくて、大正に入つてやつと男女同数行くようになった。だから、そういう男女差別はあるわけだ。

でも序列もあつたでしょ？ 上のほうがえらいという。

久保田 そう、テレビひとつとっても、そうでした。当時、出始めのテレビ、六番組の私はいつも我慢。長男が主導権を握つて、自分の見たい番組を見ていました。二番目の姉は気が強く負けず嫌いで、強硬手段でチャンネルを変えようとしたり、よく兄と争っていました。

和田 言葉遣いにも序列はあつて、今は犬や猫にでも「あげる」って言葉を使うけど、昔は目下の者に対しては「やる」だった。

久保田 そうです、そうです、やるって言っていました。

和田 うちは子ども二人なんですけどね、長女に、あんたが親にものを与える時には

「あげる」という、親があんたにあげる時には「やる」という、あんたが弟に対しては「やる」という、弟があんたに対しては「あげる」というと教えたわけ。そしたら弟のほうが「じゃあ僕は誰にやるっていうの？」って聞くから「お前は猫にだけだ」って笑ったことがあるの。(笑)

だから昔は「やる」という言葉にしてもはつきり序列があつて……。

久保田 ありました、ありました。

和田 でも今はみんな「あげる」になつちやつた。

久保田 今は親も子どもにあげるって言いますね。

序列は親が作る

田中 前原さん、さつき、だいたいのお話は伺いましたが、具体的にこういう扱いをされたというようなこと、強烈におぼえてるようなことはありませんか。

前原 弟が小学校に上がる前くらいのことですが、遊びに行つて帰つて来ないと祖父が、あつちへ聞きに行き、こつちへ聞きに

行きしたり、名前を呼びながら探しまわつたりしていました。ちよつとおかしいんじゃないかと思うくらい心配してました。とにかく大事だから大事だからという感じでした。

和田 あなたのことは心配しなかつたの？

前原 私は祖父とはウマが合わなかつたん



ですが、一度、祖父と喧嘩した後、祖父から、名前をちゃん付けて呼ばれたことがあります。うちのほうでは名前前はほとんど呼び捨てなんですが、そのときだけ、一回だけ、ゆきちゃんだったか、ゆきこちゃんだったか、ちゃん付けで呼ばれました。祖父は私を慰めてくれようとしたんでしよう

ね。一回だけです。常に頭にあるのは弟で。**田中** いわゆる掌中の珠のように扱つたのね。お祖父様以外は、たとえばご両親はどうだったの？

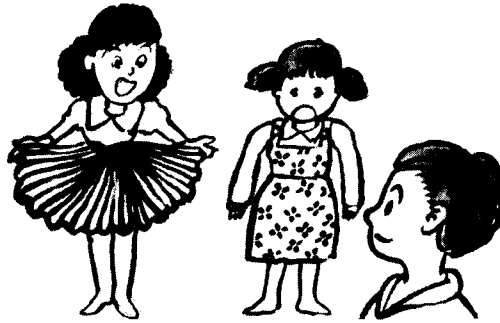
前原 うーん、そうですね、母はやつぱり弟をかわいがつていたと私は記憶しています。異性だからかもしれませぬ。

父は、私が長女だからつて、姉弟喧嘩すると必ず私を怒つて、すぐ手を上げるんです。頭にげんこつがとんでくる。愛情はあつたんでしようけど、喧嘩すると、すぐ「汝(な)が悪い」つて。私の田舎では、お前と言わないで汝(な)と言ふんです。

父が弟に対して手を上げたかどうかはわからないのですが、とにかく弟は期待をかけられて大事に育てられました。

田中 前原さんのお話を伺つてよくわかつたけど、結局きょうだいの序列つて親が作るのね。ただ上がいばつているとか、下が言うことを聞かないというのではなくて、家庭全体として親が作つていけるのね。

和田 家制度の中で、男の子がいると長男女の子ばかりだと一番上ということになるわけよね。



久保田 農家では親は一日中、外に出て働いているので、子育てはほとんど祖母がしていました。で、祖母に比較されましたね。一番上の姉はしっかり者、一番目の姉は絵が上手、それに対して私は、あなたには何があるの？ 何がとりえなのと言われたりしました。

でも二番目の姉は、「おばあちゃんはお前に一番甘い」と言っていました。冬休みになると、お正月を迎えるためにデパートに連れて行ってもらって、服を買ってもらえるんですが、一番目の姉は上の姉のお古を着せられるからです。

和田 やきもちをやくのね。

久保田 一番目の姉と兄からは「お前はずるい。自分たちはいつも同じ服を着ていた」と言われました。

でも私も新しい服を買ってもらえるのはめったにないことでした。きょうだいや親戚のお古をよく着ていたので、友だちから「いつも同じ服着てるね」と言われて、とてもショックでした。そのときほど、きょうだいが多いことを嘆いたことはありません。二人や三人のきょうだいの友だちが羨

ましかった。

田中 おとなって本当に無意識のうちに不公平なことをしてるのね。

和田 昔の人は、女の子の価値を質量で判断しているようなところがあって、それを露骨に言ったりしたのね。女の子が何人かいて質量が違うと大変らしい。成績も、きょうだいでだいたい同じだといけれど、ひとりできない子がいたりすると、ひねちゃったりして。

田中 私はあまりひねなかつた。母が、まあ大切してくれたというか、愛されたという思いがあるからですよ。

何がいいのか悪いのか

田中 いろんな人見てるとね、うまくいってる親子関係ってね、きょうだいのひとりひとりが自分が一番愛されたと思ってるの。

和田 そう思わせなきゃ駄目だよ。

田中 前原さんのお話伺って思ったけど、自分は大切にされなかつた、と反発するわけなんだけど、愛されて期待されてる

子どももとつても辛いところがあると思つたわよ。

だから何がいかわからないのよね。疎外されたことが、あとでよかつたつてこともありうるわけ。

和田 少なくとも、疎外される辛さがわかるつてことは、人間的に成長するつてことよ。

田中 それに対して、よしやつてやろうつていうのもね。

和田 それもいいことよ。

前原 そつかもしません。私はきょうだいが二人だし、長女ということで責任感が強かつたです。弟が長男とはいえ、自分が年上ですから。親に対して何かやつてあげたいという気持ちはすくありました。

母は自分がきょうだいが多くて苦労したので、二人しか産まなかつたと言つてましたが、私はもつとききょうだいがほしいとずつと思つていました。三人いれば責任も三分の一になると思つた時期もありました。

田中 長女の責任感つてどこから生まれるんだらう。

和田 やつぱり親から頼りにされるからじ

やない？

田中 でもお祖父さんは弟さんのほうを……。

和田 かわいがるということと、責任を持たすということとは、また違つたらう。

前原 常に「上だから」「上だから」と言われ続けましたから。今でも、親にはちょっと我慢してでも何かやつてあげたいという気持ちは自然なものとしてあります。

夫は三人兄弟の三男なので、そういうところが一切なくて、「何かやつてあげたら？」「うーん、そつか」みたいな感じで、こういうことに関しては私と嘸み合いません。

久保田 私の夫は九人兄弟の末っ子です。

一同 へーえ！

久保田 どうしてこの人を選んだかという、末っ子の辛さというか、同じ痛みを分かち合えるだらう、この人だったら私を不幸にしないでだらうと思つたからなんです。

子どもが九人もいるので、親から干渉されることなく、楽だつたと夫は言つています。高校を卒業すれば、その後は何をして

もいいということだつたさうです。夫はどうしても東京の神田に行きたくて、新潟から上京して、一切、仕送りは受けず、奨学金とアルバイトだけで神田にある大学を出ました。

和田 何人もいる子を公平に扱つというのは、親の立場からすれば難しいですよ。公平に扱つても嫌だと思つ子もいるし、不公平に扱われても平気な子もいるし。

平等にとつて思うのに

久保田 今、子どもは中一と小四ですが、同じことをしても一男なら許せるのに、長男は駄目という……理屈ではわかつているのですが、そんなふうに行っていることがよくあるんです。私だけでしょうか。

田中 いや、きつとみんなさうだと思つた。

久保田 下の子はいかから、いつまでも、こういうふうな（胸を抱くしぐさ）しておきたいのかも。自分も、おばあちゃんがつていたのと同じように、長男は長男、二男は二男という扱いをしているんです。平等というのがなかなか難しい。

和田 身分的に平等な今は却って難しい。身分でかたまつてれば、長男は長男でそういうものだと思ってるから、まだいいのよ。これは難しい問題ですね。

田中 理性では解決しにくいわね。

女の子には自立してほしい

前原 私は男の子二人と女の子二人いるんですけど、自分が差をつけて育てられたものから、自分の子には、男だから女だからと言わないように育ててきたつもりな



んです。

自分が女だから、勉強に関して援助してもらえなかったので、女の子にはちゃんと仕事を持って結婚しても続けなさいと望んでいます。

小学校三年と五年ですけど、結婚を夢のようなものと思っているから、「いや、そんなことないよ、ちゃんと仕事を持って一生働かなくちゃ駄目よ」って言ってるんです。

田中 お嬢さんたちは、なんて言ってます？

前原 まだわかってないようです。マンガやアニメの影響で結婚とかお嫁さんとかをすごく素敵なもののように思っています。

男の子には特にどうしなさいとは言っていないんです。好きなようにすればいい。私は責任を感じて生きてきたから、子どもたちには、責任とか言わないようにしたい。そんなものに縛られないで自由に生きてほしい。ただ、女の子には、まず仕事を持って働いてほしいと願っています。

(え・弘法堂謹)

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…
お友達・職場の仲間などなたでも結構です。
3、4人でも何人でも
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。



くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください

わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

サタジット・レイ小説集 ユニコーンを探して

サタジット・レイ著
内山眞理子訳

筑摩書房
定価 二、三三〇円＋税
一九九三年十一月出版



仙台市泉区 馬場紹美（30歳）

秋に入ると、眠りにつく前のほんのひととき、ナイトキャップがわりに本が読みたくなる。だが、死人がゴロゴロ出るサスペンスや血みどろのホラーは遠慮したい。できれば何か、いい夢を運んできてくれそうな物語を読みたい……。そんなとき、この『ユニコーンを探して——サタジット・レイ小説

集』はいかがだろうか。

サタジット・レイといえは、インドが産んだ大映画監督だ。「わいふ」会員の中にも、あの有名な『大地のうた』シリーズをはじめ、数多くの作品をこぼ覧になった方も多いと思う。

しかしながら私は、レイ監督がたくさんの物語やイラストまで描く多才な人であることを、この本に出会うまで知らなかった。そういったレイ監督についてのエピソードが、訳者の「あとがき」に中に数多く書かれていて、それはそれでなかなか興味深いものだった。

さて、この本には表題作を含め、レイ監督の遺作となった『見知らぬ人』の原作など、十編の物語が納められている。その内容は語り口がとてもやさしく、ファンタジー的でありながらも、人間の暗の部分にチラリと気付かされ

る鋭さもある。また、作品の舞台はインドとその周辺（一つは南米）となっ
ているせいだろうか、ページを捲るた
びにスーツとインドの匂いがあるよう
な気になるのだ。それは私がインドに
行ったことがあるからなのかもしれない
いが、決してそれだけではないように
思う。

インドでは時々、俄かには信じ難い
ようなことが起きる。涙が出るほどい
い人に出会うこともある。逆に首を締
めたくなるようなイヤな奴と出会うこ
とだってある。インドでは私達がいつ
も、オブラートに包んでいた感情のす
べてが剥き出しとなって旅人を襲って
くる。この小説集にはそんなインドが
ぎっしり詰まっている。さあ、さあ、
たとえインドを召し上げられ。

（え・筆者）

家族の スケッチ

方向転換

東京都八王子市 浅川涼子

私が何を話しかけても夫からの返事がない状態がずっと続いている。そのことにもう慣れてしまつて、心が波立たないという嘘になるが、心に「ストップ」と言い聞かせていた。

ところが、ここまでやられてしまつたとストップウオッチを押しても、私の感情があふれでてしまった事件（？）が起こつた。

五月の中ごろ、その日は蒸し暑い日だった。所用のため外出していた私は、帰宅を急いでいた。夫より先に家に帰つていたからだ。夕方の六時ごろ、満員電車は人いきれでむんむんしていた。

やつこのことで吊り革につかまれた私は、重い荷物を抱えながら細かい字の本を読みはじめた。十分くらいたつたろうか、汗がたらりと額から流れだ

した。

——ああ、気持ち悪い。本なんか読まなければよかつた。

と後悔したけれど、もうどうにもならない。冷や汗があとからあとから噴きだしてくる。あいにく私の前の座席に座っている人は、降りていかない。皮肉なことにその人の両隣ばかりが立ちあがる。

——あと一駅で乗り換え駅だ。がんばれ。

と自分で励ましていたけれど、視界がぼやけてきたところで意識を失つたらしい。

気がついたらうずくまっていた。そして、

「だいじょうぶですか」

と差し出された手と見下ろしている人たちの目に気がついた。一瞬、何が起こつたのか分からなかつた。どなたかの腕に支えられて、私はよろけながら立ちあがつた。

すみません、すみません、を連発して、乗り換え駅で降りた。五、六歩歩

いたところでまたしても目の前が揺らぎだした。

気がついたら私はホームに倒れている。抱き起こしてくれたのは中年の女性の。

「何か飲物を飲んだほうがいいですね」

と、ジュースを買ってきてくれた若い女性。

「ここにしばらく座っていなさい」

と、新聞紙をしいてくれた男性、みんなとつても親切だった。

「必ず病院に行くのよ。すごい勢いでバタンと倒れたのよ」

と、自分のことのように心配してくれる女性。

駅長室で三十分くらい休んでいるうちに、気分が落ち着いてきた。多分貧血を起こしたのだろう。それにしても意識がなくなるのだからホームから転落したり、打ちどころが悪かったら救急車のお世話になるところだった。だんだんに恐くなってきて、寒けがしてきた。

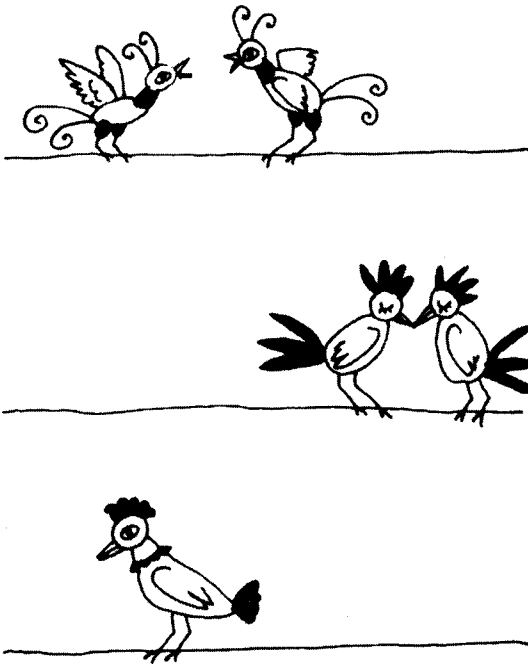
空いている電車を乗り継いで、やつとのことで家に帰り着くと、夫が不機嫌な顔で食堂の椅子に座っていた。とうに八時を過ぎていた。

「あの、留守電に入れておいたの聞

いてくれた？ 電車の中とホームで二回、倒れてしまったのよ」

私が話しはじめても表情ひとつ変えないで、テレビから目を離さなかった。

そして、ひとこともしゃべらなかつた。



気をつけろ、と叱責することもなかった。

私はそれ以上言葉を繋げるのをやめた。今度は体ではなく心が倒れそうだった。さみしさが全身を貫いていく。崩れ落ちていく私の心が見えるような気がした。

夫は自分が会社から疲れて帰ってきたのに私がいなくて気にいらぬ。勝手に出掛けたりするからだ、と怒っているのだろう。そういう夫の性格を熟知しているても、やはり恐怖心を分かかってほしかったし、だいじょうぶか、とのひとことが痛切にほしかった。

その事件(?)の顛末はいつまでも私の心にひっかかっている。それで、「目には目を、歯には歯を」ではないけれど、私も夫の話に返事をしないことをはじめた。

いつも律儀に返事を返していた私が無言なので、おやっという顔をして、くどくどと同じことを繰り返して言っていたけれど、このごろは慣れたようだ。

我が家の会話は一方通行だ。いったらいつたきり、かえってこない。

それでも伝達ができるので、日常生活に支障がないことが妙にもの哀しい。

でも、こんなことをしていて憂うつにならないはずがない。私は自分で掘った穴にはまって、かなりのうつ症状に陥っている。

「我が家は、ひえびえしているの、この夏は冷房なんていらぬわ」などというブラック・ユーモアも冴えない。

いっそ、完全に笑いの世界に方向転換してしまおうか。まるで話の通じないドタバタ劇を演じればいいのかから。

それとも、最大の願望、「離婚」を執行しようか。

それとも、また元のように律儀に返事をして、私だけでも正常な会話に戻していこうか。

それとも、以前にやったように、夫をおだてまくって、いい気持ちにさせ

ていこうか。

方向転換の道はたくさんあるのだけれど、すべて私が先に動かなければならないのだ。それがもう疲れはてている。もう自分から動くエネルギーが枯れてきている。

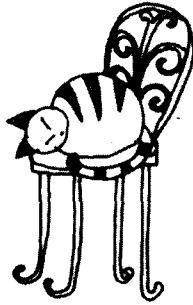
本当にこの夏、我が家は冬なみの湿度を保つかもしれない。でも、私の涙で湿度が増していくのだから、除湿機は必要なのだろうな。

家族連鎖

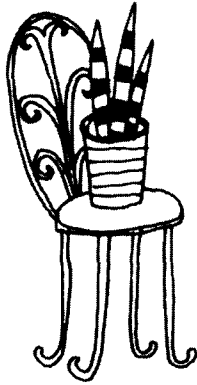
長野県小県郡 青木清美(40歳)

「口答えするな。おめえは親の言うことが聞けぬえのか」天プラ鍋を片づけている私の背に父がどなった。子どもこのころから感じている父への恐怖がよみがえり身を固くした。彼はますます逆上して、何も見えず、ただ相手を屈服させることだけを考えている。こゝうなる予感があった。私は腹を決め、

父を見切り二階へ行き、夫と息子にこのことを伝え、家へ帰る旨を告げた。それはお盆に実家へ帰省した際、起こった。始まりはささいなことである。用事をしている叔母の背に家から持ってきたぶどうを一箱差し出した。「いつもありがとう。これあがつて下さい。これ、これ」そう私が言った途端、父



が口を出した。「これ、これとは何だ。それがお前の礼儀か」「細かいことを言わないでよ」と私。そして父は切れどなった。その時、私の脳裏にフラッシュユバツクが起こった。そして父と祖父が重なった。「口答えするな」と祖父が父母によくどなっていたのを思い出した。



祖父母は力で家族を押しさえつけ、何から何まで細かく干渉した。逆らう父に「出て行け!」とどなりつけていた。実家は專業農家であったので、家を出ることは路頭に迷うことを意味する。祖父は父にとどめを刺し、コントロールしたのだろう。

祖父母の細かい干渉を嫌っていた父だったのに、子どもには、細かく世話を焼いた。食べ方から箸の持ち方、勉強と多岐にわたっていた。自分の思い通りに動かぬ子ども等に父は怒りを爆発させた。そして私達は萎縮し、あせり、ますますミスを犯した。そうなれば泥沼状態である。私は存在を否定され、消えてしまいたいような絶望感におそわれていた。

父さんはあんなに憎んでいた祖父と同じことをしている。弟も、父とよく似てきた。

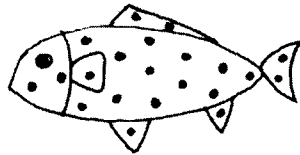
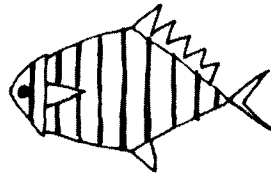
ここには自分も息子もダメになる。そう思い、いつ、来れなくなってもいいように、隠してあるヘソクリをカバンに入れた。

あれから……

埼玉県さいたま市 麦穂

息子は相変わらず必要最小限のことしか家では口にしない。しかし眉間の皺は前ほどではない。アルバイトは自転車で五分のスーパー、魚部門。本人から聞いた訳ではない。様子から察したのだ。私も何度か利用したことのあるそのスーパー名入りのパッケージで色々な物を持ち帰ってくる。「肉好き」の彼なのに魚系ばかりだ。そして夜な夜な台所に立つようになった。あとで冷蔵庫を開けるとアジだサンマだと魚達が綺麗に卸されている。そして「肉好き」の彼なのに毎日のように刺身や焼き魚を一人食べている。魚好きの私は羨ましい限りだ。家族の中唯一前と変わらぬコミュニケーションを取っている猫だけがいい思いをしているようだ。

息子の部屋へ洗濯物を置きに入っ



た。机の上のノートにふと目が止まる。学生時代歴史の勉強に使っていたノートの続きに魚の捌き方が図入りで記入してある。そして調理、試食の感想も。持ち帰ってくる魚はただの余り物ではなく彼の宿題だったようだ。

自信喪失の深い海底から私をすくい上げてくれたのはパソコン仲間だっ

た。年も職も考え方も様々なこの仲間達。今回はその中の大好きな女友達二人が引つ張り上げてくれた。落ち込みから一か月も経って自分なりに浮上しかかっただけだったが、彼女たちが「母親」とは違う目で見て言葉をかけてくれたお陰で、一気に心の元気を取り戻せた。息子に何があったのかは分からない

い。誰かの言葉のお陰なのか日葉が効いたのかわからない。とにかく一時より顔の表情も態度も少し穏やかになった。姿も前ほど隠していない。そしてアルバイト先からの頂き物を「これ喰っていいよ」とぶつきらぼうながらも分けてくれたりする。心から嬉しくしてお礼の言葉に弾みがつく。一瞬わざとらしくったかなと反省。

先日のテレビ、十代の討論番組で私にとつてタイムリーな話をしていたので見入ってしまった。そのときの男性ゲストが「思春期のころ、訳もなく親を毛嫌いするのは細胞的(?)働きで親離れさせようとしていると思える。だって本気で親を嫌ってる訳じゃないんだもん」……泣けた。そうかも知れないとは思いつつ、本気で息子に嫌われたと思いついていた私には、心から「そうなのか」と思わせてくれる言葉だったから。そして「それが不思議なものなんで、ある日パァッと霧が晴れるように何ともなくなるんだよね。だから十代の諸君大いに親とやり合っ

下さい」と続けてくれた。その言葉で息子もいつか昔のように楽しくおしゃべりしてくれる息子に戻ってくれると信じられた。

今は何も心配していない。根が真面目なことは分かっている。スロースターターだったりするが、きっと自分なりに色々考えていることと思う。この思いが伝わろうが伝わらなからうが、受け止めてくれようがくれなからうが、私は母としてずっと彼の風になり、優しく包み込んだり追い風になったりし続けるだけだ。今私の心を痛めているのは娘が再び、いや三度目の気胸(肺に穴が開く病気)を患ってしまったこと。比較的簡単な手術とはいえ、また全身麻酔だ、ドレーン(胸に管を通す)だと辛い思いをするのかと思うと、こちらほとんど辛いらしい。そして浪人中の彼女は、予備校に朝から夜遅くまで毎日通い詰めて頑張っていて、一つの授業も落としたりしないと風邪さえひかないよう気遣っていたのに、気遣っても避けられない気胸にまた苛まれ

るとは、手術の辛さもさることながら、数日勉強から離れることに焦りを感じて怯えている。

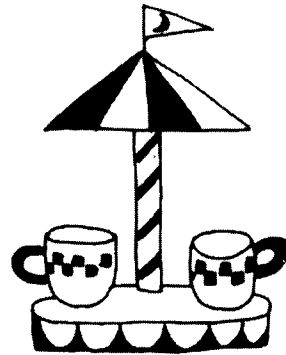
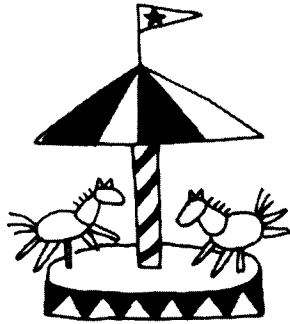
娘の気胸のお陰で私は楽しみにしていた旅行をキャンセル。一瞬がっかりしたがこんな状態の娘を置いて出かけても楽しめるわけがない。

今回つくづく思う、自分の楽しみなどままたまらないのが家族を持つということ。しかしこの人達から喜びや感動もいっぱいもらったのも確かだ。

私のおんちゃん

横浜市緑区 三田サキ(65歳)

あんちゃんは私達八人兄弟のうち、たった一人の異母兄である。父が若いときに離婚した先妻との息子である。母が鶴我家(私の旧姓)に嫁いだときこの兄は、よその家にあずけられていた。母が結婚して初めての子を身ごも



ってから「実は俺には息子が一人いる。今親類にあずけているが、うちにつれてくるからぜひ育ててくれないか」と言われた。

母はあまりの驚きに言葉が出なかった。そして二三日間は悩みに悩んでしまった。母の実家の両親は、このこ

とを知って、ものすごい剣幕で怒り「こんな話はなかった」と言い、すぐにも離婚させてうちに引き取ると言い出した。でも母は二三日間考えた末に「今私が離婚すればお腹にいる子供と、他家にあずけている子供の二人が路頭に迷うからあまりにもかわいそう

です。この子は我が子として、しっかりと育てていきます」と言った。こうして間もなく我が子も産まれ、母は一度に二人の母親として育児に専念した。このようにして育てられたのが私のあんなちゃんである。

母の手に来た二歳になったばかりの子どもは人みしりがひどくて、母以外の者には決して抱かれようとはしない、そして他の人が抱こうとすればすぐ元氣のない声で「いやーん」と泣いてしまう。もう一方、産まれたばかりの赤児もよく泣くので母は大忙しである。

右手に実の子、左手に義理の子供を一度に抱きかかえ、二つあるおっぱいを一つずつそれぞれの口にくませ泣き叫ぶ二人の赤児を、あやすのである。こうして二人の赤ちゃんは母の愛情をいっぱいにあびながら順調にすくすくと育っていった。

そして二年もの歳月が流れたころ母はまた身ごもった。そして二年後にまた身ごもった。こうして次々に子供が

産まれ、ついに私達の兄弟は八人という大家族になった。が、父に甲斐性がないので生活は苦しくなるばかりだった。しかもそんな中で父は急死してしまった。

このとき三人の兄達はもう社会人として働いていた。長男のあんちゃんははやばやと十四歳の若さで日本セメントに入社し一生懸命に働き続けた。

ちよっと頑固なところはあがあるが、優しいしすこぶる真面目で働き者だった。まさに鶴我家をしょって立つ意気込みだった。会社を休むことなくよく働くので上司にみとめられ、職場長が自分の娘を兄の嫁にさせたくなくなった。そして第三者を間に入れて結婚話を進めていった。兄二十六歳のときだ。目出度く結婚へとゴールインした。

私達他の兄弟には解らなかつたが、兄は母との間が義理である故に、精神的に切ない思いや苦勞は、あつたと思う。だが結婚した相手も兄の立場と同じ、やはり先妻の娘で義理のお母さんに仕えていた人だったので、同じ境遇

同士で意気投合、お互いに理解し合うことができた。だからとても幸せな家庭を築くことができた。二人の子供に恵まれ充実した家庭生活を営んでいた。

兄は四十六年間の会社一筋に働き続けて、十一年前に目出度く定年退職の日を迎えた。何の道楽もなかつた兄だったが、退職後はのびのびと過ごしたくカラオケに凝つた。退職金を当てて購入したという、カラオケ用のテレビだけで百二十万（畳一帖の大きさ）、それにスピーカーが四十万円もかけたという。建物には防音装置完璧だという熱の入れようである。

夫婦揃つて歌が好きなので、今では近所の人達が毎日のように夜集まりカラオケ大会を催している。「人が集まるからお菓子がたくさん要るのよ」とちよつぱりお人好しの兄嫁がふつともらしていた。

私のあんちゃんとお義姉さん、末永く幸せに過ごしてね。

(え・荒田ゆり子)

姉妹っていいな

東京都青梅市 福島みさを

私の妹の八千代は昭和十一年、私が女学校三年の秋、思いがけなく八人兄弟姉妹の末子として産まれた。四十歳過ぎてからの出産であつたので、母は恥ずかしがつて余所へは連れて行かなかつた。

私はそれまでいつも知らぬ間に、朝になつたら赤ちゃんが産まれていたという記憶しかなかつたが、末妹の出産のときは、離れたお勝手の土間でお手伝いさんが湯を沸かす傍で、貧血状態で女の務めの厳しさを初めて知つた。

産声を聞いた途端に、学校に行かなくては遅刻して登校した。

友達に、いつも精勤の私が遅刻したので、

「どうかしたの」と聞かれたが「妹が産まれたの」とは言えず「気持ち



5年前の春
左から文子（65歳）、八千代（60歳）、みさを（74歳）

悪かったの」と返事をした。

数日後、親友に、

「赤ちゃん産まれたのね、電車の窓からおむつが干してあるのが見えたよ、おめでとう」と言われ恥ずかしかったが嬉しかった。このときから堂々と妹のことを話せるようになった。

私は卒業して家に居るようになる

完全に「姉ちゃん母ちゃん」になっていた。お使いに行くときは勿論、父兄会の母親の代理もした。八千代が次女の智恵子の自転車に乗せてもらい落ちて、足を骨折したとき、少しよくなり登校するにあたり、ランドセルを背負

った彼女をおんぶして教室に行き授業が終わるまで待って、再びおんぶして帰宅した。それを続けるうちに皆と仲よくなり、先生不在のときに「肝油」を一人一人に配ったりした。

戦時中、学校で肝油、虫くだし等児童に飲ませていた。

私に縁談が来ると、妹達はわざと破談になるように騒いで親を困らせた。結婚式当日、八千代はお迎えの方々と婚家に向かう姉の私に「行っちゃ駄目、みさをさんの馬鹿」と大泣きして押入に入れられたと後になって聞いた。

時を経て私に子供が産まれると、小学校三年になった妹は夏休み中ずっとお泊まりして、近所の同じ年ごろのお友達と多摩川へ泳ぎに行ったり、ハンモックを押してお守をしてくれた。

長じて私立女子高校を卒業後、会社勤めの傍ら、個人の経理事務を何軒か受け持ち、お華は師範、お茶はお許しを戴きおひろめもして、一人でよくがんばった。

私も姑を九十九歳で見送り、数年後

には夫の看病に明け暮れていたもので、
 実の姉妹でも年に二回くらいしか私の
 家には来てもらえなかった。八千代は
 年末に正月用の盛花を届けてくれ、私
 はお節料理一式をお重に詰めて上げる
 のが精一杯だった。

それでも毎月第二日曜日には、三姉
 妹揃って先生のお宅へ伺い気学の講義
 を受け、その後奥様から心のこもった
 おもてなしを戴き、私達はこの上ない
 有り難い時間を持つことができた。そ
 の先生も三年前に亡くなられ、ご無沙
 汰になったので三人揃って会うことも
 なくなった。思えばよき時代であった。
 三番目の妹文子が癌を患っていた
 が、昨年暮れから進行が早くなり、入
 退院を繰り返した末、この八月八日終
 に帰らぬ人となってしまった。八千代
 は独身で定年退職して自由の身の上
 に、運転できることから流動物以外受
 け付けなくなっていた文子に、手作り
 のスープを持って三日と明けず、一時
 間かけて猛暑も厭わず見舞ってくれて
 いた。

それが急に目的がなくなり疲れが出
 て落ち込んでしまった。私は、

「今まであなたが文子さんを看てく
 れたけれど今度は私が八千代さんを元
 氣づける役目をします、家へ遊びに来
 てね」と電話をかけた。思いがけず三
 日目に「伺います」という声に私は大
 喜びで迎える準備をした。

私は姉妹でお茶を点でて楽しむのが
 夢だった。やっと実現できると大張り
 切り。早速朝から二時間かけて庭の草
 を取り掃き清めた。床の間には自分で
 書いた「掬湧水」の軸を掛け、箆には
 畑から切ってきた草花を活けた。炭を
 おこし釜を掛け、桑小卓に平建水を用
 意し待つことしばし、八千代さんがや
 ってきた。

一保堂の抹茶、司庵の和菓子で心行
 くばかり楽しいひとときを持つことが
 できた。これからもときどきやろうね、
 姉妹っていいものだなと今さらなが
 ら、癒しのもてなしに満足した。

(写真提供・筆者)

★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

- 265号 私の初体験
 - 269号 再就職で得た仕事・得られなかった仕事
 - 272号 カウンセリング体験
 - 273号 子どもとテレビ
 - 274号 引越騒動
 - 275号 料理と私
 - 277号 不妊治療・私の場合
 - 278号 「おけいご」との格闘
 - 279号 あなたの夫は何番目の男?
 - 281号 思い出の地・再訪
 - 283号 私の読書歴
 - 285号 美容と私
 - 286号 私の健康法
 - 288号 車と私
 - 289号 私の職業
 - 291号 忘れ得ぬ友
- シリーズ最後の巻出し
 お年寄りが安全に暮らすために
 一五〇〇円
 変わる主婦・変わらない主婦
 一五〇〇円
- お申し込みは ☎ 〇三三三六〇四七七一

私の意見

あなたの意見

新しい歴史教科書をめぐって

ナシヨナリズムか 国際協調か

岡山県 吉田淑子

歴史教科書が問題になっています。中国や韓国の激昂した人々のニュースが流れています。扶桑社の市販本「新しい歴史教科書」を読みました。

近世の終わりごろまでは、ほとんど問題なく読み進みました。

明治以降から最後までを読み終わって、

「あつ、これはいけない」と感じました。

徳川時代、三百諸侯の地方分権だった日本が、中央集権化していきます。ナシヨナリズムがはつきりみえてきます。それを次第に自分の国だけではなく、隣の中国や韓国にまで及ぼそうとしていきます。

私が小学生のころ、韓国人の同級生は姓を日本名に変えさせられました。その屈辱はどんなものだったでしょうか。一緒にすすんだ女学校の教室で終戦の放送を聞いたとき、彼女が「バンザイ、バンザイ。日本は負けた、日本は負けた」と両手を高く上げておりあがった姿を私はおぼえています。

「鼠は壁を忘れ、壁は鼠を忘れず」ということわざがあります。

噛ったねずみは忘れても、噛られた

かべは五十年以上前の痛さを忘れません。南京で三十万人であろうと三百人であろうと罪のない人を殺したことは確かです。

自虐的過ぎではないかという人がいます。外国にも奴隷制度があったではないかというかもしれません。でもそこには反省がありました。アメリカではストー夫人の『アンクルトムの小屋』を読んで南北戦争が起こり、民主化に目覚めました。

日本も敗戦という事実を生かして反省があるはずで、ナシヨナリズムの繰り返しがあつてはならないことを、戦争を体験した私たちは身にしみて知っています。この教科書には教育勅語の写しや解説、大東亜共栄圏などの言葉がでています。

教育はおそろしいものです。クラス生徒が一人残らず、進んで少年兵に志願してしまう状態を作ります。過去の反省もなく、事実を知らない戦後生まれの教師たちが、この教科書のニュースどおり日本民族は優秀だ、アジ

アのリーダーだと教えたら、子どもたちはそのままを信じます。そして世界中から相手にされなくなりませぬ。

特攻隊の遺書も載っていますが、これでさえ軍の意向に合わなければ書き直させたと聞きます。子どもたちにはいろいろな事実を並べて、自分たちで選ばせるべきです。自由な発想を抑えたり、自国中心であつたりしてはなりません。

権威に逆らえない地区もあるかにもえましたが、結局この教科書は九九パーセント、採択されませんでした。

中国、韓国からの反発も、少しずつおさまっています。これからも「日本は隣国と仲よくしたいのです。よろしくお願いします。ほんとにすみませんでした」という態度をずっと持ち続けたいと思うのです。

敗戦から 五十六年目の夏――

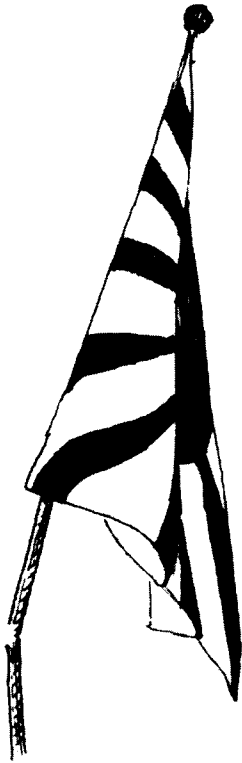
埼玉県坂戸市 佐藤信子（71歳）

今年、「つくる会」の新しい歴史教科書が日本の侵略や戦争を正当化する本だといわれ、国の内外で論議を呼んだ。結局パーセントにも満たない採択率ではつとしたが。

小学校から女学校まで、この時代を共に生きた私は不安でならなかつた：

手元に五十九年度復刻、戦時中六年生が使つた文部省の国定教科書、初等科国語・六、がある。まず最初が「明治神宮」で神格化された天皇が書かれている。水兵の母、姿なき入城、と続き、付録に日本国に献身して死んだ「北支那」の少年隊員の美談。

私たちは、こういう中味の教科書で勉強していたのだつた。敗戦後すぐ墨で塗られたのは資料を見ると三分の二



ぐらいだろうか。

女学生——やがて授業なし。学校工場で南方の兵士向けのテント縫製作業。棒グラフの先に日の丸印をつけ競争だった。十月三十日には必ず教育勅語を清書し、一途に聖戦を信じ皇国少女になっていった——。

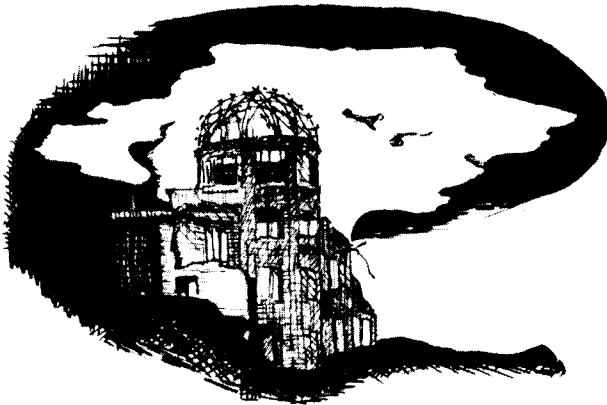
いま思う。日本の軍隊が銃を持ち中国やアジア諸国に行って、その国の人々を殺傷したのだ。これは侵略ではないだろうか。植民地から解放したなんていえない。差別されてきた側の痛みや苦しみを忘れたらいけない。

戦争は絶対いやだ。憲法九条の永世平和の考えを守り続けたいといった思いで、つくる会の歴史教科書を読んだ。あの時代に逆行りしたのかと、実はぎよつとした。

つくる会では事実を記すことを自虐的と捉え、過去を肯定しているようである。

教育勅語や天皇を大きく取り扱い、反面では東京裁判や憲法の記述に意図をのぞかせている。創氏改名など負の

部分はほかし、南京虐殺の記述は、こんなごまかしは納得できない。七三一部隊の活動も、あれもこれも加害をか



う。

いままで歴史認識と戦争責任をあいまいにしてきたから、首相が変わると国際社会の信頼を失いかねない言動をし、謝罪にならない姑息な詫びをくり返している。

日本は戦争の被害者であると同時に加害者でもあった。その過去の歴史を直視し、世界に通用する歴史認識を持つことが、私たちにいま、求められているのではないだろうか。

そして、平和と人権をだいじにする歴史教科書をこそ、作ってほしいと思っている。

従来の教科書のほうが おかしい

愛知県知立市 匿名 (49歳)

くし、全体に人權の記述が少ない。
また、戦時下、子供だった私の目からも、庶民の資料が不足していると思

私は、子供が中学生のときに、歴史教科書を読んで暗い気持ちになったことがあります。国家権力に虐げられる

民衆、といった図式ばかりが目立ち、国際関係では、日本がいかに悪いこと



をしたかが、相手国の視点から書かれていました。

「新しい歴史教科書」が、この歪みをかなり補正してでき上がったのは、

嬉しいです。私は、この教科書と「国民の歴史」(西尾幹二著)を読み、学生時代からどうしても興味の持てなかつた歴史を、初めて、面白いと感じることができました。人類や、日本人が、どうやってここまでたどり着いたのか、という物語が、面白くないはずがありません。文章は生き生きしているし、時代の流れや因果関係が明快に語られていて、納得できます。一部で言われているような、偏狭なナショナリズムというか、一方的な主張はなく、公平であろうとしているのは、一読してわかりました。

ところで、「わいふ」二九一号で、武藤さんが、「南京大虐殺」の本の写真にシヨックを受けた経験を書いておられました。「南京事件」や「従軍慰安婦の強制連行」については、「あつた」派と「なかつた」派とで言論界は二分されて、「朝まで生テレビ」でも激しく議論されました。「なかつた」派によれば、写真は、中国側の政治宣伝のための偽物(日本軍兵士とされて

いる人の軍服が中国軍のものである、など)だそうです。

国際政治の場においては、自国を有利にするためのウソやかけひきは、ありうることです。過去の事実を知らない我々が、自分の国の先人たちが、そのときどきに一所懸命にやってきたことを、相手方の言い分のみ信じ込んで、反省したり謝罪したりしてよいものなのでしょうか。ともあれ、こうした結論の出ていない問題については、「新しい教科書」では中立的な記述がなされています。これが、「歴史を歪曲した」などというのは、朝日新聞をはじめとする左翼系マスコミの「歪曲」だと思えませんが。

一国の歴史には光も影もあるのに、暗い部分ばかりを強調するこれまでの教科書は、明らかにおかしいと思います。外国のものとは比べてみてほしいものです。今回、「新しい歴史教科書」が、様々な圧力によってほとんど採択されなかつたのは、とても残念です。

(え・橋本美智子)



パソコンに挑戦

東京都台東区 高梨陽子（58歳）

五月下旬、IT講習会の初心者コースが自宅近くの中学校で実施されたので受講した。これは森前首相が推進したIT革命のひとつとして、各自治体が開催している講習会である。区の広

報紙上で公募があり、応募者が定員オーバーのため抽選になったという。ラッキーなことに一回の応募での参加である。

土曜日と日曜日、九時から四時までの二日間、お昼休みの一時間を除いた十二時間コースはちよつと厳しく、疲れを感じた。

ワープロの操作は、十年以上使用しているので慣れてはいるが、パソコンは初めての挑戦であり不安があった。同じようなキーボードでも機能に違いがあるため、ミスをしてしまうことが多かった。

この講習会はインターネットでホームページを見ることが、電子メールの送受信ができるようになることが目的であった。

だが、マウスに慣れるために、トレーニングゲームの「ソリティア」をしたが、参加者のほとんどの人がこのゲームに夢中になっていた。目を休めるための休憩時間のはずが、画面には「ソリティア」が出ている状態であった。講師

が目を休めるために遠くを見るようにと、再三再四おっしゃるが効果はなかった。

自宅のパソコンにもトランプゲームソフトが入っていたので、この講習会以来二か月過ぎたいまでもこのゲームにハマっている。「ソリティア」よりもレベルアップの「フリーセル」というゲームにもチャレンジ中である。三十分で終わるつもりが、アツという間に一時間が過ぎてしまっている。夢中になり過ぎて二時間も経っていることもあり、子どもたちがゲームに夢中になる気持ち、いまやつと分かったという心境である。

この講習会でホームページへのアクセスと電子メールの送受信は、一応マスターしたつもりであった。だが、ひとりの力でインターネットへの挑戦は大変な作業である。ひとつづつまずくと、どうしていいか分からなくなり、パニック状態になってしまう。六十歳に手の届く年代がパソコンを扱おうとする、身近にパソコンに詳しい人がいな

ければ、とでもできそうにないと実感した。

長男がパソコンを買い替えたのを機会に、これまで使用していたパソコンを私専用としてセッティングしてある。

電子メールアドレスを取って欲しいと、長男に頼んだ。すぐに取れたのでまず手始めに、姉とメールの交換をすることにした。

パソコンに不慣れなため、息子に何度も教わりながら、やっとメールが送信できたと思ったが、宛先人不明で戻ってきてしまった。アドレスを確認したが、入力ミスはなかったので再度送信した。だが、また戻ってきた。

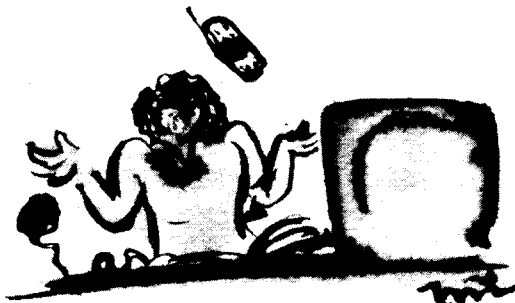
姉のところへ電話をしてアドレスの確認をすると、姉から教わったアドレスに間違いがあった。三度目に挑戦することに、息子に見てもらおうとしたが、さすが三度目になると機嫌も悪くなり「メールはやめて電話にすれば！」と言う。「これでダメならば、もう諦めるから」と言って頼み込んだ。

三度目の正直となり、やっと送ることができた。

この間に姉からのメールは二通とも順調に届いていた。私からの三度目のメールが届いたかを電話で確認すると、届いていないと言うのであった。そんなはずないと思っていたが、間もなく姉から電話があり、無事に届いていたので返信しておいたと言う。

すぐに受信の確認をしたが、届いていないのでまた電話をしてその旨を伝えた。どうしてスムーズにいかないのか不思議であった。息子の言うとおりに電話でやりとりしたほうが手っとり早いようである。

その後、一か月ほど経ってから姉のところにもメールを送ったが、返信がなかなか届かないので電話をした。折り返し電話があり、受信確認したが届いていないという。私のほうの送信メールアドレスを確認したがミスはなかった。姉とのメール交換はトラブル続きなので、「よっほど、相性が悪いんだわ」と言って、息子と笑ってしまった。



数日後、姉から電話がありメールが届いていたと言う。パソコンの操作に不慣れなため手違いがあり、受信の確認ができなかったらしい。姉からもメールを送ったと言うので確認すると、今度はスムーズに受信することができて、「メダタシ、メダタシ」となった。

姉は、離れて暮らしている娘に電話で教わりながらメールをしているとのこと。私と同じように子どもに叱られながら、呆れられながらパソコンに挑戦しているようである。

メールの交換は、友人や一人暮らしをしている次男ともしているが、こちらは順調に送受信ができています。わいふ編集部にもメールを送信して無事に届き、返信をいただいた。

『メル友』の輪を広げたいと思うが、残念ながら友人の中でパソコンを使える人が少ない。だが、数人の友人が、これからIT講習会を受講予定なので楽しみにしている。

わいふのホームページもアクセスし、開いて見ることができた。ホーム

ページへのアクセスについては、戸惑うことなくスムーズである。

現在使用中のワープロは、一年前に購入したのでまだしばらくは使用可能であるが、使用不能となるころには、ワープロが製造中止になっているかもしれない。それまでには、パソコンのワープロ機能を使いこなせるように頑張ろう。

そのためにも、パソコンと親しくお付き合いしていこうと思っている。

クラシック 演奏会に夢中

東京都世田谷区 山田恵子（50歳）

数年前からクラシック演奏会に足を運ぶようになった。

子どものころ、私は声楽家を目指していた。その果たせぬ夢を三人の子どもに託して、せめて一人は音大に、と思ひ、ピアノのレッスンは三人とも

力を入れていた。

一番可能性の高かった長女が高一のとき、ブーニンのピアノリサイタルに連れて行った。娘は大感激して、次の発表会ではそのときブーニンが弾いたベートーベンのピアノソナタ「悲愴」を弾いた。さらに翌年はピアノソナタ「月光」を弾いた。けれども次第に娘は進路に迷い始め、高三になる少し前「私はもう一生分のピアノを弾いた」と言ってさっさと辞めてしまった。

その後、長女より華があるといわれていた次女も、音が太くてたくましいといわれていた末の息子も、中三の受験勉強で辞めてそれっきりになった。

ひところピアノの奪い合いで三人が喧嘩になり、夜中まで弾けるようにとサイレント機能までつけた我が家のピアノは、もう何年も音を出していない。子ども達が音楽から遠ざかった後も、私は思い出したように演奏会に出かけていたが、次第に熱中度も増し、まもなくN響の会員になった。単発で気に入った演奏会もときどき聴きに行



く。お出かけは原則一人、年平均二十回。チケットは平均六、七千円で結構な金額だ。

あるときとても感激して家に帰って、夫に「すごくよかったよ。今度一緒に聴きに行かない？」と誘ってみた

ら、「うん、僕と二人で行くより君が二回行ったほうがいいだろう」というありがたいお言葉だった。

それ以来、高価なチケットも「前回夫は行ってないんだし、これは前回の夫の分」と考え、遠慮なく買っている。

それでも感激を分かち合える友がいないのは寂しい。一人で盛り上がって帰ってきて、夫はテレビで野球中継を見ていたりして、少し前までのあの熱い思いはシュルルルと音を立てて萎んでいく。年に一、二度は友達や娘を誘うが、感想やコメントを交換できる仲間を求める飢えは募るばかりだ。

N響の定期演奏会は、ポピュラーな曲が少ない。わけのわからない現代音楽も「お勉強」と考えじつと我慢で聴いている。会員は年輩者が比較的多く、私の隣の男性は必ずひと眠りしていきさをか。マナーの悪い人もいる。N響依託作品で世界初演という演奏のとき、一番盛り上がっているフィナーレでブルルル、とケイタイが鳴ったこともあった。

単発で選ぶ演奏会はピアノリサイタルと声楽のリサイタルが多い。私はテノールの市原多朗さんと同郷で、彼を育てた同じ先生に就いて十年間習っていたので、多朗さんのファンである。最近では外国に行っているのかお目にか

からない。つい最近聴いたヨッヘン・コヴァルスキーというカウンターテナーにも感激した。背徳の香り漂う怪しい容姿に美しいアルトの音域でアヴェマリアを歌う。そのコントラストに聴衆はみな陶醉して最後には会場全体が異様に興奮し、禁止されているフラッシュがバシバシたかれていた。私も立ち上がって手を振ってしまった。

ピアノストも弾き始めるまでいろいろな特徴があつておもしろい。ステージの端からピアノまで足早に進むが弾き始めるまで時間のかかるブーニン。歩みも弾き始めも哲学がかつているロシアのプレトニョフ。ドカドカと進んですぐにバンバンと弾くブロンフマン。この人は指が機械のようによく動き演奏が確実で、私は結構好きだ。人氣世界一といわれるキーシンも聴いた。アンコールが延々三十分五曲。感激して涙が流れた。

最近には武蔵野文化事業団のアルテの会にも入会した。ここは他の演奏会の半分ほどの値段で聴けるので、二万円

以下のオペラ公演も楽しめる。今年はずエルディイヤーで、この年末にはヴェルディオペラを見る予定である。演奏が始まろうとする瞬間、演奏者と客席の緊張が最高に高まり火花が散る。エキサイティングなひとときである。

IT講習会

佐分姫子（42歳）

日本中の自治体主催で、今年度は「IT講習会」が開かれていることと思う。昨今の通信技術の発展とパソコンの普及に伴う、政府主導の「初心者向けパソコン教室」のことである。

十二時間の講習で、パソコンの仕組みを知り、基本操作を練習し、文字入力とインターネットのホームページ閲覧、電子メールのやりとりなど、初歩的な部分を学ぶことになっている。受講費用は無料で、テキスト代の実費（千円程度）のみを負担すればよいと



ころがほとんど。三時間の講習を四日間とか、六時間を二日間というコースが、私の住む自治体でも何十と設けられている。

そのお知らせを広報で見たのは四月はじめの日曜日の朝の食卓であった。そして同じ新聞に折り込まれていたチラシの中に、「IT講習会の講師」という求人を見つけた。

「時給一五〇〇円から二〇〇〇円。平日四日コースや週末二日コースなど」それは大手の人材派遣会社の求人だ、明らかに自分の住む町のIT講習会の講師を募るものだった。

講師としての資格や年齢や、経歴などの条件は全く記載されていないかった。しばらく二枚のチラシを見比べていた私は、「これに応募してみようかな」と家族に相談した。「何にも条件書いてないのよ。でも初心者向けで、たぶん高齢者が多いだろうから、私のパソコン知識で大丈夫かもしれない。逆に私のようにパソコン歴が短いほうが、知識がありすぎる専門家よりも、

親切に教えられるかも。最初の苦勞の記憶がまだ鮮やかな私なら、きつと初心者に優しくできるはず」

あつかましくもこんなきつかけで、私は「サブインストラクター」の仕事を得た。

もちろん会社に赴き、自分の経歴やスキルを説明し、面接を受けた上で、正式に採用されたのだ。教員免許や英検の資格があるとはいえ、自己申告のみで、証明書を提出したわけではない。パソコン技能についてはもともと何の資格も持っていないので、面接でのやりとりで判断されただけ。職場でパソコンを使った経歴が短い私は「初心者」の気持ちになって、親切に丁寧に教えることができる」とアピールした。そのハツタリが効を奏したのである。

いえ、ハツタリではなく本当に私は、高齢でパソコンをはじめ勉強しようという方たちの、気持ちをよく理解できるのだ。好奇心と向学心が旺盛で、しかし今までパソコンに触れずに来てしまった人のプライドを傷つけずに、

講習の手伝いができると思った。

五月から月に一、二回、二日間コースの講習に派遣されている。受講者の大半は三十代以上の主婦か、退職後の年代の方で、予想通り、マウス操作やクリックにも苦勞している。またローマ字入力も、年配の方には一字一字が大変なことである。頭と耳と、手と目を駆使する十二時間。みなさんが最後には、疲勞の中に新しい知識を得た喜びをにじませた表情で家路につかれるのを見送る。

人に教えるということと、自分で使えるということは全然違うようだ。講習開始までに、あらためて私は必死で勉強した。以前には私の頭を素通りしていた用語や概念が、急に理解できるようになってきた。講習開始後も、予期せぬ疑問や誤操作に次々と出会う。その都度丁寧に説明し、自分の知識をフル動員した。四人のインストラクターで一チームなので、他の経験豊富な方たちにずいぶん助けられ、教えられている。

四か月たって季節は変わったが、はじめの新鮮な責任感は忘れていないつもり。毎回受講生の方たちだけでなく、講師どうしも初めて出会う。朝の初対面の瞬間から、協力して講習をすすめるのは、机上の知識だけでは決してできない仕事だと思う。キャリアや知識の量は、講師の資質とあまり関係ないようで、相手を思いやる常識や良識が大切なのである。

私は英語の教員免許を取得しながらも、学校の先生にはなる気がなかった。なっていたとしても、多分いい先生ではなかったろう。なぜなら自分の中高生時代、英語が好きで勉強にあまり苦勞を感じなかったから。しかし、パソコンの独習にはかなり苦勞したぶん、初心者のが持ちがよくなるような気がするのだ。

先生と呼ばれるほどのバカではないつもりだが、人にお教えすることの喜びを今は感じている。

二九一号の臼井さんのおっしゃるように、パソコンが使えても、人間どう

しの関係がなければ、本末転倒だ。私の家族は、パソコンを買ってから、共通の話題で会話が弾む。IT講習会でも、受講者どうしで自然と和気あいの楽しい雰囲気になるときは、とても習得がうまく進むようだ。

パソコンという機械の、自分に合った使い方が、誰にも見つかりますように。

星に願いを

東京都練馬区 井上暁子（42歳）

私がコーラスに再会したのは、今から六年前、長女の入園した幼稚園にお母さんコーラスがあったからだ。

小学生時代、私はかなり本格的にコーラスで歌っていた。それはとても楽しく、素晴らしい経験だったのだが、卒業するときやめなくてはならず、その後は中学に合唱部がなかったりして、コーラスとは離れてしまった。

でも歌うことはずっと好きで、高校では文化祭のステージで、ギターの男の子達と歌ったり（青春！）、音楽の授業で合唱するのも楽しかった。

だが大人になるとそういう機会もなく、ときどきカラオケに行ったりしても少しも満足できなかった。いつかはまたコーラスやりたいなあ、ときおり思うことはあったが、いつかはいつからと具体的に考えたことはなかった。

それが、娘が入園してみると、そこにどーんとコーラスが待っていたのだ。

やってみたい！ でもどんな感じかな。子どものころに高度なミサ曲なんぞも歌っていた私にはちよつとプライドもあり、お遊びモードのカラオケの延長だったら入るのやめよ、と見学に行ってみた。

練習場所である園のホールのドアをそつと開けると、うわー。歌っていたのは「落葉松」。同好の士はご存知です、小林秀雄が作曲した、かなり難

しい曲、しかも美しい声。ピアノの伴奏もとても素敵、さっそく仲間に入れていただきました。

歌い始めると、どうして私、こんなにこんなに大好きなことと二十年以上も離れていられたんだろう、と思った。でも、私の声ってこんなだった？ 違うよもつと高い音も出せだし、もつとのども開いて響いたはずだよ、という感じだった。当たり前だ。私の声の全盛期は十二歳の乙女のと看で、それからきちんと歌ったことはほとんどない、三十数歳のおばさんに、いきなり



きれいな声なんか出ない。それから二年くらいは、こんなはずじゃない、と自分の声を張り上げるだけで精一杯だったように思う。このコーラスの指導者のUさんとピアノのYさんは、かつて子どもがこの園に在園していた先輩のお母さんだ。私が入ったときは結成五年目で、昨年は近くで小さなホールを借り、十周年のコンサートを開いた。UさんとYさんは、この十年間、ほとんど欠席せず、しかもいつも皆がそろう前に来てくれる。幼稚園のコーラスだから赤

ちゃんのいる人も多く、私も最初の三年間は次女を連れて行った。だから、途中で小さい子たちが騒ぐこともあるし、子どもの体調で、欠席や遅刻をする人も多い。でもUさんもYさんも、いつも淡々と一番に来て、皆にそれを強要することもなく、にこにこ指導して下さる。この二人がいたから、このコーラスは十年続いてきて、そしてこれからも続けていけるのだろうなあと考える。

そして、昨年からは、もう一つ歌う場ができた。小学校のPTAのサークルにもコーラス部ができたのだ。

幼稚園のコーラスには、音大出身者や経験者がかかりいるのだが、学校のほうは、ほとんどが初心者だ。二声や三声に別れたときに、下のパートを歌える人が少ない。そこで、皆の中では経験の長い私は、一度も歌ったことのないメゾを歌うことになった。

子どものころからずっとソプラノを歌ってきた私には、これはとても勉強になる。音を取るのが難しいのはもち

ろんだが、ソプラノのメロディを支え、豊かにしていく楽しさを初めて知った。そして、ソプラノがメロディを上手に表現してくれないときのもどかしさも。私たちが『下積み之苦労』してあげてんだから、もつときれいに歌ってよ、なんてね。

指導者のKさんは、やはり在校生のお母さん。先日の練習のとき指揮の手を止めて、

「あのさ、みんなの日常生活のいろんなこと、子どものことや、ダンナのことや、やりくりのことや、そういうのをあっちへ置いてきて、何ていうのかなあ、もつと高いところを見て歌おうよ」と言った。Kさんはいつも練習のたびにこんなことを言うのだが、その日はその言葉が私の胸にすとんと落ちた。

Kさん、それはつまり、こころざし、ということですね。

そして、私がコーラスを始めたとき、最初の師である日先生がおっしゃったことを、突然思い出した。

私がコーラスを始めたのは二年生のときで、周りも皆、似た年ごろの子だった。私たちが、子どもらしく元気よく歌っていると、日先生はこうおっしゃったのだ。



「ふだんはそれでいいんだよ。でも合唱のときは、お星さまに届くような声で歌おうね」

お星さまに届くような声。お星さまに届くような声。

それが、カラオケとコーラスを分けるものなのかもしれない。UさんもY

さんもお星さまを見ているから、いつも一番に来て、私たちを引っ張ってくれるのだ。私はよい指導者に恵まれた。これからもずっと歌っていきたいし、混声か、オーケストラとの共演や、

ゴスペルコーラスにも挑戦したい。そして私の願いは、いくつになっても清潔な声で歌いたい、ということだ。

いつも、お星さまに向かって歌っていれば、大丈夫、きつと願いは叶うはずだ。

(え・佐藤瑞江子)

あなたへ

スマッシュ

この子とこの親

匿名

二九一号「家族のスケッチ」の『待てば……』の麦穂さん。私と長男のことを、代わりに書いてくれたのかと思った。

長男のRは、私たちの初めての子どもで、双方の祖父母にとっても初孫だ。赤ちゃんのときから、活発で好奇心旺盛、一家の話題と注目の中心だった。下に妹が生まれてからも、

祖父母にとってはRが一番だった。私は、男女の子育ての違い、個性の違いを楽しんだ。夫は楽しい父親で、キャンプだ、スキーだ、野球だと、休日も夜も、家族はいっしょによく遊んだ。

Rは中学であまり勉強しなかった。小学生のときはほとんど家庭学習をしなくても、やっていけたので、勉強の習慣がつかなくて、テレビゲームばかりしていた。祖父母はRに何でも買い与え、しかもRが優秀だと信じて疑わない。

中三の秋、Rは家族にほとんど口

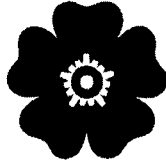
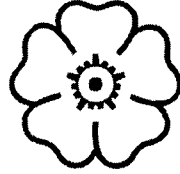
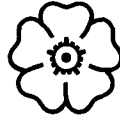
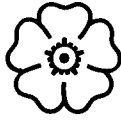
を利かなくなった。学校も休む日があつたが、級友が次々と訪れて、友達とは陽気にしゃべっていた。塾や友人に支えられるような形で、何とか高校に合格した。しかし私は、Rとその学校をいつまでも心の中で比べずにはいられない。

Rと同級生だった子の親と、顔を合わせても子どもとの話題は出さない。私も夫も、疑いもせず勉強して、それが苦痛ではなかったもので、Rの行動を理解するのが難しい。

「日曜日の大喧嘩」はまた、何て奇特な子どもだろうと思う。自分の意思で勉強に行き、手伝いもする息子に、何で怒鳴って「大きらい」と言えるのか。何てひどい親だろう。

後であやまったとはいえ、そんな親に何でこんな孝行息子が授かるのか。この親にも何か魅力があるのだろうか。私はこんなふうに感情をさげ出すことは少ない。

妹はここでも、家族をまとめてい



る。Rの妹も、何気なく家庭の安定に尽くしている。アダルトチルドレンにならないように、妹に依存しないように気をつけている。

私は、成績では親を困らせなかったが、結婚後はきつと心配させていると思う。Rはきつとふがいない親より先に、自立しつつあるのだと思う。何年かしたら、今日のことなどお互いに忘れていくのだろうか。

紫煙を避けて 席を移ります

千葉県松戸市 亀山和枝

咳がつくたちなので、二八八号の岩田さんの提起に大いにうなずくところだ。でも、どうだろう。私には実行はむずかしそうだ。

カウンターで食事をしていると思ってください。隣に客が座り、「たばこいい？」と言いつつ「灰皿ください」

「ももちろん「たばこいい？」は店の人と連れに対してで、反対隣の私にはなんの挨拶もない。なくていい。あつては困る(その理由は後に記す)」。その人が前方上45度に煙を吐き出していけば、まゝ我慢(店の換気にもよるけれど)。横向いてこちらに吐き出したら、店の人にうんと小さな声で「たばこの煙が苦手なの。席、あちらに移ってもいいかしら」と言つて移してもらおう。事実そんなことは何度もある。移れなければ大びらに手で煙を払う仕草をしても、その当事者にはなにも言わない。もし、隣席した他人に「吸っていいですか」と聞かれたら気分は最悪。私は「煙は苦手です」とは言えない。先方は自分が礼を尽くしたからには「どうぞ」とお墨付きをもらえると確信しているのだから。もしその客が喫煙を断られた不快感から店を出ていけば、営業妨害にもなりかねない。店が喫煙を認めているのだから。頼みは喫煙者の気遣いだが、連れを気遣

つて、反対側（つまり赤の他人の私）に煙を吐き出す人がほとんどだ。ああ、あ。だから、ひとりで食事すると四方八方から渦巻く煙に文字通りほうほうの体で店から逃げだすこともある。

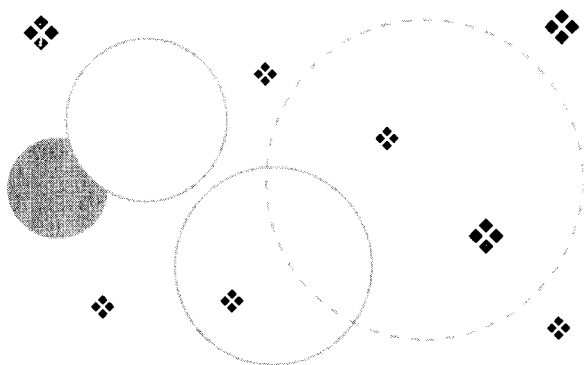
「そんな私でも友人のたばこは『どうぞ』と答える。なぜって、仲間には煙が行かないように気遣いしてくれるから、隣席の他人よりずっと安全だということもある。なによりも私はたばこの煙ごときで好きな人と一緒に食事をする楽しみを放棄したくはない。

ずいぶん禁煙が広がっても、気楽な飲食の場は喫煙フリーが一般的。シガーを置くレストランさえ増えているのが現状だ。禁煙、分煙もいけれど、要は煙の行方の問題。飲食店はせめて最新の焼き肉屋、シガーバー並の換気設備をしてほしいと思う。

また、バス停、タクシー乗り場な

ど屋外の気軽さで一服する人が多いが、二九一号の鈴木さんが指摘のようには避けようのない行列での喫煙はひらにご免被りたい。

（え・イシノフミ）



自費出版は「わいふ」へどうぞー！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近、読者からのご依頼により、『紅の雲』、『春のかたみ』、『出会いに合掌して』などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

FREE TALK

フリートーク

三鷹の文学散歩

千葉県船橋市 三枝きよみ（64歳）

私は三鷹という所が好きだ、好きだというよりも好きになったと言うべきか。近くの公民館で文学散歩へのさそいというって、広報に募集があった。全部で三回出席できる人、第一回は教室においての講義、二回目から外に出るの散歩となっていたので、その日すぐに申し込んだのであるが「もう定員になり締め切りました」と言う。講義だけでしたらどうぞと言われ出席することにした。

講師は男性で年配の人に見えたが、第一声が「皆さん人間の体は遺伝子は一〇パーセントで、あとの九〇パーセントは気です。自分の気を出して元気に過ごしましょう。それには目を施すことが大事です。一番よいのは旅をすることです。近くでも遠くでもよいの

です。目に刺激を与え心を動かすのがよいことだと思います」若々しい声で講義が始まったが、私も旅は好きなので話だけでもよかったと思い熱心に聞いた。そして、次の回には三鷹を散策することになりますのでその辺のことを少し話された。帰り際役員の方から、補欠にしておりますので当日行けるかも知れない、用意をしておいてと告げられた。その後電話で出席できることになり文学散歩となったのだ。

その日約三十名の出席者だったが、津田沼駅より三鷹の駅へ向かった。私は新宿までは何度か出かけているが、三鷹の駅へ降りるのは初めてだったので、前夜からうきうきしていた。空も晴れ歩くのには絶好の日和、南口に降りたときは目に映るものが新鮮に感じた。電柱を見ると下連雀となっていた。このあたりは、縄文時代からの大集落の跡があり湧水にも恵まれていたので、人が住み着いたらしい。戦国時代は小田原北条氏の支配、その後徳川家康の関東入府。徳川直轄地となり

明治二十二年市制、町村制施行の際に三鷹村となったと説明があった。

それはここに鷹場があったことに由来したといわれているようだ。そして



昭和十五年に三鷹町、戦後の二十五年に三鷹市となったとある。

最初に向かったのは井心亭（太宰治が住んでいた所）。昭和十四年の秋か

ら下連雀に住んだそうだ、旧居の門柱のサルスベリが咲いていたが、それは太宰が植えたもので、たった一つの生証人と説明書きが立ててあった。

私はあまり太宰治については知らない。「走れメロス」は子供のころ読んで心打たれたが、斜陽などはあまり子供のころで理解できなかった。

それから櫻並木を通り八幡大神社に向かった。杉の太木が立ち並び、その参道を行くと冷んやりとした風が汗ばんだ肌心地よかった。次は山本有三記念館に寄り説明を聞く。有三が住んでいた家というが、とてもモダンで広い洋館だった。帰り道、今度は瀬戸内晴美が下宿していた家というのも「あそこ二階です」と教えていただき、それから玉川上水に沿って散策し、太宰の入水場所もわかったが、そこにははつきりとは書いてなく、太宰の故郷である青森の石というのが置いてあるばかりであった。破滅の文学であると言われている太宰だが、読む人によって相当な魅力があったのだと思う。私

も、もう一度読んでみるかなと思っ
ている。三鷹は、明治から大正、昭和に
かけて文学者の住んでみたい場所だっ
たのだろうか。

駅に向かいながらいろいろ心をめぐ
らせ、幸福を感じていた。

生駒トンネル

奈良県生駒郡 高松恭子

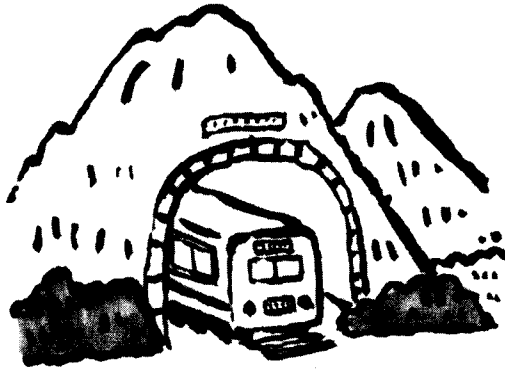
地方新聞の片隅に、「生駒トンネル
史話」という記事を見つけた。奈良と
大阪を結ぶこのトンネルは、奈良に生
まれ大阪で育ち、再び奈良で暮らして
いる私にとって馴染みの深い存在であ
る。幼いころから幾度このトンネルを
行き来したことだろう。

記事によると、生駒トンネルは、明
治四十四年の着工から四年の歳月を経
て開通、大阪側の日下と奈良側の谷田
を結ぶ三三八メートルの長さは、当
時としては日本一の規模であつたらし

い。完成直前に大崩落事故が起き、朝鮮人労働者やレンガ積みをしていた女性労働者も含めて、十九人が犠牲になっている。日下の寺の境内に招魂碑が建てられているという。

幼いころ、トンネルが苦手だった。暗闇と閉塞感がたまらなく怖かった。

私がたった一人でこのトンネルを通過する電車に乗るようになったのは、幼稚園に入った五歳のときである。万が一、衝突したときのことを考えてか、母は真ん中の車両に乗るよう言ったものだが、私はいつも一番前に乗った。そして運転席すぐ後ろのドアのガラスに顔をくつつけるように立ち、遙か彼方に小さく見えている出口をしっかりと見つめた。暗闇の中で白く見えるアーチ型の出口は希望の光のように感じられた。約五分、小さな点がだんだん大きくなり、外の光に吸い込まれるように電車はトンネルを出る。そのとき、ふーっと息を吐くような安堵感に包まれたことを昨日のように思い出す。駅の数にして三つ、僅か十分余りの乗車



時間がトンネルに入ることで途方もなく長く感じたものだった。

あれは通園にも慣れてきた夏のころだった。いつものようにトンネルを出てはっとしたとたん、すぐ止まるはずの孔舎衛坂を電車が通過した。私は全身の血が逆流したように感じた。間違っただけで急行に乗ってしまったのだ。次の石切は急行が止まり乗り換え可能だったにもかかわらず、おろおろする私を乗せたまま電車は十の駅を通り過ぎ大阪の鶴橋まで行ってしまった。予定時刻を過ぎても戻らない私に、母はどれほど心配したことだろう。

小学校に入ってから日常このトンネルを通ることはなくなった。母は、それだけで「はっとする」と言ったものだ。トンネルの向こうに行くことは、幼い私にも母にも心の負担を与えていたようだ。

台風で電車が不通になったときにトンネルを歩いて帰ってきたと父が話していたこともあった。さぞ不気味だったと思うが、距離にしたら四キロもな

いのだ。父も私のように一心に出口を見つめて歩いたにちがいない。

開通当時、生駒山の暗峠くらがしやう越えしかなかった大阪、奈良間を一時間足らずで結んだこのトンネルがもたらした経済効果は計り知れないものがあつただろう。やがてトンネルは昭和三十九年の新生駒トンネルの開通で閉鎖された。

廃坑のようになっていた旧トンネルは、昭和六十一年、近鉄東大阪線の開通で生駒側の入り口のみ再び利用されるようになったが、このときも大規模な落盤事故があつた。開通直後にはトンネル内車両火災事故で死者も出ていく。いつの時代も、トンネルには何があるかの犠牲がつきまとうものらしい。奈良に住むようになり、再び頻繁に生駒トンネルを行き来するようになった。新しいトンネルは、大阪側の出口がカーブしていて、幼いころ目を凝らして見つけていた出口は直前まで見えない。電車がカーブしたかと思うと突然明るい大きな出口がふつと目の前に現れる。大人になった今も、この瞬間

ほつとする。

今、あらゆることの閉塞感から抜け出せないでいるわが国にも、こんなときがくるのだろうか。トンネルを通るたびにそんなことを思う。

「好奇心」と「迷惑」 コトワケ

京都府宇治市 匿名 (40歳)

我が家の斜め前の家が今、建て替えをしている。我が家は建売でうちができる前からその家があつた。最初は老夫婦が住んでいていろいろつきあいがあつた。子供たちも可愛がつてもらっていた。しかし何年か前に息子さんの隣に家を建てて引越していった。その後売り家になり、しばらく誰も買わなかったが、ある日、若夫婦とはいえないくらい代の夫婦がきちんと挨拶に来た。

「前に引越してきたAです。よろ

しくお願いします」

クッキーかなにか持ってきて、感じがよかつた。悪い人じゃないという感じだった。

しかし表札は出たのだが、住んではいないようだ。昼間も見かけないし、夜も全く明かりがついていない。どうなっているんだろうと思つていたら、名前の表札の横にもう一つ会社名のような表札が出ていた。

「会社の倉庫にでも使っているんだろうか」と思っていると、そのうちに挨拶に来たのと全く別な年配のおばさんやおじさんが出入りするのを見かけるようになった。その二人でいろいろな荷物を運び込んだりし始め、たまにいろいろな気配がある。

「あの二人は何者だろう。ひよつとしたらまた別の人に売ったのかな」と思つたりもした。いつの間にか裏庭に蓋のしてある大きな壺がたくさん置いてある。

「化学薬品でも作っているのかな」

「まさか過激派のアジト？」

「謎だが別に迷惑ではないし、
「お宅は一体何屋ですか？」
と聞きに行くほどの度胸はない。

道一本隔てて町内も違うし、なにしろ滅多にいないのだからやや不気味に思いながら別にどうってことはなかった。

春先のことだ。チャイムで出ていくと、前に挨拶に来た奥さんと背広を着た中年の男性が立っていた。

「今度建て替えますので、いろいろご迷惑をかけると思いますが、よろしくお願いします」

奥さんがそう言いながら包みを渡した。

横の男性がいかにも作ったような営業用の微笑みと共に、

「仕事を担当しますB工務店のCです」

と名刺と、彼もまた無地のし付きの洗濯用洗剤一箱を渡した。

また奥さんは、

「工事が始まると迷惑がかかると思いますが何かあったらここまで連絡

して下さい」と言って連絡先の電話番号を書いたメモも渡した。

ここで普通の人なら「一体お宅は何屋なんですか。庭にある壺の中身は何ですか。よく見かける年配の女性や男性は誰ですか」
と聞けるのだろうか。

だめだよ。私は臆病でとてもそんなこと聞けやしない。

「どうもご丁寧に……モゴモゴモゴ……」

という言葉と共に疑問符のすべてを飲み込んでしまった。

奥さんからもらった包みの中は、二束の茶蕎麦だった。

いろいろわけのわからないことがたくさんあっても、正面から挨拶に来られると何も言えない。聞けない。

そのうち解体工事が始まった。きちんと防音の布で覆い全く非のうちどころがない工事だった。迷惑駐車をするわけがなく、近所に埃が飛ばないように水もきちんと撒く。あつという間に解体が終わわり基礎工事も済み、棟上げ

も終わった。細かい作業が始まったようだが、そこまで何の問題もトラブルもなかった。工事の騒音もお互い様だ

と思うし、昼間結構大きな音でラジオをかけながら作業していたが、工事の音に紛れて全く気にならなかった。

さてそれからしばらく経ったある夜のこと、真つ暗になった八時くらいに帰宅した旦那が、

「前の工事現場から声がしているぞ。誰かいるようだ」と言う。

工事の人は七時くらいに帰っているし全く誰もいないはずだ。現場はずつぱりと防音防塵シートで囲ってあって中は見えない。誰か中に入っているのだろうか。放火されたらどうしよう。怯えながら外に出て様子を見ると、なあんだ。工事のおじさんがラジオを切るのを忘れて帰っていたのだ。やけにのうてんきなDJの笑い声が、何者が潜んでいるのかと緊張しながらやってきた私を「愚か者！」と嘲笑っているようだ。

しかし参った。よその家の工事現場

に勝手に入って、ラジオの電源を切るわけにはいかないよ。何階に置いてあるのかわからないし、何か高価な物を踏んで壊してしまうかも知れない。いろいろ考えた。教えてもらった連絡先に電話しようか。たかがこれだけのことで連絡して、これから関係が悪くなったらまずいな。あれだけ丁寧に挨拶に来たんだしなあ……派出所に電話して警官に来てもらって立ち会いの下で切ろうか。それも後から聞いたら気分が悪いだろうなあ。迷いに迷って辛抱することに決めた。はつきり言つて一晩中うるさかった。旦那も子供も音に關しては全く鈍感な奴等なのでぐうぐう寝ていたが、私はそういう音には異常なくらい敏感なので気になって寝られない。昼間と違って夜は静かな地域だ。窓を締め切つていてもラジオの騒音がどんどん入ってきて心を乱す。一つ一つの言葉や歌がはつきりと聞こえ頭がどんどん冴え渡っていく。睡眠剤を飲んでやっと寝たが、夜明け前からケミストリーの歌で目が覚めた。

「はんばな夢のひとつかけらが……」はつきりと歌詞がわかるほどの大きな音で鳴っている。いつもさわやかな彼等の声がこんなに憎く聞こえたのは初めてだ。



● フリートーク

ぼおとした頭で仕事に行き昼過ぎに帰つてくると、工事のおじさんは来ていたが懲りたのか反省したのか全くラジオをかけずに仕事をしていた。切

つてくれればそれでいい。一言の文句も言わずおしまい。

それから昼間鳴らす音も若干小さくなったし、必ず夜は切つて帰っている。

私は皆さんにお聞きしたいのです。

こういうときどうしますか？ せっかく緊急連絡先をくれたのだからたとえ一晩でもうじうじ考えずに抗議すればよかつたのでしょうか。

そうこうするうちに家はどんどんできていく。誰が住むのだろう？ 敷地いっぱい建つたので裏庭がなくなつたがあの壺はどうなるんだろう？

ポケ包囲網

熊本県天草郡 松本とみよ (45歳)

今から思えば、あれもポケの始まりだったのだろう。最初は時間の感覚がなくなつた。

「車をもって来るからここにいなさいよ」と五分待たせたところ、そこに



いなかった。一時間も待たせたと立腹してバスに乗って帰ってしまったのである。当時はなんて人だろうと思っただものだ。

その後、玄関前につっ立って道行く人を呼び止め、聞こえよがしに「嫁が金を盗る」と言うようになった。

もう一緒に暮らす自信がないと夫に訴えたところ親族会議が開かれ「病院に入れろ」となったのである。一年間をケアハウスで過ごした後、どうしても帰りたいと家に戻って来た。あの一年間は天国だった。

それで懲りたのか反社会的なことは影をひそめたが、「中学は二年までだったかね」なんて程度の笑い話はしょっちゅうのことだ。いつも行き来している親戚の女性に「あんた子供は何人だった？」と聞き、末っ子N君の下の子は何という名だったかと、いるはずもない子の名を聞かれた彼女は啞然としたので、「今日はちょっとひどいみたい」とお互いに顔を見合わせた。

高校生の長男が帰宅して部屋に引き

あげると「学校へ行ったのか」と聞くので「そうよ」と話を合わせる。

ところが最近、近所のKさんまでがおかしくなった。しつかり者と評判で地域のリーダーだった彼女が。

最初アレ？と思ったのは学校の廃品回収。町内放送の後、うちにペットボトルを抱えてやって来て「これは出してもいいのか」と聞く。こちらでは新聞とビールびんのみが通常の回収品である。それはとらないうと次々に「これは？」「これは？」と明らかにゴミという品を持って来たので目が点になった。

次は、ピンポーンとチャイムを鳴らし、「先月の新聞代は払ったかね」と午前中だけで一時間ごしに三度も聞きに来た。せっかくの休みなのに勘弁してよという感じ。そんなときの彼女はどこか空な眼をして魂がどこかへ行ってしまったかのようだ。

この間のことだ。ご飯を炊いている途中で姑が炊飯器のふたを開け、どこかスイッチをいじったららしくそのまま

保温に切り替わってしまった。そうとは知らぬ私が、いざご飯をつごうとするとごっちゃん飯になっていた。とても食えたシロモノでないので炊き直しとなった。

そのとき姑は、待てないとどこか近所から握り飯二個をもらって来て食べていた。

その一週間後、Kさんがやって来て、「あんたんとこのばあちゃんが米を一升売ってくれというのでやったけど金を払わない」と言う。嫁が飯を食わせないので自分で炊いて食うと言ったという。そんな米は見かけなかったが、うちの姑の近ごろの様子ではありえる話のような気がしたので五百円払った。

わかるまいと思ったが、姑に念のため聞いてみた。すると「握り飯はもらったが米はもらっていない」と言う。ああ、この間の一件がそのように変化したんだとうなずけた。

うちの姑ばかりか隣家のKさんまでボケている。ボケ包囲網のただ中にいる私。これから一体どなるのだろうか。

よいとごろを みよじょう

永田道子

十数年前から仲よくしてもらっている近所の友達がいる。

今年に入り、その人が家を新築することになったが軒余曲折があつて、やっと六月に建前の運びとなった。

私はもちろん、新築祝いはあるが上棟式に行くことは全く考えてもいなかった。

五月にその友人が我が家を訪れ「あと二名の方と共に建前のときお手伝いをして欲しい」と要請があり「それなら建前に行こう」とその時点で決めた。さて当日、お祝いの人々、建築関係の人で建前は盛大に行われ、お手伝いを頼まれた私としてはそれなりに気遣いをして無事終了したのでほっとした。

ところがその翌朝、昨夜建前に参加した人の家に用事があつて行つたら、「永田さんのほうから『建前の手伝いをさせて欲しい』と言ったのですってね」と言われた。私は驚いて「誰がそのように言っていたの？」とも聞かず帰つてきてしまった。

私は胸の中がすつきりせず、ある人になんか話をしたら「お手伝いをしてたかた人があなたに焼きもちを焼いて言ったのでしよう」と言うので私も「多分そうだろう」と思ったのだが……

建前の三日後、一緒にお手伝いをした人と道でバッタリ出会った。すると「『あなたの方から手伝わせてと頼んだ』と建主(友人)が言っていたわよ」とのこと。

なぜ、そんな嘘をついたのか？ 友達に対する信頼がガタガタと崩れていた。

でも私が「人の品物を盗った」という嘘なら本人に会つて白黒を付けなければならぬが「まあいいか」と。で

も「今度その友人に会ったとき私はどうゆう顔をすればよいのか」とも思った。

もやもやする心を無理になだめていたときある新聞を読んでいたら「友人のよいところをみようよ」と心の中で叫ぶ声が聞こえた。

「そうだ！ そんなことで彼女との友情を終わりにするなんて愚かなことだわ」と考え、胸がすっきりした。

その後「心の叫びがどこから出てきたのか」とその新聞を何回も読み返したが、全く関連のない記事だったのが不思議だ。

私は、自分の心の窓を開いてそっと覗いてみたいと思った。

アメリカの子供たち

神奈川県大和市 浅田節子（69歳）

まだ頭の中がボーッとしている。孫二人の夏休み中の世話のため、一か月

近くロスで生活した。帰国して二週間目だが、身体がロスのリズムで回転しているから、夜中変な時間に目が覚めて朝まで寝つけない。恥ずかしいけど、こうなったらお酒の力を借りるしかないと考え、よい方向へ……。

こうして書いていると「キヤーツ！」とさわぐ子供たちの声はまだ耳元に残っていて、ハッ！とする。

アメリカの子供たちは（うちの孫二人、女の子十歳と七歳も含めて）はだして走り回り、隣のプールへ「ワァー」とか「キヤーツ」と言って、何人もで移動して静かになったと思えばドタドタと室内にはだしのまま飛び込んでくる。びっくりして「ノォー」と叫んだ私。

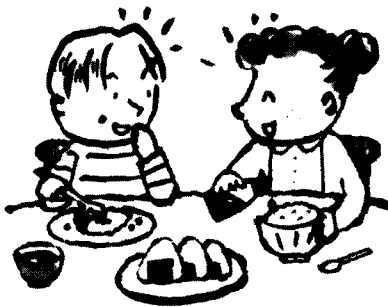
そして、そうかア——アメリカの家庭は土足だから、室内も外もはだして走り回ってもいいのだア——と納得したのだった。

しかし、日本人である息子宅は、ちやんと靴は入口でぬいでいる。

さて……ランチの時間面白いことを

発見した。「ジャパニイーズ・ランチ」と言って、近所のアメリカ人の子供二人が待ちかまえている。

私はとっさにオニギリが頭に浮かびそれを作った。ところが、お皿の上のオニギリをスプーンで潰し、しょう油をかけている。もう一人の女の子はこ



飯茶わんに盛ってあげたら、ご飯の上からやはりしょう油をかけて、おいしそうにスプーンで食べてお代わりまでした。

数日後に遊びに来た女の子は、青い目でお人形のように愛らしく、やはり「ジャパニーズライス」を注文し、ノリを小さく切って手でご飯をくろみ、お皿の正油をたっぷりつけ、おいしそうに食べていた。

日本のお米は、アメリカでは人気があるのを知った。

息子たちはカリフォルニア米を求めているが、何と電気ガマのご飯は十五分でスイッチが切れて、その早さとご飯の「うま味」にもおどろいた。電圧の高い国はさすがだと思った。

それにしても、十二歳になるまで子供だけ家に置いてはいけない法律を守るのには、三か月近い夏休みだから、共働きの家庭は大変！ ベビーシッターをお願いしたり、学童保育のようなところもあるが、子供たちにあまり人気がないらしい。九月の新学期を待つば

かりである。

浅野素女さんの ラジオを聞いて

東京都西東京市 中村哲子（74歳）

八月十五日の深夜、NHKのラジオで、パリからのフリージャーナリスト、浅野素女さんと紹介され、声はやさしく、中味はするどいレポートを聞くことができました。

「バカンスの季節に、税の通知が送られてきたり、電気料金が秋から値上げと決められてしまったりするので。フランスでは、新年度が九月からですから。」

フランスのバカンスは、だいたい五週間くらいでしたが、今年から週三十五時間労働と決まりましたから、さらに二週間が夏とはかぎらずに追加されることになりました。GDP、国の総生産は下るかもしれないけれど、それ

はしかたないと。フランス人は自分の生活を大切にしたいから——こちらでは一生会社につくすなんて誰も考えていませんから——」

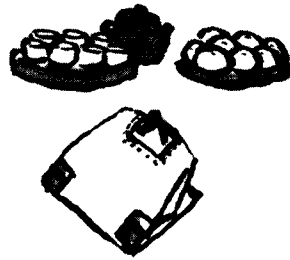
素女さんのこの夏のバカンスは？との質問には、日本に行ってきたこと。また夫の実家でしばらく過ごしてきたこと。これから山の中に借りたキッチン付きの家に出かけて過ごすのと。こちらでは南のほうにある親の家や、親類、友人のところまで長く過ごす人が四四パーセントで、ホテル泊まりは一パーセントにすぎない、などと答えていました。

以前、私自身、スキー仲間と五月のゴールデンウィークの前に、カナディアンロッキーの山の中のバンフ郊外の貸別荘で、しばらく過ごしたことを思い出しました。

自炊しながら、レンタカーで動き廻り、スキーを楽しんだり、プールで泳いだり、八時すぎまで明るい夕空の中でのテニスと。おそい夕食を庭のあずまやでバーベキューで食べていると

き、二組のパーティと一緒にになり、そのメンバ―の若い女の子から「日本にゆきたいけどあなたの家に泊めてくれるか」と――。

我が家は空いている室はあるけど、



へピースモーターとはつきあえないとあつさりことわってしまったつけ。

その貸別荘は週単位で借りられ、掃除、シート、バスタオルは毎日替えてくれるし、費用は安く、山を眺めなが

ら、林の中で、エルクヤリス、鳥がいつもその辺で遊んでいたな。

素女さんもテント生活の夏もあったそうです。今パリはどろぼうとひったくりがふえてひどい等々お話は続きました。

いっさんの ラブコール

奈良県奈良市 田中慶子（55歳）

久しぶりに夫と家でカラオケを楽しんだ。母が亡くなって以来のことである。

脳梗塞で立てなくなり、八十七歳で亡くなった私の母に、夫はよくフランク永井の「いっさんのラブコール」のカラオケをしてくれた。私が母のためにこれを歌うと、

「いっさんやてえ。いややわあ」

と痴呆の母はしきりに照れながらも嬉しそだった。母は昔いっさんと呼ば

れていたのだ。

母が亡くなって四年半経った先日娘が言った。

「おばあちゃん、店のほんさんの中で好きな人がいてはってんて」

「えっ、そうやったん！」

娘のことばを聞いて、私にはすぐに思い当たることがあった。商家の娘だった母は、店のほんさん達の中の一人の話をよく私にしていたのだ。きっと彼のことだ。

「男前で字も上手やねんけど、商売が下手やねん」

母がよく私に話していたのに私は何と鈍感なのだろう。母がああほんさんのことが好きだったとは！

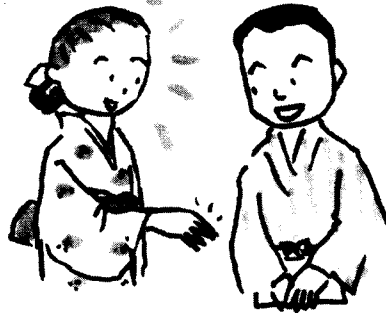
彼はマニキュアをした母の爪を見て、「いっさんの爪は濡れてるみたいでんな」

と言ったらしい。母がそう話すのを私は何も思わず聞いていたが、今思えば何と艶めかしい光景だろう。

母は自分の母（私の祖母）に、

「若い娘が（男性のいる）店にそん

なに行くもんやおまへん」
とたしなめられたと言う。好きなほん



さんに会いたい母の乙女心を私は今ごろになって思う。

母が、娘である私には言わなかった

自分の初恋を、孫娘には言っていたのがおもしろい。鈍い娘には言う気がしなかったのだから、一般に、おばあちゃんと孫娘の間には母娘間にはない特別な親密さがあるのかもしれない。

母は往年の俳優ゲーリー・クーパーとNHKの平光アウンサー、最近では関取の寺尾のファンだった。三人の顔を思い浮かべると彼のほんさんの容貌も大体想像がつく。

その後母が見合い結婚した父は、目が大きく派手な顔立ちで、どう考えても母の好みとは違うタイプなのである。

性格はきれいだが社会性に乏しく、変人の父に母は苦勞し、幸福な結婚生活とはいえなかった。それでも母は呆ける前、

「お母ちゃんが死んだら、お父ちゃんのこと頼むで」

と父を案じていた。母が呆けて二年後に父は逝き、さらに二年後、母は父を追った。

(え・實輪絵衣子)

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などの開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多々と思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。

母の死の方



娘時代の母
大正14年、16歳



鉄道員の父と結婚
昭和2年、母18歳、父26歳
「丸まげはかわいそうだ」と
桃割れに結ってもらった

大阪市城東区 布施幸子（68歳）

平成六年の夏は猛暑だった。

七月に夫の一周忌と納骨式、併せて先祖の改葬を行った。汗びっしょりになった。母も出席したいと言っていたが断った。元氣とはいえ八十五歳。京都で独り暮らしをしていながら送り迎えがいる。カンカン照りの墓地で倒れるようなことでも起きたら大変だ。複雑な準備に追われた私は疲れきっていて、母よりむしろ自分を気づかったのかもしれない。

「お母さん、お彼岸のころにゆっくりお詣りしてもらうたらどうえ」と電話すると、

「そうやなあ。今年の暑さはふつうやない。八十五年生きてきたけど、こんな夏は初めてや。法事が終わったらあんな、さっさと帰って休みよし。日中には外へ出なや。彼岸ころ涼しゅうなったらお越しやしとくれやす」とちよっとおどけて言った。

法事の疲れか私も息子も体調をくずした。盆にもお寺へ行けず、お布施だけ送った。お寺へ行ったら実家まで足をのばすつもりだったことを電話で伝えた。

「大丈夫か。薬は飲んでるか。え、わては大丈夫や。クローラー二つつけて、避暑の気分やで」

「ええーっ、一人で二つもクローラーを」

「他にぜいたくするやなし、清水の舞台から飛びおりたつもりで買うたんや。汗かきながらでは何もできんけど、手まりもたんと作ったえ。今年もわずかの寄付金添えて、老人ホームに貰うていただくつもりや、敬老の日に」「敬老の日にて、お母さんこそ欲しい物言うてよ。持ってゆくさかいに。何がええ？」

「何も要らん。この年になつたらなんにも。彼岸に来てくれたらええて言うたやろ。養生してや。欲しい物はない。けど昔、ほら茶の間にあった柱時計。見とう



結婚後5年間子供が生まれなかったので、手に職をつけようと「京都美粧倶楽部（美容学校）」へ入学
昭和6年、母22歳



「美粧倶楽部」退学
昭和7年、私が生まれたので



昭和25年、41歳
父死去のため、他家の庭
仕事にやとわれる



併せて仲人役に
励みだす

なって納屋を探したけどあらへん。まあそんなことはええけど、あんた、気いつけとくれ、心配でかなん

「わかった。ほな彼岸ころに行こか」

これが母と私の最後の会話となった。

「虫の知らせ」とはあんなことだろうか、と今思い返している。そして「虫」に感謝している。

八月三十一日のことだ。

その日も朝からものすごい暑さだった。ふと電車で二駅の商店街へ行こうと思いい立った。大阪一安くて大きいといわれる商店街だが久しく行っていなかった。「まがい物の柱時計がああ商店街ならあるかも知れへ

ん。見つかったら彼岸といわず早めを持ってつたげよう」と思ったのは、前の夜に夢で見た母の顔が寂しげだったからだ。夫の死以来、私は悲しみを母に当てつけてけんかしたり、相続などの厄介さに頭を痛めて、母のことはつい後まわしにしていたことに気づいた。

「来んでもええ、とは遠慮やわ。お母さんほんまは来てほしいのやろ」

長生きし過ぎた、と言っていたつけ。「かわいそうに」と大人げない自分を反省した。

商店街には安いまがい物ながら、昔わが家の茶の間にあった柱時計とそっくりな品があった。私は飛んで

帰って母に電話したが出なかった。「庭に出てるのだから」と思った。暑かろうが寒かろうが、午前中は庭に出ている母だったから。いつ行っても草一本見つからなかつた。庭木もきれいに刈りこんであるので、「植木屋さん、頼んだの?」「あほらし、植木屋さんに来てもらうような庭かいな。わてが屋根に上がって切つたんだよ」と長柄付きの植木ばさみを見せたので仰天した。

「お母さん、やめてえな。転げ落ちたら大事やし、迷惑かけんといてや」

母のけがより自分の負担を想像してゾツとした。

「屋根の上から落ちて気絶……まさか」

気になったのは、再び昼ごろ電話しても出なかつたからだ。

「まさか。何べん電話しても出なかつたんは今度だけやない。ほんまに心配ばっかりさせるお母さんやから」以前、心配して駈けつけたことがあった。ベルを押すと「何やいな」とげげんな顔の母が出てきて、「来んでもええのに」と言った。

「セールスやら宗教やらの電話ばかりやし、ほつといたんや。用があればこつちから電話するわいな」とありがたがりもしない。

こんなこともあった。朝何べんかけても出ないと案じていたら、息子が会社社の昼休みに電話したようだ。

「夜中まで本読んでたさかい、昼まで寝ていたんや。」

いちいち心配要らんで。けど、善幸ちゃんの電話は嬉しかった。大人になつたなと思うてなあ。もいっぺん、やつてみよか」「お母さん、ええかげんにしてや」私はあほらしくなつてしまった。だから、ときどき「何べん電話してもかからへん。お母さんになんぞあつたんか」親類からたずねられても笑つていた。「毎度のことです。大丈夫ですわ」「あんた、そない気楽に言うてて親のことやで」とたしなめられたりもした。

「常習犯や」と悪口言つていたが、その日はどう考えでも変だつた。何度もかけ直し二時になつても三時になつても出ない。

「弟んどこ行つたのかしら。そんなときは必ず知らせると言うてあるのに」

と弟の家に電話してみたら「来ていない」と言う。不安でいっぱいになった。飛んでゆくにしても、わが家から二時間余りかかる。弟の家からはその倍もかかる。どうしよう?

京都の実家の隣は消防署になつていて、かねてから懇意にもらつてゐる。鍵を壊して中の様子を見ていただくよう弟から電話することにした。まもなく、家の中で母が倒れていて様子がおかしいとの連絡があつた。すぐ救急車で病院へ運んでもらつた。再び、「容体は安定している。入院の準備をしてすぐ病院へ行つてほしい」との連絡を受け、私は寝間着や洗面用具を



昭和38年、母54歳
子らが巣立って一安心
右から、私、弟、妹、母、弟と弟嫁
(妹と末弟は30代で早逝)



私の娘

昭和42年、母58歳
前年初孫（私の娘）が事故死して母
は痩せている
(後ろ中央に甥を抱く義弟も早逝)



昭和44年、母60歳
私と息子と従弟と

バッグに詰め、家を飛び出した。運ばれた病院は京都の郊外にあって、途中からタクシーを利用したが着いたのは夕方だった。

「面会はいまできませんよ。重体ですからね」
受け付けの女性はそっけなかった。

「あ、う、そんなにわるいんですか」
「集中治療室です。面会は明日の午前十時」
「そんな……。お電話では面会できると……」
ほうぜんとしていると二階から看護婦さんが下りてきて、「ちょっとだけならいいです。寝間着などもお預かりしたいです」と言ったので、礼をのべて後に従った。「病院の看護婦さんと、職員の手合わせができてないのかしら」と疑問だった。

「消毒衣に着替え、手を洗って入ってください」
と言われたので、急いで指示に従ったが消毒衣は薄汚れ、床に引きずるほど長い。かえって不潔な気がした。

母は体中管だらけ、急によほよほになったように見えた。気丈さはどこへ消えたのか。

「お母さん、かんにん。電話に出られへんだんやね。ごめんさい」
母は手を差しだし、私の手を強く握って何か言おうとするが言葉にならない。

「え、なあに。家の戸じまりなら消防のお方に頼んだえ」
母は首を横にふり、私の掌に字を書くのだが判じられない。

「なあに。私がついてるから安心してね。早くよくなつて帰ろうね」
母はまた首を横にふった。
看護婦さんが寄ってきて、
「他の患者さんに迷惑やし、大声は出さんといってください」



平成2年、母81歳
最愛の孫（亡妹の娘）と



平成2年、亡夫と

「けど、母の言葉がわかりませんのや」
「また明朝に面会できます。先生のご説明があるので外へ出てください」

「ほなお母さん、がんばってね」

母の悲しげな顔に後髪ひかれる思いで外に出ると若い医師が立っていた。インスターンのように見えた。

「えーとですね。水道のホースで水まきしたことありますか。水は勢いよく出る。けどホースを足で踏むとどうなりますか。出なくなる。おばあちゃんの血管がそないなつたんです。そして心臓辺に詰まった血のかたまりが、ポーンと脳に飛んだ。わかりますか」

「あんまり。それより母はどうなんですか」

「脳梗塞。ほとんど脳死。重体です」

「けど、お電話では安定していると承りました」

「大変な状態で安定してゐるんです」

「まあー、私は『安定なら一安心』と解釈しました」
「ハハ、倒れたとき、すでに重体だったんです。まあ

手術で奇跡的に助かっても寝たきりで口はきけません。口もきかず寝たらどうなるでしょうか。ボケが進む一方です。明朝、院長の話があります。では失礼」

「ありがとうございます」

「あ、ちょっと妙なことがあったんです。名前を聞くとき山口チヲ。『手まりを作ったら目まいがして倒れた。クラー二つがわるかった』って言っていました。出たらしめにせよあの状態ではあり得ないことです」

「ほんまに山口千良、変わった名なんです。手まりのこと、クラーのことともほんまです」

「妙なこともあるんですね」

含み笑いを残して医師は去った。

翌朝まで私は病院の廊下の隅で、重い気分をもて余しながら過ごした。そんなに重体なら、どうして付き添わせてもらえぬのだろう。来たとき母の意識はあつて何かを伝えようとしていた。朝にはどう変わるかも知れない。

案の定、翌朝弟夫婦が来て三人で母のベッドへ行く
と様子はまるで違っていた。反応はほとんどなかった。
それでも私が、

「お母さん、これまでわがままでかんにん」

と大声で呼びかけ手を握ると、やっとのように握り返
した。そのあと、三人は院長に呼ばれた。私たちは深
く頭を下げた。

「たいへんおせわ様でございます」「もうわかつてる
やろが重体や。あとは……頭蓋骨を外す手術、それも
高齢でむつかしいけどどうする?」「急に申されまし
ても。あのう、外した頭蓋骨はどうしてはめるんですか」

「動転して変な質問をしたとは思う。が、「こっちはプ
ロヤ」とにべもない。おそるおそる、「あのう、ほかに
手だてはおへんのやろか」「それがあるくらいなら苦労
せんわ。手術をするのかせんのか昼までに決めて返事
せい」「ありがとうございます」

私たち三人はひとまず実家へ行き、手術について話
しあうことにした。消防署へ寄ってお礼を言うと、み
なさんが案じてくださった。

「元氣なお方でしたのになあ。きのうかて朝は庭に出
てはって、あいさつしましたんや」

庭の草花や植木は活きいきしていた。一夜を越した
洗濯物はためいていた。よく乾いたありさまを母が
「はじけた」と表現していたのが思い出された。

部屋へ入って私たちは体を震わせた。二つのクーラ
ーが動きっぱなしだったのだ。あわてて切って窓を開
けた。座敷机の上の大きな紙箱に糸掛け手まりがいつ
ぱい詰めてあり、作りかけた一つが針をさしたまま置
かれていた。思うに早朝から掃除や洗濯をこなし、庭
に出て大汗をかいた後、予め冷やしておいた部屋に入
って手まりを作りかけたとたん倒れたのだらう。「妙な
こと」と若い医師は言ったが、母は正しく伝えたこと
になる。脳死って何? 臓器移植の話が登場するたび
私はこのときのことを思い出す。

女二人が口を開いた。

「横柄な院長さんやないか。ハラが立つわ」

「客のほうがペコペコする。けっこうなご商売やねえ」

「幼稚園からわが子をしごいて医大に入りたい。そん
なママが絶えへんはずや」

「医者が見なそうではないやろ。それより手術をする
かせんか、どないする」

と、弟が悪口を打ちきった。

「手術中に亡くなるかも知れへんのやろ。お母さん、
すやすや眠っている様子やったし、痛い目にあわせて
結局だめやつたら、なあ」

「助かっても寝たきりで口もきけへんのやろ。あの勝
ち氣なお母さんがそれを望むやろか」

「ほな、手術を断るのか」

「そんな。看病ひとつせんと旅立たせることになるわ。四十で未亡人になってからも人のせわをせんど（千度——いっばい）して、子供のことも悲しい目をして独りで暮らしてきたんよ」

男仕事までして四人の子供を育て上げたが、うち二人が若死にした。妹の死に続いて末弟が急逝したのは母が七十三歳のときだった。その葬式の後に倒れて脳血栓と診断されたが、言語障害も半身不随もあっさり克服して一月で退院し、

独り暮らしに戻った。それまで以上に手芸や園芸をこなし、生まれて初めてのアルファベットを覚え、英単語に挑んだ。俠気のようなものを持っていて、困った人のせわをたびたび引き受け、安うけあいを後悔したりもした。「老いても子に従わず」我を通し、気に入らぬと偉人にも食ってかかる向こう見ずな面もあった。

そんな母らしさがいっさい消え、生き永らえるだけの姿は見たくなかった。介護のしんどさを想像すると溜息が出た。それでも生きていてほしいと念じたのも確かだった。手術をするべきか否か。困りはてた私



晩年の母
平成5年、84歳
ちょっとおめかし

ちに母が答えを出してくれた。急変の電話がかかり、まもなく死がやってきた。

「誰のせわにもならん。野たれ死にで結構」たびたび言っていた。嫌味と受けとった私は、「ごりつぱ。けどうまくいきますやろか」

と皮肉で応じたことがあった。でも、うまくいってしまった。虫の知らせへの対応の遅れは悔やまれる。が、私が病院へ駆けつけるまで生きていてくれたおかげで、

周囲から「死後何日も放つとかれはつたんやて」とのそしりを免れることができた。老いても子に従わず。白髪が増えた子らの面目を立ててくれたのも、母の計らいだったかも知れぬ。

死顔の美しさには誰もが驚いた。「どうえ」と自慢しているように見えた。母らしい終わり方であった。

高齢者本番となった私は、母のように死に残り時間を過ごし、母のように死にたい。けど、「うまくいきますやろか」と問われたら、とても無理な気がする。母が最後に私に伝えたかった言葉は永久にわからずじまいになった。でも、とにかく幸せを念じてくれたのは確かだろうと、虫のいいほうに考えている。

(写真提供・筆者)

だから、女は「男」をあてにしない



田嶋陽子著
講談社
本体1700円+税

日常生活、会社、テレビの中などありとあらゆる場面で、男たちは何気ない言葉の中に女への差別を秘めている。あるいは、あからさまに差別する。女同士での差別もある。ナンダナンダこれは！と、筆者が遭遇したり、目にふれたりした具体的な状況から、態度や言葉の底にある男尊女卑を見抜いて鋭く突いていく女性差別告発エッセイ集である。

男女の秤は、はかる前から男にかたむいている。女たちよ、もっと女性差別に敏感になれ、男におもねるな、外面ばかりでなく内面を磨いてもっと成長しなさい、と筆者は女性学の見地から人権意識革命を痛快に説く。(小)

子育ての知恵 しつけのコツ



田中喜美子 +
NMS研究会
PHP研究所
本体1200円+税

ユニークな子育て法のなかからすでに六冊の育児書を出しているグループが、そのうち最高の出来と自称する一冊。豊富な資料を駆使して「泣く子に勝てない」「叱り方がわからない」「寝かしつけに苦労する」など、若いママたちが振り回されている問題を具体的にとりあげ、快刀乱麻を断つピリッとした解決法を伝授しています。

なるほど子育てはこうすればずっとラクになるものだ、と実際にやってみた現場のママたちの声も満載されています。

現場を知らない「先生」方の意見ではなく、実際の声に基づいているので、すごい説得力のある一冊です。(田)

33歳 子供2人 それでもコピーライターになりたかった



長井和子著
亜紀書房
本体1500円+税

ここに書かれているのは単なる主婦のサクセスストーリーではない。私は業界の裏事情を知っているだけに、枚挙にいとまのない「広告業界残酷物語」のエジキになることなく、着実にチャンスをモノにしてきた逞しい一業界人の姿に、ただただ驚嘆させられた。

三十歳を過ぎた子持ちの主婦が、そんな状況のなかで、しかも全くのフリーランスから出発して、東京コピーライターズクラブの新人賞を獲得するということがどんなに大それた(ー)ことか。著者はとてもサクサクと、淡々と書いているので、代わりに私が声を大にして言いたい。「皆さん！これは、ほんとうにものすごいことなんです！」(山)

ブ

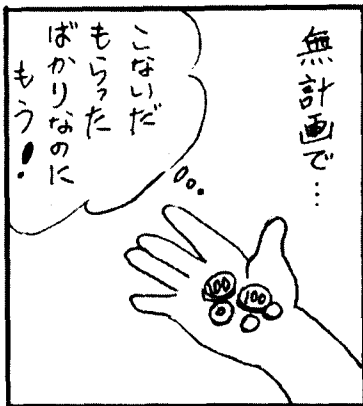
ツ

ク

情

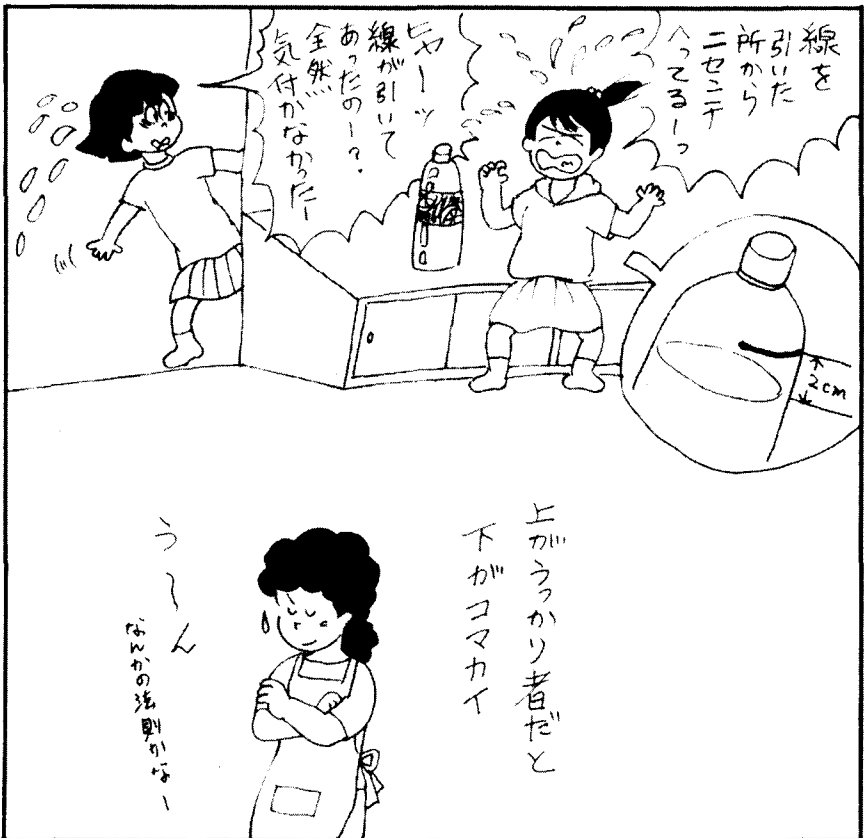
報

これが
子供の生きる道
 栗田 若^{わか}









林の 椅子で

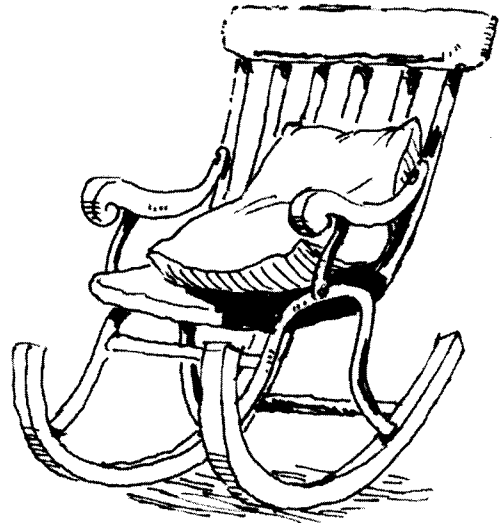
栃木県宇都宮市 真野由美子

キャンプと言えば、思い浮かべるのは、子どもをこ
つちやり連れての川原のバーベキュー、おかあさんは
もううんざりよ、という友だちへ、私の「キャンプの
幸せ」を語りたい。

それは、ちよつと大人の世界なのだ。

そのキャンプ場は、カラマツ林の中にある。秋には
カラマツの細かな葉が、細い雨のように降り注いでい
る。

カラマツの奥には白樺の林、自然の腐葉土でふつく



らした地面は、さらに奥へ行くと、びっしりと苔むし
て森につながる。古い切り株に、シマリスが立ち止ま
ってこちらを見ている。アカゲラが木をつつく音が、
せわしく響いて、空気が冷たく、秋のおいがる。
オーナー夫妻の住まいを兼ねた管理棟のドアをたた
き、懐かしい顔に迎えられる。

「また来ました、よろしく」

しばらくの談笑の後、私たちは、結局いつもと同じ
場所に車を停め、テントを張る。

子どもたちも、少しずつだがテントの設営の役に立

つようになつてきた。

さあ、私の休暇のはじまりだ。

私のキャンプの目的は、「雑務・雑念からの解放」、これに尽きる。

私と夫と二人の子どもは、買い物に行き、がんばらない食事を作り、片付け、お風呂に入つて、眠る。私たちの毎日はこの繰り返しなんだということに、毎回のように感慨を覚えてしまう。

あとはひたすらぼーっとする。花を眺め、山を眺め、この日のためにとつておいた本を読む。

庭仕事をするオーナー夫人とお喋りしたり、持ってきた刺繍をしたりする。

嬉しいのは、顔なじみのキャンパーと一緒にになったときだ。だからどうするわけでもないんだけど、ただ、再会を喜ぶのだ。

キャンプが趣味、と本当に言えるのかどうか。私はしかし、キャンプ歴だけは長い。

オートキャンプブームのはしりのころ、テント、ツーパーナー、ランタンにタープ、クーラーボックスと、新しいキャンプ用品を一つ一つ買い足して、私たち夫婦は週末ごとにキャンプに出かけた。

その年は、奮発して北海道に出かけたのだった。『北の国から』に出てくるパッチワークのような大地と、

美味しいものたくさん北海道へ！

フェリーで苫小牧に上陸し、富良野から美瑛、層雲峡から北見へ、その先へと旅をした。車を飛ばして観光名所をめぐる。湖やラベンダー畑やさくらんぼ狩りを楽しんだ。大雪山にも登った。

午後になるとガイドブックで最寄りのキャンプ場を探して、そこに碇をおろすのだ。

自分の身軽さにわくわくするような旅だった。愛する人と（新婚さんだったからね）とりあえず暮らすのに必要なもの全てに乗っている状態。お金はそんなにないけれど、どこへだって行けるじゃないの！ キャンプは、多少不便でもリーズナブルな宿だった。そう、北海道には本当にたくさんキャンプ場があった。いや、キャンプ場がなくなつていい。車を停めれば、そこが今夜の宿だった。

その旅の終わりに立ち寄つたのが、道東のこのキャンプ場だった。

キャンプ場の入口の看板を見たときから、私は不思議な気分にと捉えられた。

木彫りの看板の下には野の花がたつぷりと活けられていた。そこだけではなかった。施設のあちこちに、かめやホーローのヤカンやガラスびんが置かれ、さまざまな種類の野の花があふれんばかりに咲いていた。



北海道のキャンプ場は、設備の整ったところが多かつたけれど、ここは他とは全く違うと感じた。

トイレ、洗濯機のあるシャワー室。建物はすべて素

朴な木でできており、ドアの取っ手はみな、曲がった桜の枝が使われていた。毎日触れられて、皮がむき出した部分がびかびか光っていた。

トイレの個室には一つ一つ、手作りの小さな刺繍の額が掛かっていた。それは当時流行りのアメリカカンカントリーとは異なって、周囲の木の造りにとけあっていた。

オーナー夫妻は年齢不詳、スキンヘッドでひげのご主人と、ノーマイクで雰囲気のある奥さん。管理棟はほの暗く、クラシック音楽がかかっており、コーヒーの香りが満ちていた。

受付をしてもらいながら、この人たちと近づきになりたい、という思いがどんどんふくらみ、私はくらくらしていた。夫は、と見ると、目が合い、まさに同じ気分できると感じて、私はますます嬉しくなった。

剥き出しの梁には、びっくりするほどたくさんのドライフラワーが飾られていた。大きなテーブルと、薪式のダルマストーブ。壁いっぱいには、釣りや山や、お料理の本や魅力的なタイトルの漫画の文庫本がびっしりとつまっていた。

壁にはベッドカバーサイズの大きなタペストリーが掛けられており、私はどうしようもなくときめいた。なんてこの部屋にびったりなんだろう（流行りのパッ

チワークには食傷気味だった私なのに。それは陽射しを集めたような明るい小花柄を、気が遠くなるほどたくさんつないだ作品だった。

こんな優雅な、そして、血の通った空間に身を置いたのは初めてのことだった。もつとここにいたい。この人たちの住むこの林のキャンプ場で過ごしたい。私たちは一泊の予定を二泊に変更したのだった。

そして私たちは、新たなキャンプの魅力を知ることになる。

「連泊（れんぱく）」って、なんていいんだらうか？ テントの撤収と設営を毎日するなんて、私たちは今まで何というコセコセしたキャンプをしていたのか。

私たちは翌朝ゆっくり起きた。コーヒートとパンの朝食をとっていると、テントサイトをオーナーが通りかかった。リスにひまわりの種をやりに行くのだという。同行させてもらい、美しい敷地内を散歩。すると、林の向こうの熊笹の茂みは、幅二メートルほどの蛇行した川を隠していたではないか！ それから私たちは、釣りのまねごとをして、それから二人で買物物がてら温泉に行き、その日の仕事はそれで終わり。

キャンプ場の向こうは、広々とした牧草地が続いている。刈り散らした牧草はロール状に巻き取られ、ところどころに置かれている。草の匂い。その向こうの

山に、夕日が沈み、うす紫の夕闇が満ちた。夜空ときたら、たくさんの星で、星座が見えないくらいだ。

私たちは旅の終点を見つけたのだった。

「こうなると、レジャーと言うより帰省だね」と実家の母が厭味を言う。私たちは、それからずっと、フェリー代と休暇を溜めては、いろいろに季節を変えて、この地に通うようになった。

オーナー夫妻はいつも私たちをさりげなく温かく歓迎してくれた。

そして、私たちは少しずつ知るようになる。一見自然の暮らしをひたすら優雅に満喫しているかのように見える二人が、このキャンプ場を美しく保つためにどんなに心を砕いているかということに。この潔い暮らしを守るために、多くの便利さや商売性を厳しく切り捨てていることに。

私たちはもう、一泊二日のキャンプには行かなくなってしまう。普段の週末はもっぱら家にいて、自分たちの暮らしを楽しむようになった。そしていつも、あのキャンプ場を、そこに暮らす友人を思う。

何をしているかしら？ そろそろ山葡萄のジャムを煮るころかな？ 今日の北海道は晴だ。たくさん釣れたかな？

十年あまりが過ぎ、私たちは親となった。夫も若いころのように、とれるだけ休暇をとる、というわけにもいなくなつた。

しかし、ここは変わらず私たちを惹きつける。

今年も私はやってきた。

道東は八月というのにセーターが要る。子どもたちは寝静まり、夫はオーナーと酒を飲んでいる。私はラントンの灯りでこの雑文を書きつけている。

こんなにもこの地に惹かれながらも、でも私たちに、決して切り捨てることのできないもの、大切なものがある。私はこのごろここへ来るたびそれを確認する。

それは、子どもの学校だったり、仕事だったり、老いていく親だったりする。刺激的で、何より便利な町の暮らしは、私の身にしみこんでいる。

十一月から四月まで、雪に覆われ凍てつくこの北の地に根をおろして暮らす人々の前に、旅人の私は謙虚になる。管理棟の暖かな、懐かしい灯りを遠くに見ながら、今、林の椅子にいます。

「神様、またここに宿を借ります。身を清めさせてください」

私のキャンプの幸せを、あなたにも分けてあげたい。大人のキャンプには、やはり秋がおすすすめです。



ズバリ一言

「親」の直感

愛知県瀬戸市 武藤徳子（43歳）

私は園芸が苦手だ。花は好きだが育てるとなると「何もしくなくてもいいよ」と言われてもらったものさえ枯らす。「水をやらないと枯れる。水をやり過ぎると腐る。黙ってないで動物みたいに訴えろ！葉を赤くするとかサ」とわめいていたが、子どもに手がかから

なくなり庭があまりにも殺風景なので、花壇を作ることにした。土を掘り起こし、適当に堆肥や腐葉土を混ぜ、値段で選んだ苗を植えた。この作業の間、通りかかる人たちが、「やっとな壇を作られるんですね！」「よかったですよ」「もつたいないなと思ってたんですよ」「私がやりたいくらいでした」と声をかけていく。知らない顔ばかりなのに、みんなとても喜んでくれる。（花好きの人にとって、この庭を見るのは相当な苦しみだったにちがいない。庭というのは『街の財産』でもあるわけか）と痛感した。

さてできあがってみると、小さな苗たちは、いかにも頼りなげ。「一個三百円もするんだから、ぜつたい枯れないですよ！」お金が絡むと気が合いがはいる。

朝夕じょうろ片手に目を皿のようにして見つめていたある日、「？」苗たちの葉の色が、なんとなくさめて力がない。「え？ え？ どしたの？ 水もたっぷり、栄養もたっぷりなのに、

何か変！

必死の私は、思わず指を土につっこんで（赤ちゃんが泣くといつもおむつに指をつっこんでいた習性らしい）あつと思つた。土が重い。水のやり過ぎでじつとりかたまっている。「そうか、水をやり過ぎたんだね。ごめんごめん。根が腐っちゃうよねえ」

苗にあやまりながら、乾いた土を混ぜてやり、二、三日は、土と葉を前以上に観察し続けた。すると弱つた苗が少しずつ元気をとり戻すのがわかるようになった。緑は濃くなり、茎はしっかりと、全体に生き生きしてきたのだ。なんとという健気さ！初めて植物をかわいと思うた。「よかつたね。がんばつたね。これから気をつけるね」そつとなでながら話しかけた。

毎日眺めているうちに普段とちがう様子がわかる。「？」が浮かぶ。花好きの人の「何もしない」は決して放りっぱなしで、見もしないのではない。特別な手入れをしないという意味であつて、かわいいからいつも眺めてはい

るのだ。それが一番必要だと気づいた時、子育ても同じかなと思った。

いつもいつも子どもを見ていると、ある時いつもと違う様子に「？」が浮かぶ。ほんの少しの違いだが、見落として放っておけば、ある日子どもは枯れてしまう。すごい発見！

いきつけの美容室の先生に得意気に、この発見を披露すると、先生はこんな話をしてくれた。一人で店を切り盛りしているの、夕方息子さんが帰宅する時間は一番忙しい。髪とにらめっこしながら背中で息子を感じ、「おかえり」と声をかける。それは、お客さんとの世間話の一瞬であって、すぐに忘れるようなものだった。

ところがある日、友人と遊びに出かけた息子さんが帰った時、「おかえり」とはさみを動かしながら「？」と感じた。何が違うのだろうと考えたら、「ただいま」と言ってから奥にはいると必ず聞こえる冷蔵庫の扉の音がしないということだった。変だ。先生の五感活発になり、夕食時、それとなく

観察した。友人と出かけた日は、うるさいくらい喋ってくるはずなのに、その日は黙ってごはんを口に運び、さつさと二階へ引き上げる。絶対変だ！ けんかでもしたのなら、放っておいたほうがいいかなあと思いつつ、用事を作って、息子の部屋へ行き、二言、三言しゃべりながら、それとなく様子をさぐる。

そのうち息子さんがぼつぼつと話し

出し、不良にたかられて、お金をとられたことがわかった。よく見るとシャツの胸のところ、わずかだが血が点々となっている。相手がにぎりこぶしを押しつけたと言う。自分のにぎりこぶしを当ててみると、きれいに骨の場所が重なった。繁華街で近道をしてつかまったので、ばれたらお母さんに叱られて、二度と遊びに行けなくなると思っただけ。



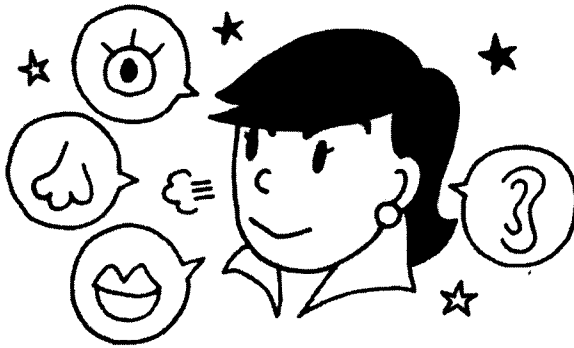
「いつも息子のことなんか気にして
いないと思ってたんだけど、無意識の
うちに冷蔵庫の音を聞いていたんだ
ね。すごいでしょ」

ほんとにすごい。その毎日のチェツ
クが、子どもの無事を確認し、いつも
と違うという信号をすぐキャッチでき
たのだ。何気なくではあっても、母は
五感を総動員して子どもを観察してい
る。「いつも」がわからなければ「い
つもと違う」もわからない。

少し前まで家事は重労働であったか
ら、母親は子どもをじっくり見ていな
かった。しかしかまどでごはんを炊き
ながら、風呂の火炊きをしながら五感
のすべてを働かせて子どもの様子をさ
ぐった。声も足音も近寄った時の体温
も、みんな子どもの無事を確認する手
がかりとなる。いつもと違うどんな信
号も逃しはしない。すばやくかつ正確
に、そして母親自身も意識しないうち
に作業は進み、何らかの異変を感じた
時のみ「？」が浮かぶ。

女の勘は鋭いと言うが、太古の昔か

ら単純な作業をしながら、女は子ども
を守るため、たゆまぬくり返しから五
感を磨いてきたのだ。

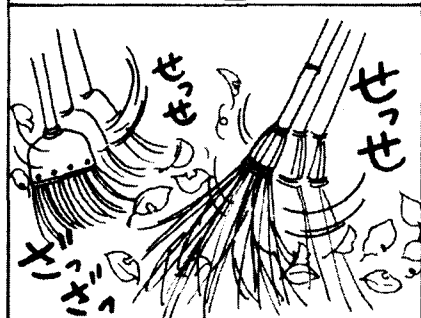
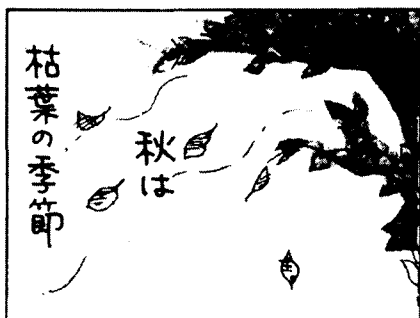
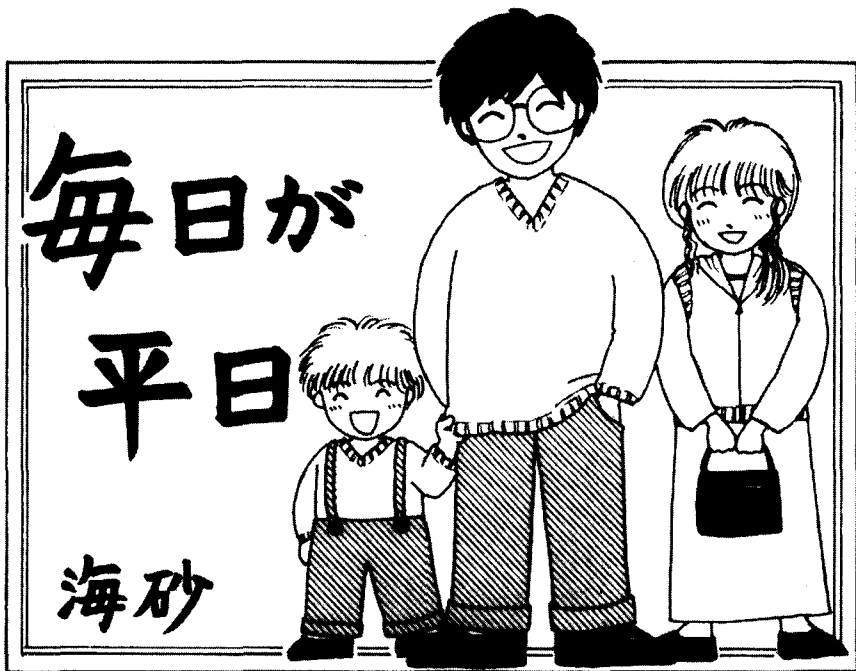


しかし今、女性だけに子育てを押し
つけてきたツケが回ってきたような気
がする。学歴を身につけ、家事から解

放され、女たちは外へ出られるようにな
った。本当に喜ばしいことであるが
子どもと接する時間が少なくなっ
てしまった。「いつも」がわからなくなっ
て、ある日突然子どもが枯れたと驚く。
社会の変化は、河の流れのようなも
ので止めることはできない。昔をなつ
かしんでも戻ることにはできない。よい
ことも悪いことも時間とともに流れ、
新しい状況にさらされる。女性の犠牲
の上に、うまく子育てが、はめ込まれ
ていただけなのだ。

今女性の生き方が変わってきたな
ら、新しい子育てを考えるべきだ。父
親が子育てに参加するのは、(参加と
いうのも変な言い方だな) おむつを替
えたり、ベビーカーを押ししてお散歩
することだけではない。大事なはその
あとだという一番の大仕事を父親もす
る必要がある。父と母で補い合っ
て少なくなつた子どもとの時間をい
つくり込んでいかなくては。子どもの成長だけ
は、絶対お手軽にならないのだから。

(え・イシノフミ)





私も ひとこと

アボカド必死の訴え

仙台市泉区 馬場紹美

アボカドの植木が話す夢を見た。「僕これからどうなっちゃうんだろう……」だつてさ。夢の中のお伽噺よと思いつつ、やつぱり気になる。後日、細い幹をむんずと掴んで持ち上げてみると、植木が鉢からスポンと抜けたではないか。なんと土がほとんどなくて、根っこだらけになっていた。夢枕に立つなんて人間だけかと思つたら……。新しいおうちに移つたアボカド君、もう葉が四枚も増えちゃつた。

「私の人生」その後

東京都葛飾区 鈴木紀美枝 (40歳)

試用期間三か月の、一か月目に「二か月様子を見て、ダメならクビ」との社長の通告から、たつた一週間後になんと「クビだから一か月以内に辞めてネ」と言われてしまった。それもそのはず、男の職人が二人入社して私は必要なくなつたの。そのうち一人は二日で辞めたけど……。数日後、葛飾で知り合つた新しい恋人が求人を見つけてくれて、採用されたので今は再びパン職人として働いている私。

未摘花だった私

東京都世田谷区 後藤 晶 (42歳)

あまり親しくもない知り合いの年下の男性に、「鼻が赤いですよ」と言われた。たまたまそばにいた白髪の男性は、驚いたふうだったが、その後もそのことには触れずに会話を続けた。

私も、鼻のてっぺんにばかり吹き出物がでさるので気にはしていたのである。怒りで、翌日皮膚科を受診し「毛のう炎」と言われ、完治した。

指摘されたおかげとはいえ、奴は嫌いだ。

ブルーな日

神奈川県中郡 石井しのぶ (42歳)

気分が沈んでいる時、カウンセリングなんて大げさなものでなくていいので、思う存分気持ちをはき出せるところがあつたらどんなにいいだろう。友人には遠慮があつてそうたびたびは愚痴が言えない。文章にはき出すのもいいけれど、やはり直接人の言葉でなくさめられたいこともある。こんな時、歯医者に行くくらいの手軽さで気分を晴らしてくれるクリニックでもできないものかといつも思う。

ああ、会社!

大阪府茨木市 三好敏子

会社を辞められた方の投稿が、二編載つていた。勤続二十七年(育休六年)の私に、仕事のない毎日は考えられない。この半年、時間外勤務もメイッパイして、なおさらだ。生活がすべて、仕事中心にまわっている。ストレス解消にコンサートや飲みに行くのは欠かさないが、時に、立ち止まって、じっくり考えてみることも必要か。文章を書いて、ふりかえってみよう、とあらためて思った。

出演交渉

東京都東久留米市 藤野 恵

「参加資格は音大出身者以外に限る」というユニークなピアノコンクールに、今年も出場した。プロ級のつわものから、楽譜とにらめっこの人までレベルはさまざまだったが、ピアノを通じ、年齢も生活も職業も関係なく同志になれるのは、たまらない魅力だ。悔しいことに、一次予選で敗退したが、来年は日ごろのパワーをいただくべく、田中編集長にも出演交渉をしようともくろんでいる。

老眼鏡

静岡県小笠部 鴨川典子(47歳)

視力だけには自信があったが、読み間違いが多くなつて、このごろ自信が持てなくなつた。

ある日、某社の遠近両用メガネレンズの宣伝を見た。遠くから近くまで快適に見えるつて、とても素敵。「老眼鏡」に代わる新しい呼び名を募集していたので、ハガキ一枚をさっそく出した。今まで、近くしか見えない時期、遠くしか見えない時期があつたつて、あなたなら何て名付けます？

子どものいる人いない人

千葉県船橋市 祥 まゆ美

私の友人の半分くらいは既婚者で子どもがいない。話題にすることは自分自身のことが多く、夫、子どものことは少ない。意識してそうしているわけではないのだが……。子どもがいない人を差別蔑視する風潮があり、特に女性は大変だ。せめて女性自身それを内面化せず、あるがままの自分を受容し自信を失わずにいてほしい。我が子を生み、育てたいという情より、強制された子生みにおどされて女は悩む。

ハムスターのいる暮らし

愛知県豊橋市 藤池弘子

今年の夏は暑い。わが家のハムスターもとても暑そう。お気に入りのお手製のお暑いらしく、外で寝ている。その寝顔寝姿は、とてもかわいい。

ハムスターを飼い始めたのは八年前。今のギンポで十一匹目になる。それぞれがかわいらしく思い出がある。それぞれ寿命も異なり死に方も違った。私はハムスター達に、そのことを一番教わった気がしている。

消し魔と閉め魔

山形県山形市 加藤智恵子

我ら老人宅に二匹の魔物が住む。

夫は電気暖房の消し魔。席を立つと電気は消され、真冬を除き暖房までも。電気代の節約か、環境保全のためかは不明だが、夫は陽の光で本を読む。私が暗がりの読書で視力をなくし、風邪引きで医者への助けを借り、保険料への圧迫を生んでしまった事実を理解しない。一方閉め魔は私。開けたら閉めない夫の後を追う。トイレも、時に社会の窓も。もう論外である。

選挙

東京都武蔵村山市 大沢陽子

都議選の結果を見て、これから放映されるはずの社民党のコマーシャル「本当に怖いことは最初、人気者の顔をしてやってくる」に共感しています。一つの党があまりに強くなるのは怖いことです。それに連立する党まである。これではなんでも思いのままです。

国政は、戦争や平和にも関るところです。参院選はムードにまでわされず、よくよく見きわめて投票してほしいと心底思います。

夫婦間にできた溝

東京都文京区 匿名

一昨年、夫の父が亡くなり、母と妹と同居することになり、母の家をリフォームして、昨年四月から一緒に暮らし始めた。

この一年、同居に関わることで何度も夫と衝突してきた。夫にとつての一番は母親なのだということを知られ、すっかり溝ができてしまった。しかし、このわだかまりに夫は気づかない。夫の母や妹とは、思いのほかうまくいっているというのに。

嫁は私だけ

沖縄県 匿名

主人は、六男三女の四男坊です。だが、嫁は私一人です。だから近い将来、姑のめんどろを見る覚悟はしていましたが、脳梗塞でおれた主人の姉が、今我が家に居候しています。義姉は、二十年ほど前に離婚し、子供が一人いますが疎遠状態です。

主人の姉を見る覚悟までしてなかった私は、精神的にも肉体的にも、パニック状態で、私のほうが脳梗塞で病みそうです。

家族旅行

東京都世田谷区 太田啓子(43歳)

気乗りしない息子を無理矢理連れ出し、家族三人箱根へと向かった。高校生ともなれば親との旅行に魅力がないのはわかっている。しかし、駒ヶ岳山頂から眺めた箱根連山と声ノ湖の美しさには、息子も素直に感嘆の声を上げていた。

このところ断絶しがちだった父子の間にも会話が戻り、有意義な夏の日となった。親のエゴを通したのかもしれないが、たまには、家族で旅行するのも悪くない。

Aさんのこと

東京都文京区 トト安田

「死んだら、骨は〇〇さんのお墓に入れてもらおう」と娘さん宛にマジックでしっかり書かれてあつた。うす暗い部屋の小さなちゃぶ台の上の白い紙。ドキッとした。Aさんは「立てなくなってしまうたの」と弱い声。布団の上、八十三歳、お一人暮らし。週四回の介護にお伺いしています。生きる気力が失せていくAさん。なんとかしなくては。心の中心では必死、声は穏やかに。踏ん張りどころです。

何の病気かな？

東京都足立区 島村君子

顔が火照ってきたので鏡を見ると真っ赤。「何の病気かな？」と心配。しばらくするともとに戻るがふらついて柱につかまることも。何回か顔が赤くなりふとその原因に気が付いた。私は昼食後、有り合わせの果物とヨーグルトを混ぜて食べる。その中に「堅いプルーンを柔らかくするためウイスキー漬けにしたもの」を必ず入っていたのだ。顔が真っ赤になったのは病気ではなく酔っ払ったのである。

無駄話が必要話

愛知県瀬戸市 武藤徳子

無駄なお喋りほど、親しい間柄に大切なものはない。親子・夫婦・恋人・兄弟姉妹・友人――。一緒にいることの楽しさは、とりとめのない言葉のキャッチボールをくり返すうちにお互いの心に広がっていく。猿のグルーミングのように、人は言葉を潤滑油にして愛情や信頼関係を深め合う。無駄話が減るにつれ必要な話も言い出せなくなり、ついに会話は消え絆はもろくなる。失ってから気づく大切さ。

『母と子』 10月号

(定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 子産み・子育てサポート

「今どきの母親は」と言われる世代の中で 坂本深雪

一女のもつ力を信じながら助産婦として活動—

アメリカ便利 スリーカウントが欲しい 山本 由美

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部

数学も言語活動のひとつ —教育問題を解くひとつの指針として—

教科書に燃えた夏 各地の父母・市民らはどう闘ったか 石井重雄

『母と子』

編著/久松英保・半田 博

4月増刊号

21世紀の母親と子育て

定価1050円(送料84円)

—「生きる力を育む」ための14章—

『母と子』

校長の挑戦 (青塚 武司 著)

定価1050円(送料76円)

—腎不全を抱えた小学校長の奮闘記—

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

ひとりひとり違う。 でも一緒に考える。

さまざまな社会の動きを伝えている新聞です。

結婚する。しない。子どもがいる。いない。年齢の違い、環境の違い、立場の違い、ひとりひとりがみんな違います。
でも、地球のこと、この国のこと、家族のこと、いろんなことを一緒に考えたい。



WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

私たちの情報紙

ふえみん
f e m i n

ふえみん婦人民主新聞

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-31-18

TEL 03 (3402) 3244、3238 FAX 03 (3401) 3453

Eメール femin@jca.apc.org URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

◆大阪支局

〒530-0041 大阪市北区天神町3-10-8-404 TEL&FAX 06 (6356) 0778

見本紙
送ります

プランケット版4ページ 毎月5日・15日・25日発行 購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料共)

私もひとこと わいふネット 質問 わいふネット 答え

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくべ

ジです。あなたの声をお待ちしています。投稿には、右の原稿用紙をご利用ください。い。

●タイトル、住所、氏名は一行めに、もし、

二〇字を超える場合には罫目にこだわらず、小さい字で。住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

キリトリ線

結

婚するとき、母と木工所へ行って一番上等な、まないたを買った。脚が二本ついた厚手のもので、これは一生ものだと思った。ところが年月が経つと黒ずんでくる。何回となくまないた削りに出したら、だいぶ薄くなってきた。

生涯^いまないたと決めている私には、この薄さは残りの寿命が短いようで、心細い。(山本)

や

さしいまなざしの、あたたかいイラストを「わいふ」に描きつづけてくださった田沼千恵さん。小さなレディたちのためにと、消費生活アドバイザーの経験を生かして、少女の初潮への心配を、イラストと文章でわかりやすく解説した「おれんじ通信」。亡くなられて本当に残念です。いつも笑顔でした。(望月)

海

辺のレストランで二十歳を過ぎて息子二人と夕食を共にした。アルコールがまわってきたころ、弟のほうで「かあさんは小学生まではこわかったなあ。結構きびしかったよな」と兄といつしよに、こんな事・あんな事と次々にでてくる。私の記憶の中にはきびしく育てた思いがなかったので意外な言葉だった。(野村)

浜

松の知り合いから茄子が送られてきた。長さがおよそ四十七センチもあり、あまりの長さにびつくりした。しかし焼き茄子にすると、とろりと溶けて甘くおいしい。

作るとき一本一本の茄子に添木をしてやらないと、重みで枝が折れたり、茄子が曲がってしまつらしい。ていねいに手を掛けて作ったものは格別の味がする。西に向かつて御礼。(水落)

あ

るグループの復活ライブが二十年ぶりに武道館であった。アリーナ席がとれたし、さあ、のりのりで楽しむぞと意気込んだのですが、ところが最初のエレキとシンセサイザーのグワンという音で、あれ右の耳がおかしい。ジイジイ虫が鳴きはじめた。ライブは楽しかったのだがジイジイ虫は翌日まで続いた。視力だけでなく耳も老化がはじまつたらしい。(成井)

先

日宮崎のシーガイアに行ってきた。地上45階建てだけあって遠方からも見えた。すごい格安クーポンだったからきつと5階あたりと思っていたが26階だった。すごかった。バスルームにはバスタブの他にガラス張りのシャワールームがあり、宮崎市街と海を見下ろせる部屋は20畳ほどもあった。つかの間のホテルライフだったがフレッシュには十分だった。(万波)

娘

と「ネコ劇場」というのを見に行つた。ロシアの劇団で、猫の芸と人間のバレエやアクロバットを組み合わせ、「胡桃割り人形」のさわりを演じて見せる。美猫がそろっているのに感心、ツナ渡りや逆立ちをするのに感心。

でも夏休み中なのに子供はほんの少数、若い女性と熟年カップルが多いのがふしぎだった。自分達はどうなの？(和田)

今

日こそ「ファミ」の原稿を仕上げなくちゃ、ワープロへ向かっていたら、夫が血相変えてとびこんできた。「おい、大変だぞ！ アメリカですごいテロが起きたぞ！」

ふだんテレビを見ない私も、さすがに腰を上げました。全く真珠湾攻撃もかくや、と思うすさまじさ。平和の尊さが身にしみます。しかしこれからどうなるのか、こわい！(田中)

「ファミ・ポリテイク」より

全国各地に多くの支部をもち、「早起き会」と称して公園などでラジオ体操をやっているグループ。奇特な人たちもいるものだと思っていました。これがれつきとした文部科学省の特殊法人であったのを知って驚きました。

この団体は、早起き会をしたり、精神訓話の講座を開催したり、小さな新聞を発行したり、さまざまな活動をしています。例えば新聞の編集者はファックスでやり取りすれば一分ですむ原稿用紙二、三枚の原稿を「取りに伺います」とわざわざやってくる、現代はなれした優雅さです。

そして新聞には、いかに夫につくし、主婦としてけなげに働いて幸福に暮らしているかという妻たちが始終登場します。加えて、「夫よりは早く起きましょう」「姑さんは長い人生を生き抜いてきた先輩。大切に仕えましょう」というような精神訓話も。この手の「法人」は他にもかなりあるのではないのでしょうか。そしてそのすべては税金によって賄われているのです。

NMS研究会より

NMS研究会のアドバイザーのうちの一人は、自分の子どもを実際にNMS方式で育てている若いお母さんが三人もいます。なかの一人がついこの間、七か月になった三人目の次男をつれて研究会に参加。驚きました。赤ちゃんは会に到着したときはママの胸でグッスリ寝ていたのですが、その後ときどきははいししながら、参加者の足の指をいじつてみたり、バッグのひもをひっぱったりして一人遊びをつづけ、ときどきおばさんたちの顔を見上げて見つめる、それで静かに二時間が過ぎたのです。二時間したら少し泣いておっぱいをもらい、その後ぐっすり寝てしまいました。

「なんてラクな子なんでしょう」と言えば、「だって、生まれたときからNMSで育ててますもん」とお母さんは笑うのです。NMSで育てて、大変だった子育てがようやくラクになり、もうひとり生む自信ができました、というお母さんがよくあるのもうなずけます。

老人ホーム情報センター便り

有料老人ホーム協会が、協会加盟ホームが発行するパンフレットや重要事項説明書の記載と、ホームの実態との乖離を調査する仕事に参加している。

七年前に見学したホームに、調査で再び訪れて驚いた。建物が改装されてすっかりきれいになっていた。施設長はまだ健在だった。多くのホームが介護保険法がスタートするのに合わせて、介護居室の改装をしている。以前訪れたホームも、再度調査する必要を感じた。

有老協の乖離調査で有料老人ホームの重要事項説明書の読み方がすっかり上手になった。

見学の折には重要事項説明書をもらうのをお忘れなく！

● 無料電話相談 毎週木曜日

● 面接相談も受け付けます（有料）。

電話でご予約下さい。

☎ 〇三三三三五二八五四

特集テーマ

二九四号(二〇〇二年二月一日発送)の特集テーマは、「夫婦げんか」です。

結婚したその日からけんかするカップルもあれば、五十年連れ添って全くけんかをしたことがない、という組み合わせもあるらしいです。

座談会 私も言いたい

二九四号のテーマは、「靴選びに苦労した!」です。

外国にあるものは何でも日本にある、という感じであらゆる商品がそろっている日本ですが、それでも「靴」というのはなかなか厄介なしろものです。幅のひろすぎる足、逆に

私の意見・あなたの意見

二九三号のテーマは、「子どもたちの茶髪、みとめますか」です。

街には茶髪が氾濫しています。ときにはまるで金髪にしている子も。

それにしても他人の子ならともかく、自分の子どもがギンギンの茶髪となると、親はど

占いでは相性の良し悪しを言いますが、なぜする人、しない人、差がつくのでしょうか。

しない夫婦は仲がよいのかというところでもありません。心が離れているので、互いに親密な接触をしないからけんかにならないこともあるのです。

小さくて幅のせまい足という面倒な条件のある上に、ほんとうにはきやすい靴の揃っていないお店が少ない。

今度参議院議員になった田嶋陽子さんは、靴選びの苦労だけですごく面白い長いレポートをのしていますが、それに似た苦労をなさった方は多いのではないのでしょうか。

んな反応をしめすのか……。最近では小学生にまで茶髪があるとか。

この問題は、何歳になつたらどこまで子どもの自由を認めるかという原則に絡んでくると思いますが、一般論でなく、ご自分の子どもが茶髪にしたらそれをどう考えるか、実際に、親としてどういう態度をとったかをリポ

猛烈にやりながら、びったりいつもくつついている仲がありますし、とにかく不可解、不思議なのが夫婦げんかの世界。あなたの経験と解釈(反省? 攻撃?)をどうぞ。匿名可。

字数 四千字前後

締切 十二月十日

ついに探し当てたいお店の情報などもおしえてほしいと思います。気楽なテーマです。ふるってご参加ください。

日時 十一月九日(金)午後二時より

場所 「わいふ」編集部

申し込みは電話で十月末日までに。

トしていただきたいのです。

他人の子の茶髪を見て感じる気持ちを書いていただいてもいいですが、なるべく切実にわが子とのからみを書いてください。

字数 千五百字前後

締切 十月二十五日

きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。
投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆「グライフ」わが家の歴史写真

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをぜひご覧ください。

一六〇〇字のコラム

(このコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆スバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦悶を語って。

◆夢これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多はず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

八〇〇字のコラム

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて明るい話題を。

◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返されている人、体験談を。

◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月日・定価を書くこと。本文は七六八字。

四〇〇字のコラム

◆笑える!

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直なご意見を求めます。

その他

◆私もひとこと (一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

◆わいふネット (一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい! それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三・一四行にまとめて)

投稿の

◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファックスではお送りにならないようお願いいたします)
- 他誌との二重投稿はお断りします。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める
ペンネーム・匿名希望の方は明記

タイトル 本文……	コラム名 ペンネーム・匿名 住所 会員番号 本名 電話番号	年齢 なくても可
------------------	--	-----------------

(1)

ページを明記
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を
載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

〈あて先〉〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五―二六

わいふ編集部

●投稿のせまり

編一集だより

◆二九一号のグラビアに、大きなミスがあったのをまずお詫びします。

文章の末尾五行が切れてしまっていたのです。

子供には恵まれなかったが「とし坊」はじめ多数のファンタジーチャイルドと生活を共にし、旅行にも常に同行していたが最近自分自身を運ぶのが精一杯である。

この部分がなかったのです。編集部ではいつもどおり再校を再びチェックして貰う（最後の校正刷り）としたの

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

に、出来上がったら切れていて、大騒ぎとなりました。

出力センターでMOを開いたとき、字詰めが変わってハミ出した分が切れたというので、コンピューターにはあり得るとか。

青焼きという、写真からイラストから、全部入って刷り上がった状態のものが発行まきわに出て来ますが、従来は写真の入れ間違いなどをチェックするだけ、文章は校正したものとして、印刷屋さんも「直し」をきらうため再校正はしません。

ところがDTP編集となると、出力センターの作業の際にこちらのMOに入っている文章の字詰めが動くことがあり、青焼きも文章の末尾は全てチェックしないと危ないのだそうです。こちらは不慣れなので、

コンピューターがそんなものとは想像もしませんでした。

こういうわけで、大変申し訳ないことになってしまいました。今後厳重にチェックをいたします。

◆長い間「わいふ」誌上にイラストを描いてくださっていた田沼千恵さんが、八月にご病気で亡くなりました。編集部一同とてもショックでした。二八八号までイラストをいただいていたのに。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

◆二九〇号でお知らせした「体験記公募」は、たくさんのご応募をいただいています。が、会員からのものは非常に少ないのです。締切りは十一月十日、まだ時間がありますので奮ってお寄せください。

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本してまいります。ご連絡がないと、お送りしてまいりますので、ぜひハガキかお電話を。

購読申込は……

わいふ◆292 (隔月刊)
●発行日 2001年11月1日
●編集部 わいふ編集部
●定価 620円(本体590円)
●年間購読料 4224円(送料共)
●印刷 平河工業社
●発行所 (株)グループわいふ
〒162-0062
東京都新宿区市谷加賀町
2-5-26
電話 (03) 3260-4771
FAX (03) 3260-4773
●郵便振替 001503-110430
加入者名 わいふ編集部

N

ew

M

othering

S

ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

この子をどう育てるか、自分の力次第…
 と思っはいませんか？ 肩の力を抜きま
 しょう。子どもに「与える」ことに熱中し
 ているうちに、子どもが自ら伸びる力がだ
 んだん衰弱して行くおそれがあります。

子育ては
NMS !!



▼英語、リトミック、読み書き
 ……二歳にならない幼児をもつ
 ママに「三歳からでは遅すぎる」
 というささやきで教材を売りつ
 けたり、教室に誘ったりする業
 者がたくさんあります。
 ▼たしかに英語や読み書きを早
 く覚えた子は、幼児期にはそれな
 りに他の子よりできるでしょう。
 でも、いつもそのリズムで先
 手をうって行かなければ、遅く
 始めた他の子にやがて追いつか
 れてしまいます。

「先手を打って」いられるでしょ
 うか？
 その上こわいのは、自分が学
 びたいと思うより先に、いつも
 親に与えられていた子どもは、
 一番大切な思春期に、やる気を
 なくしてしまうことです。

早期教育よりずっと大切なことは、乳
 幼児期に「やる気」を養う子育てをす
 ることです。食えるとき、遊ぶとき、
 子どもの「やる気」を培うのが、お母
 さんの役目です。NMSがそのノーハ
 ウをお伝えします。

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26

NMS研究会へ。 ☎03-3260-5500 FAX同3260-9398

▼MINERVA 21世紀福祉ライブラリー

高瀬高明

9 生きがい探し

12の物語

— 高齢時代の光と影

現代を生きるシニア世代たちが病氣、お金、お墓、家族との関係などそれぞれの問題をそ抱えつつ、自ら行動をおこして新たに生きがいを見つけていく様を描く。一八〇〇円

全国39地方紙に連載!!
「生きる絆求めて」改題

- ① 終末期医療への願い 宮尾茂子著 一四五六円
- ② 生活保護ケースワーカー奮闘記 三矢陽子著 一八〇〇円
- ③ わたしは盲導犬イエラ 日比野清監 一八〇〇円
- ④ 輝くわが最晩年 二〇〇〇円
- ⑤ 盲導犬誕生 (福)日本ライトハウス監 一六〇〇円
- ⑥ ともに生き ともに働く 山口光一著 一八〇〇円
- ⑦ 夢子がおばあちゃんになるとき 平野隆彰著 一八〇〇円
- ⑧ 使ってみた介護保険 安宅 温著 一八〇〇円

地域でとりくむ

みんなで育てる介護保険

樋口恵子編 ● 女性が進める介護の社会化VI 高齢社会をよくする女性の会第19回全国大会の内容をもとに編集。家族だのみの介護から地域ぐるみの介護への提言。二〇〇〇円

風かおる「終の棲家」

風の村記録編集委員会著 / 設計監修 外山義 ● もしわたしが暮らすとしたら…、から始まった私たちの特別養護老人ホーム作り 「風の村」誕生までのあゆみ。一八〇〇円

アメリカ女性議員の誕生

森脇俊雅著 ● 下院議員スローターさんの選挙と議員活動 ケンタッキー州ハラン郡炭鉱町生まれの女性が、ワシントンにいたるまでのあゆみを見事に描き出す。二四〇〇円

資料集

▼初の総合的資料集!

男女共同参画社会

関哲夫編 ● 世界・日本の動き、そして新たな課題へ 男女共同参画社会実現への動きがこの一冊でわかる初の総合的資料集。関係者必携の書。A5判・632頁 三六〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ※宅配可/価格税別
TEL 075-581-5191/FAX075-581-0296 <http://www.minervashobo.co.jp/>

雑誌 09859-11